

## (4) 無脊椎動物

### 1) 昆虫類

#### ①概説

青森県の昆虫相に関する調査研究は、明治時代に入ってから当時の内務省勸農局や県の試験研究機関などによって、特に農業害虫に関連して進められた。また、青森博物研究会や青森県生物学会などを結成し、博物学的知見からの調査研究も併せて継続して行ってきた。この中で「青森県博物目録」第2巻昆虫編（石村・佐藤，1941）が発行され、青森県内に分布する昆虫目録がまとめられた。その後、昆虫類全目に関する目録はまとめられていない。

青森県の昆虫に北限種が多い大きな要因となっているのが津軽海峡の存在である。この生物地理学上の分布境界線の重要性から、青森県には古くから多くの昆虫研究者が訪れ調査研究を行い、学会誌、大学紀要などにその結果を公表しているが、調査場所も限られ、対象も特定の昆虫群に偏っており、まだ県内の昆虫相全体の解明には至っていない。

絶滅危惧種の選考に当たっては、前回の「青森県の希少な野生生物、改訂版」（2010）及び環境省「レッドリスト2018」、また国県内外の学会誌、研究会誌、同好会誌、高校生物部誌などの報告、よせられた意見などを参考に委員の再三に渡る協議を経て最終候補種案を決定し、パブリック・コメントを経て、選定種が最終的に決定された。なお、本改訂版のハチ目などについては、長年ハチ目について調査研究され情報蓄積していた山田雅輝氏が他界したため代わって山内が担当することとし、前回の改訂版（2010）などを参考に執筆した。

本書の目、科、種の配列は主に平嶋・森本・多田内（1989）、環境庁（1995）に依り、日本昆虫学会編の日本昆虫目録（2013-2017）や図説、図鑑及び目録などを参考に配列した。特にチョウ目では駒井・吉安・那須・齋藤（2011）、ハチ目は寺山（2016）を参考にし、できるだけ新しい分類体系を取り上げ、委員の協議により決定した。

また、本改訂版では、できるだけ今後の利用及び活用の面から、県内分布などについてはその出典を明示したが、その他については「青森県の希少な野生生物」（2000）及び改訂版（2010）の引用文献も参考になる。

青森県の絶滅危惧種（昆虫類）の選定種は、「青森県の希少な野生生物」（2000）での昆虫類はE Xランク（絶滅野生生物）3種、Aランク（最重要希少野生生物）29種、Bランク（重要希少野生生物）15種、Cランク（希少野生生物）54種、Dランク（要調査野生生物）116種、L Pランク（地域限定希少野生生物）2種の合計219種が選定された。10年後の「青森県の希少な野生生物、改訂版」（2010）ではE Xランク3種、Aランク23種、Bランク24種、Cランク93種、Dランク121種、L Pランク1種で46種類増えて265種類となった。更に10年後の今回の「青森県の希少な野生生物、改訂版」（2020）ではE Xランク7種、Aランク19種、Bランク34種、Cランク152種、Dランク108種、L Pランク0種で、55種類増えて320種類となった。

今回の改訂では、前回と比較しE XランクにAランクから新たにカトリヤンマ、メガネサナエ、ヤマキチョウ、オオウラギンヒョウモンの4種が絶滅と指定変更され、合計7種類が青森県から絶滅したと確認された。また、AランクにはCランクからマルコガタノゲンゴロウが指定変更された。BランクにはAランクからウマノオバチが、Cランクからはホソハンミョウ、サロベツナガケシゲンゴロウ、オオシマゲンゴロウ、ゲンゴロウモドキ、Dランクからはクロスジカメノコハムシがランク変更になった、また選定種削除がクロヤガ、ムツチャバネコメツキの2種類、新選定種としてBランクにコノシメトンボなど6種類が、Cランクには35種類、Dランクには17種類の合計58

種類が新たに加わった。ランク変更及び新指定種については巻末に理由を付記して一覧表で示したが、全体的に池沼及び湿地などに生息する種類が多くを占めており、湖沼群の自然環境の衰退が懸念される。

初回選定から20年後には選定種が101種類も増加している。特にEXランク（絶滅野生生物）に指定された種類が3種から7種と4種類も増加したことが特記される。レッドデータブックに対する関心と環境保全に対する関係機関の啓蒙活動が行われており、情報の収集と蓄積が図られてきたことも選定種の増加の要因となっている。本選定種の他にも環境の変化の大きい里山・湿地などに生息する昆虫など、今後注目すべき種類については次回改訂に向けて、今後とも情報を収集し蓄積することが肝要である。

(山内智)

②本文

トンボ目 ヤンマ科

EX

和名 カトリヤンマ

環境省：該当なし

学名 *Gynacantha japonica* Bartenef

**【形態的特徴】** 全長：70～74mm。中型の細身のヤンマである。頭部と胸部は茶褐色と緑色からなる。腹部は黒色で、背面に細い青色斑、腹面に黄褐色斑がある。雄では第2腹節が鮮やかな水色となる。雌雄ともに尾部付属器が長く、第10腹節の3倍強である。

**【選定理由】** 1960年半ばまでは各地で発見・記録されていた（岡田, 1958；奈良岡, 1977）。しかし、その後は発見されなくなり、1973年に三戸町で得られた1雄（蹴揚ら, 1985）が最後の確認となっている。それ以降現在まで47年間、発見されていない。

**【分布と生態の概要】** 日本全国・台湾・中国に分布する。丘陵地や低山地の樹林のある池沼、湿地や水田に生息し、成虫は8～10月に見られる。黄昏活動性が強く、日の出や日没前後に活発に活動し、日中は暗がりの林の中などで静止して過ごす。雌は単独で土や朽木に産卵する。幼虫越冬し、翌年羽化する年一化性である。

**【特記事項】** 東北地方では福島県以外、ほとんどの県で発見されなくなっている。（奈良岡弘治）

トンボ目 サナエトンボ科

EX

和名 メガネサナエ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Stylurus oculatus* (Asahina)

**【形態的特徴】** 全長：59～64mm。黒色の地に黄斑を有する中型のトンボ。腹部第7～9節が広がっている。ミヤマサナエと酷似するが、腹部第8節に大きな3個の黄斑があること、後肢腿節が約1cmと短いことなどで区別できる。

**【選定理由】** 1962年までは県内各地の河川で見られたが（奈良岡, 1977）、1963年以降河川改修などで少なくなり、その後発見されなくなった。1962年8月、青森市浪岡の十川で採集された5雄（奈良岡, 1977）が確実な最後の記録となる。その後58年間、確認されていない。

**【分布と生態の概要】** 日本特産種で、東北地方から近畿地方に分布する。平地の湖、河川の下流域に生息し、成虫は7～9月に見られる。雄は沼岸や川岸をパトロール飛翔する。雌は岸や砂地に静止して卵塊を出し、打水産卵する。幼虫は腹部第9節が著しく長く、川底の泥に潜って生活する。

**【特記事項】** 青森県教育委員会（1972）は六ヶ所村市柳沼で記録し、原子（1992）は十和田市で目撃しているが、いずれも具体的なデータ・写真・標本などの確証がない。（奈良岡弘治）

トンボ目 エゾトンボ科

EX

和名 トラフトンボ

環境省：該当なし

学名 *Epitheca marginata* (Selys)

**【形態的特徴】** 全長：50～56mm。黒褐色の地に黄色斑を有する。オオトラフトンボに似るが、雄の尾部付属器の形状の違い、腹部側面の黄色斑は各節の約1/2と短いこと、および、通常、雌の翅の前縁に黒褐色条があることなどで区別できる。

**【選定理由】** 1937年6月13日に青森市で2頭の雄が採集されている（Ishimura, 1938）。しかし、それ以降、現在まで83年間、県内では発見されず、生息が確認されていない。

**【分布と生態の概要】** 本州・四国・九州、海外では朝鮮・中国に分布するが、東北地方では少ない。平地や丘陵地の池・沼に生息し、成虫は5～6月に出現する。水上で飛びながら5分から20分ほど交尾した後、雌は岸辺に止まって卵塊を放出し、飛び立って水面の浮遊植物に付着させる。卵塊は水の中でゼラチンの細長い卵紐となる。卵は20～30日で幼虫が孵化する。幼虫は秋迄に終齢となり、そのまま越冬して翌春羽化するという年1化性である。

**【特記事項】** 1930年代の県内の生息状況の記録が無く、分布状況は不明である。（奈良岡弘治）

**トンボ目 トンボ科****EX**

和名 ムツアカネ

環境省：該当なし

学名 *Sympetrum danae* (Sulzer)

**【形態的特徴】** 全長：30～33mm。未熟虫は黄色の地に黒色斑を有するが、雄は成熟すると全体が黒くなる。雌も黒っぽくなり、翅の基部に橙色斑があり、産卵弁が下方に突き出ている。

**【選定理由】** Oguma (1922) と奥村 (1942) は「青森」を分布地とした。しかし、具体的なデータは記録されなかった。それ以降、少なくとも80年間は発見されず、生息が確認されていない。

**【分布と生態の概要】** 北方系のトンボで、岐阜県以北の本州高地の数カ所と北海道各地、国外ではヨーロッパからシベリア、カムチャッカを経て北アメリカに分布する。日当たりのよい湿原に生息し、成虫は7月～10月にかけて見られる。卵で冬を越し、翌年の5・6月に孵化して7月から9月にかけて羽化する年1化性である。雌雄連結で草上を飛びながら打泥・打水産卵をする。

**【特記事項】** 八幡平には現在も生息地があるので（尾園ら, 2013）、過去には八甲田山系の湿原に分布していた可能性もある。奈良岡（2004）は深浦町で1頭の雄を確認し写真撮影したが、中国大陸からの飛来個体の可能性が高く、青森県で発生したとは考えられていない。（奈良岡弘治）

**チョウ目 シロチョウ科****EX**

和名 ヤマキチョウ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Gonepteryx rhamni maxima* Butler

**【形態的特徴】** 雄の翅表は鮮やかな濃黄色で、雌は淡い黄白色。大型のシロチョウの仲間。

**【選定理由】** 本県が北限の希少種で1960年代まで県東南部で散発的に記録されていたが、以降の調査で確認されていない。1968年の記録（田子町、村上・佐藤, 1968）を最後に絶滅と判断した。

**【分布と生態の概要】** 本州の東北地方（本県・岩手県）と中部地方（長野・山梨県ほか）に限定された特異な分布域を示す。県内では東南部の特産種で、八戸市・十和田市・五戸町・階上町・田子町など、すべて合わせても10数頭の記録のみ。成虫は7月下旬から羽化し成虫で越冬。県内での生態的な知見は乏しいが、県外では、幼虫はクロウメモドキ科のクロツバラを食べる。

**【特記事項】** 記録がある地域の調査でクロツバラの自生は確認できなかった。この植物の生育環境は林縁から草原で、1960年代までは薪炭林としての雑木林や牛馬飼料の採草地としての草原に食餌植物を含む環境が保持されていたと考えられる。その後、林縁は伐採や道路の拡幅工事により、草原は灌木の侵入でブッシュ化し生息環境が消失した可能性がある。（室谷洋司）

**チョウ目 シジミチョウ科****EX**

和名 オオルリシジミ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Shijimiaeoides divinus barine* (Leech)

**【形態的特徴】** 大型のシジミチョウの仲間、瑠璃色の羽を持つことからこの和名がつけられた。

**【選定理由】** 生息環境の悪化とともに激減し、1978年6月の1雌（岩木山麓）を最後に絶滅。

**【分布と生態の概要】** 本州（東北・中部地方）と九州の3地域に限られた特異な分布を示し、東北地方ではすべて絶滅（室谷, 2007）。県内では津軽地方に限られ、生息が確認されていたのは青森市三内・豆坂高原（現青森空港付近）・弘前市や五所川原市・鶴田町にまたがる岩木山麓など合わせて16か所。年1回の発生で、幼虫はマメ科のクララを食べ、蛹で越冬する。

**【特記事項】** 生息環境はアズマギク・オキナグサなど陽地性植物が多い草原で、その中にクララが繁茂する地域に限られていた。このような草原は労役用牛馬の飼料採草地で、1960年代までは良好な環境が各所に見られた。生息地は平坦な場所が多かったことから、開拓や開発の対象になりやすく、宅地・畑・果樹園・造林地・空港・ゴルフ場・公園・産廃処分地・墓地などに変貌し、1970年代までに生息地は順次消滅していった（室谷, 1989）。（室谷洋司）

和名 オオウラギンヒョウモン

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Fabriciana nerippe* (C. et R.Felder)

**【形態的特徴】** 前翅長は雄35mm、雌40mm前後で、雌はヒョウモンチョウ類で最も大型。

**【選定理由】** 本県が北限の生息地。県内各地で散在的に記録され個体数は少なくなかった。1970年代から数を減じ、県東南部地方を中心に集中的に調査したが確認できなかった（室谷, 1995）。1985年の田子町の記録（一戸, 1991）が最後。全国的にも多くが絶滅で、県内でも絶滅と判断した。

**【分布と生態の概要】** 本州・四国・九州に分布。東北地方では分布が広いが局地的。本県では、時としておびただしい個体数が発生することがあった（室谷・阿部, 1962）。成虫は7月下旬から出現し、年1回の発生。生息環境は平地から低山地までの日当たりの良い草原で、幼虫の食草であるスミレが多いこと、アザミ類など豊富な成虫の吸蜜源植物が必要とされる。

**【特記事項】** 本種が発生する草原は牛馬の飼料用採草地としてきたシバ草原が主なもので、農業近代化で牛馬を必要としなくなったことから、草原はススキや灌木の生い茂る密な植生へと変貌した。したがって、食草や吸蜜源の多い生息環境が消失し絶滅につながった。 （室谷洋司）

**トンボ目 アオイトトンボ科****A**

和名 コバネアオイトトンボ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Lestes japonicas* Selys

**【形態的特徴】** 全長：33～41mm。体の背面は光沢のある金属緑色、腹面は淡黄色を呈する。近似種と紛らわしいが、成熟しても胸部に白粉を帯びないこと、頭部の後ろが黄白色であること、雄の尾部下付属器が短いこと、および、未熟雌の胸が橙褐色であることなどで区別できる。

**【選定理由】** 1960年代初めまでは県内各地で見られたが（奈良岡, 1977）、その後、ほとんどの地域で絶滅した。現在は青森市・五所川原市・深浦町・野辺地町の4か所に生息しているに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。いずれの生息地でも個体数は極めて少なく、絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 本州・四国・九州、国外では朝鮮・中国に分布する。平地や丘陵地の池・沼・湿地に生息し、成虫は7月から10月まで見られる。活動時間は午前と午後に分かれ、真昼頃は抑制される（奈良岡, 2007）。産卵は雌雄連結で比較的柔らかな植物の組織内に行く。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 生息地の破壊と乾燥を防ぐとともに、水質汚染の防止。

**【特記事項】** 六ヶ所村の生息地は、湿地と沼が干上がり2010年に絶滅した。（奈良岡弘治）

**トンボ目 カワトンボ科****A**

和名 アオハダトンボ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Calopteryx japonica* Selys

**【形態的特徴】** 全長：50～55mm。雄は全体が金属緑色で、腹部第9・10節腹面は白い。雄の翅は青藍色に輝き、縁紋が無い。雌の翅は淡褐色で乳白色の偽縁紋がある。

**【選定理由】** 1960年代までは県内数か所で見られたが（奈良岡, 1977）、現在の生息地は八戸市・三戸町に限定される（奈良岡ら, 2018）。個体数も多くなく、河川改修などで絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 本州と九州、国外では朝鮮・中国東北部・ロシアなどに分布する。平地や丘陵地の水生植物の豊富な河川の中流域に生息する。成虫は6～9月に出現する。雌は単独で水中の植物組織内に産卵する。潜水産卵も行われる。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 河川改修と水質汚染が最も脅威であり、改修に当たっては十分注意する必要がある。

**【特記事項】** ハグロトンボと似ており、同定には注意を要する。ハグロトンボでは翅が黒く、雌雄ともに縁紋が無いことと、雄の腹部先端腹面が白くないことで区別できる。（奈良岡弘治）

**トンボ目 イトンボ科****A**

和名 カラカネイトトンボ

環境省：該当なし

学名 *Nehalennia speciosa* (Charpentier)

**【形態的特徴】** 全長：23.5～30mm。華奢で、若い成虫は胸部が金属緑色、腹部は赤銅色の美麗種。成熟するにつれて全体が茶褐色となる。

**【選定理由】** 1970年代までは津軽地方と下北半島の湿地に多かったが（奈良岡, 1977）、1980年代以降ほとんどの生息地で絶滅した。現在は青森市・五所川原市・三沢市・深浦町・野辺地町・六ヶ所村・および東通村の7か所で見られるに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。いずれの生息地でも個体数は著しく少なく、乾燥化などにより湿地が消滅しつつあり、絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 北方系の種で関東北部から東北地方、北海道、国外では朝鮮・ロシア・ヨーロッパに分布する。スゲなど草丈の低い湿地に生息し、成虫は6～8月に見られる。交尾時間は、開始時刻に関係し、早朝の5時から午後の30分位まで次第に短くなる。雌が単独で産卵する。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 生息地である湿地の破壊と乾燥を防止することが最も優先される。また、なるべく生息地の攪乱をしないことが重要である。（奈良岡弘治）

**トンボ目 イトトンボ科****A**

和名 オオセスジイトトンボ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Paracercion plagiosum* (Needham)

**【形態的特徴】** 全長：41～50mm。大型のイトトンボで、黄緑色の地に黒斑を有する。胸部の肩の黒条に黄緑色の線が入り、セスジと言われる。雄は成熟すると全体が青色に変わる。

**【選定理由】** つがる市屏風山地域と五所川原市の数か所にのみ生息する（奈良岡ら, 2018）。2003年頃までは多数見られたが、その後、生息する沼、および個体数が著しく減少した。現在は屏風山の冷水沼で割合多く見られるに過ぎない。今後、減少する恐れがあり、絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 東北地方・新潟県・関東地方の数か所、国外では朝鮮・中国・ロシアに分布する。ヨシなど抽水植物の多い池・沼に見られ、成虫は6～8月に出現する。連結ペアは朝5時過ぎから生じるが、交尾は気温が上がる7時頃まで見られない。産卵は雌雄連結で沼内の水面の植物に行い、9時過ぎから15時頃に見られる。

**【特記事項】** 外来種のウシガエルやオオクチバスなどの食害が考えられる。また、沼の環境破壊や水質汚染を防ぐことが重要である。 (奈良岡弘治)

**トンボ目 ヤンマ科****A**

和名 ヤブヤンマ

環境省：該当なし

学名 *Polycanthagyna melanictera* (Selys)

**【形態的特徴】** 全長：80～87mm。大型のヤンマで未熟虫は黄色の地に黒色斑がある。成熟雄では複眼がコバルトブルーに輝き、黄色斑が淡青色に変化する。雄の第10腹節背面に突起がある。雌では腹部先端下面に4本の針状突起がある。

**【選定理由】** 1950年代までは各地で見られたようであるが（岡田, 1952；岡田ら, 1953）、その後ほとんど発見されなくなった。最近では、2013年と2014年に弘前市で各1雌、2016年に六ヶ所村で1雌、青森市で1雄、2017年につがる市で1雌が確認されたに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。

**【分布と生態の概要】** 本州・四国・九州および南西諸島に広く産し、国外では朝鮮・台湾・中国に分布する。成虫は7～9月に出現し、平地～丘陵地の樹林に囲まれた池沼に見られる。黄昏活動性が強く、夕方や曇って照度が下がった時に飛翔することが多い。暗がり求めて家屋内に浸入することがある。産卵は雌が単独で、あまり日の当たらない、水際の土やコケに行く。

**【特記事項】** 黄昏飛翔性のために、発見されることが少ないことも考えられる。 (奈良岡弘治)

**トンボ目 サナエトンボ科****A**

和名 ヒメサナエ

環境省：該当なし

学名 *Sinogomphus flavolimbatus* (Matsumura in Oguma)

**【形態的特徴】** 全長：40～44.5mm。小型のトンボで、胸部前面には「ハ」字型と「T」字型の黄条があり、側面の黒条は1本。腹部第3～7節に黄緑色の環状斑がある。雄の尾部上付属器は白い。

**【選定理由】** 外ヶ浜町（鈴樹ら, 1989）、深浦町（奈良岡, 1998）、および平川市碓ヶ関（高橋ら, 2005）で確認されているに過ぎない。いずれの生息地でも個体数が少なく、絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 日本特産種で、本州・四国・九州に分布している。産地が局所的で、東北地方では少ない。山間の溪流や河川の上・中流域に生息する。成虫は6月下旬から7月の始めに羽化し、9月まで見られる夏型のサナエトンボである。成熟成虫は浅瀬の日当たりの石に止まり、雌の飛来を待つ。雌は水際の植物や石に止まるか、浅瀬をホバリングして卵を放出し、打水産卵する。幼虫は砂や石の下に潜っており、掴むと硬直して擬死を装う。

**【特記事項】** 県内に分布している小型のサナエトンボ類は色彩・形態が酷似しているため、同定には注意を要する。 (奈良岡弘治)

**トンボ目 サナエトンボ科****A**

和名 ホンサナエ

環境省：該当なし

学名 *Shaogomphus postocularis* (Selys)

**【形態的特徴】** 全長：46～52mm。胴体がずんぐりした中型のサナエトンボ。黒色の地に黄緑色斑紋がある。胸部前面に太い一対の「Z」字状紋を有する。腹部第7～9節はやや広がる。雄の尾部上付属器は下方に湾曲する。下付属器の先端上方に1個の小さな棘がある。

**【選定理由】** 1960年代までは県内各地に普通に見られたが（奈良岡, 1977）、その後、ほとんどの地域で絶滅し、現在はむつ市・深浦町（鈴樹ら, 2006）、八戸市、おいらせ町、東通村に生息するだけである（奈良岡ら, 2018）。いずれの地域でも個体数が少なく、絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 日本特産種で、北海道・本州・四国・九州に分布する。平地や丘陵地の小川や水路に生息する。成虫は5～6月に出現する。雌は交尾後に水辺の植物に止まって卵塊を放出し、それを打水産卵する。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 小川や水路の乾燥・破壊が進むといなくなる。特に水田の休耕による用水路の廃棄の影響が大きい。（奈良岡弘治）

**トンボ目 エゾトンボ科****A**

和名 ハネビロエゾトンボ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Somatochlora clavata* Oguma

**【形態的特徴】** 全長：51～64mm。金属緑色の中型のトンボ。未熟成虫では胸部側面に2本の黄色条があるが、成熟すると消滅する。腹部第4節以降は黒く無斑である。翅の基部周辺が淡褐色となる。雄の尾部上付属器の下面中央部が下に膨らんでいる。雌の腹部第2、3節が胸部と同じ位か、より大きい。産卵弁は長く、三角状にななめ下方に突出し、先端が前方に反る。

**【選定理由】** 1960年頃までは各地に見られたが（奈良岡, 1977）、最近ほとんど発見されず、2010年に1雌、2012年に1雄1雌が東通村で得られているに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。

**【分布と生態の概要】** 北海道・本州・四国・九州、朝鮮に分布する。丘陵地や低山地の湿地・湿原に生息し、成虫は7～9月に発見されている。未熟成虫は林間で生活するが、成熟雄は流水域をパトロールする。雌は単独で薄暗い小流のよどみに打水産卵する。幼虫は湿地の小流や湧水に生息する。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 湿地や湿原の破壊と水質汚染を防止することが肝要である。

**【特記事項】** 同属のエゾトンボとの区別が難しいので注意を要する。（奈良岡弘治）

**トンボ目 エゾトンボ科****A**

和名 モリトンボ（キバネモリトンボ）

環境省：該当なし

学名 *Somatochlora graeseri* Selys

**【形態的特徴】** 全長：51～57mm。金属緑色の中型のトンボ。通常、翅の基部に黄褐色斑があるが稀に消失する個体もある。雌の産卵弁は四角で短い。

**【選定理由】** 県南の三八地方（岡田, 1966）と十和田市、六ヶ所村、東通村の数か所で確認されている（奈良岡ら, 2018）。いずれの生息地でも個体数が減少していて、最近では発見されないことが多く、絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 以前は岩手県や新潟県でも確認されたが、現在は北海道と青森県、国外では朝鮮・ロシアに生息する。平地や丘陵地の池・沼、湿地に見られ、成虫は6～9月に出現する。雌は薄暗い沼岸の浅瀬などに打水産卵をする

**【生存に対する脅威と保存対策】** 生息地の池・沼・湿地の破壊と汚染を防ぐことが肝要である。

**【特記事項】** 同属のタカネトンボでも翅の基部が黄褐色のものがある他、近似種との区別が難しく、注意を要する。（奈良岡弘治）

和名 ハッチョウトンボ

環境省：該当なし

学名 *Nannophya pygmaea* Rambur

**[形態的特徴]** 全長：17～21.5mm。日本産トンボ類中、最小のトンボで、世界でも最小の部類に属する。未熟成虫は橙黄色であるが、成熟するとオスは全体が赤化し、雌ではやや黒っぽくなる。

**[選定理由]** 1970年頃までは県内各地に見られたが（奈良岡, 1977）、最近では生息地する湿原の埋め立て・乾燥などでほとんど絶滅した。現在、青森市と野辺地町などの数か所で生息が確認されているに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。今後も乾燥や開発などにより絶滅が危惧される。

**[分布と生態の概要]** 本州・四国・九州、国外では朝鮮・東南アジア・オセアニアなど、広範囲に分布する。平地から高地のモーセンゴケ・ワタスゲ・トキソウなどの繁茂する浅い湿地に生息し、成虫は5月から8月まで見られる。交尾時間は短く10秒前後で、雌は直ちに単独で打水産卵をする。雄がその周りで警護飛翔することがある。湿地の周辺で生活するが、稀に遠くまで移動し、休耕田に発生することか知られている。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 生息地である湿地の乾燥と埋め立ての防止。（奈良岡弘治）

和名 タガメ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Lethocerus deyrolli* (Vuillefroy)

**[形態的特徴]** 国内最大の水生昆虫で体長は約50～60mm。体は褐色で、前脚が太く捕獲脚となり、後脚は遊泳脚となる。

**[選定理由]** 国内では北海道・本州・四国・九州などに分布するが、局地的で個体数も少ない希少種である（環境省, 2006, 2015）。青森県内でも1978年平川市石郷、新郷村西越（阿部, 1980）以降の採集例はなく、絶滅が危惧される。

**[分布と生態の概要]** 本種の青森県内の産地はきわめて局限され、上記以外では1940年むつ市田名部（標本確認）、つがる市森田、黒石市（石村・佐藤, 1941）、1947年黒石市牡丹平（成田, 1989a）、1953年八戸市（福田, 1984）、1957年岩木川（西田, 1959）などの記録がある。本種は、水量が豊富で、水草の豊富な止水・静水域に生息する。走光性が強く、雄は卵塊を保護する行動が見られる。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 青森県内では従来津軽地方を中心に、水田地帯に普通に見られていたが（阿部, 1980）、水田地帯での農薬散布や湖沼の水質汚濁などにより激減したと思われる。また、走光性の強い本種は外灯増設も脅威要因となっている（環境省, 2015）。

**[特記事項]** 灯火にも飛来することから（橋爪, 1994）、水域周辺部での灯火飛来個体にも注意が必要である。（山内智）

**コウショウ目 ゲンゴロウ科****A**

和名 マルコガタノゲンゴロウ

環境省：絶滅危惧ⅠA類

学名 *Cybister lewisianus* Sharp

**【形態的特徴】** 体長21～26mm。体型は卵形で、背面は緑色を帯びた黒色で、腹面は黄褐色で、全体に強い光沢がある。

**【選定理由】** 本種は、全国的にその分布は局地的で個体数は少なく、近年、池沼の開発、外来種の侵入、採集圧などから生息環境が悪化し、その生息地が激減している（環境省, 2006, 2015；森・北山, 1993）。青森県内では、屏風山湖沼群での生息が確認されていたが、近年の採集例は全くなく、絶滅したと考えられる（永幡, 2016）。

**【分布と生態の概要】** 国内での分布は、現在は東北・北陸・九州の一部で数か所見られるだけである（環境省, 2015）。青森県内では、以前に屏風山湖沼群のつがる市袴形沼・平滝沼で生息が確認されていた（永幡, 2016）。本地域以外からの生息記録は報告されていない。水質の良好な水生植物の良く繁茂した池沼に生息する。肉食性で成虫越冬し、その寿命は2～3年と言われている（環境省, 2015）。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 池沼への外来魚の放流による水草減少や環境悪化・開発による池沼の減少、過度な採集圧などが脅威要因となっている。湖沼の保全対策と採集自粛が必要である。

**【特記事項】** 屏風山地区の湖沼群及び湿地帯には、県内外の採集者が多く、池沼や湿地に無造作に入り込み、環境悪化の要因になっている。（山内智）

**ハチ目 ミツバチ科****A**

和名 ナミルリモンハナバチ

環境省：情報不足

学名 *Thyreus decorus* (Smith)

**【形態的特徴】** 体長は13～14mmとミツバチ科の中では大形である。体色は黒色で、体に青緑色の毛の斑紋が見られる（平嶋・森本, 2008）。

**【選定理由】** 山田（2010, p.240）によると、県内では約80年前の八戸市沢里（石村・佐藤, 1941）と55年前の平川市唐竹（山田, 1999）などの記録があるが追加記録は見られない。本種の寄主であるコシブトハナバチ類も減少している。

**【分布と生態の概要】** 国内では本州・四国・九州・種子島・屋久島などに分布するが、国内では個体数減少し、生息地も限られる（環境省, 2015）。県内でも上記2地域以外の記録は見られない。山田（2010, p.240）によると平地から低地にかけて生息し、成虫は8～10月に出現しアザミなどの花から吸蜜する。Maeta *et al.* (1996) によるとシロスジコシブトハナバチとスジボソコシブトハナバチに労働寄生するが、本県では山田（2010, p.240）によると労働寄生は前種の1例の記録しかなく、後種も寄生事例は極めて少ない。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 開発等による里山の環境悪化と衰退、それに伴う寄主の減少も脅威となる。

**【特記事項】** 別名ルリモンハナバチ

（山内智）

**チョウ目 セセリチョウ科****A**

和名 チャマダラセセリ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Pyrgus maculatus* (Bremer et Grey)

**【形態的特徴】** 黒褐色の地色に白点をちりばめた小型のセセリチョウで、他種との区別は容易。

**【選定理由】** 本県をはじめ県外生息地でも激減あるいは絶滅している。筆者らの調査では1990年代までは生息を確認できたが、個体数は極めて少なかった。

**【分布と生態の概要】** 北海道東部・本州中部以北・四国に分布。本県では津軽・下北両半島を除く県内各地で確認され（室谷・阿部, 1962）、生息環境は山地草原や山間の草地に限られる。日向を好む性質があり、幼虫はバラ科のキジムシロ・キンミズヒキなどを食べる。

**【特記事項】** 個体数は多くないが、1960年代前半までは毎年安定した発生をみせていた。生息地の多くは牛馬飼料の採草地としての半人為的草原で、食草が豊富で良好な環境が維持されていた。1960年代後半から農業の機械化で牛馬を必要としなくなり、採草が行われなくなった。草原は放置あるいは開拓・開発によって、畑・果樹園・造林地に変貌した。これを免れた小規模の草原もススキや灌木が繁茂し、もはや本種の生息環境として適さないものとなった。（室谷洋司）

**チョウ目 セセリチョウ科****A**

和名 ホシチャバネセセリ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Aeromachus inachus* Ménétrières

**【形態的特徴】** 前翅長は11mm前後で、本県産チョウ類の最小型種。

**【選定理由】** 本県が北限。1980年代まで確認されていたが、その後、記録が激減（室谷, 未発表）。

**【分布と生態の概要】** 本州と対馬のみに分布するが、各地域とも生息地は局所的。県内では太平洋側各地に偏った分布を示し、特に県東南部に生息地が多い。例外的に津軽地方の大鰐町と深浦町十二湖に各1頭の記録がある（山内・外崎, 1957）。全体的に個体数は多いものではなかったが、多産地も報告されている（室谷, 1993）。草原性であるが林縁・林間の草地や農道周辺にも見られる。幼虫の食餌植物はオオアブラススキが確認されている。

**【特記事項】** 本種のかつての生息地周辺で調査を行ったが（1997～1999年）、食餌植物のオオアブラススキが繁茂する草原は著しく減少。北限の記録地であるむつ市品ノ木付近は宅地や牧草地の造成が進み、個体数の多かった田子地方は耕地整理で生息環境が消失。新郷村各所では道路の拡幅工事・駐車場造成などで草地はアスファルト化していた（三浦, 2010）。（室谷洋司）

**チョウ目 シジミチョウ科****A**

和名 クロシジミ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Niphanda fusca* (Bremer et Grey)

**【形態的特徴】** 雄の表面は光沢のある青紫色、雌では一様に褐色のシジミチョウの仲間。

**【選定理由】** 本県が北限の稀少種。1960年代前半に県東南部で散在的に記録されていたが、1967年以降、目撃・採集の報告がない（三浦, 2010）。他県でも多くの生息地で絶滅あるいは激減傾向にある。

**【分布と生態の概要】** 本州・四国・九州と国内の分布は広いが、生息地は局所的。県内では1963年の田子町が初記録（弘前高校生物クラブ, 1965）。その後、八戸市・三戸町・新郷村などで生息地が発見された。7月下旬～8月上旬の年1回の発生。他県の観察例では若齢幼虫はアブラムシ・キジラミ類の分泌物を吸汁し、その後、クロオオアリの巢中でアリから口移しで餌をもらって育つ。

**【特記事項】** 生息環境は、コナラ・クリなどの混じる雑木林の林縁やススキ・灌木が混じる草原。生息には他の昆虫との関わりなど、本種の特殊な生活様式をみたく環境が必要とされるが、これらは、雑木林の荒廃・草地のブッシュ化・道路拡張工事・開拓が進み、生息環境の悪化が激滅の要因と考えられる。このような特殊な環境の調査が必須である。（室谷洋司）

**チョウ目 タテハチョウ科****A**

和名 ツマジロウラジャノメ

環境省：該当なし

学名 *Lasiommata deidamia interrupta* (Fruhstorfer)**[形態的特徴]** 眼状紋が前翅に1個、後翅に2個あり、前翅にはさらに白色紋が2個連なる。**[選定理由]** 本県が本州亜種の北限。生息環境が凝灰岩などで構成された湿潤な断崖で、林道改修などで生息地が破壊され、現在は一部に確認されているが個体数は著しく減少している。**[分布と生態の概要]** 北海道・本州・四国に分布し、本州では東北地方から中部地方に分布。県内の生息地は局所的。そのうち、青森市周辺では1950年代前半まで、三戸・八戸地方では1960年代後半まで生息が確認され、以降の記録は無いあるいは激減した。岩木山・白神山地周辺では数か所の産地が確認されているが近年は急減。成虫は6月中・下旬と8月中～9月上旬の年2回の発生で、幼虫の食餌植物はヒメノガリヤス・ヌカボなどのイネ科植物。**[生存に対する脅威と保存対策]** 発生地 conditions は幼虫の食餌植物や成虫の吸蜜源植物の存在、陽光が一定時間当たり湿潤などの要素が必要。近年は、露岩地のコンクリート吹付・崩落防止金網・種子吹付工法が取られ生息地の多くが破壊されたが、残された場所の保全が必要である。

(室谷洋司)

**チョウ目 ヤガ科****A**

和名 ミツモンケンモン

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Cymatophoropsis trimaculata* (Bremer)**[形態的特徴]** 開張30mm内外。前翅は黒褐色で円形の3対の黄白色の丸紋を持つ。**[選定理由]** 国内での分布は青森県の他に岩手県、栃木県、群馬県、長野県などから知られているが(枝ら, 2011)、極めて限られ希種である(環境省, 2006, 2015; 岩手県, 2014)。青森県では1991年五戸町大字倉石石沢字駒袋(岸田, 1995)などの記録が報告されている。最近県内で再確認されている(環境省, 2015)。**[分布と生態の概要]** 国内での産地は本州中北部から記録され、青森県内では上記の記録以外なく、詳しい分布は不明である。その産地のほとんどは果樹園や二次林等で本種は里山に生息すると思われる(環境省, 2006)。最近、本種の生活史が解明(高橋, 1999)された。食草はクロツバラ、クロウメモドキである(枝ら, 2011)。**[生存に対する脅威と保存対策]** 青森県で確認された生息地は五戸町のみであるが、産地での食草クロツバラの衰退が本種の脅威となる。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****A**

和名 ノシメコヤガ

環境省：絶滅危惧 I A類

学名 *Sinocharis korbae* Püngeler**[形態的特徴]** 開張40mm内外。翅は白色で、前翅の翅底部と外縁部、後翅翅頂に褐色を帯びる。**[選定理由]** 本種は、国内では青森県(板柳町・黒石市)と岩手県(野田村・盛岡市)などの数か所からの記録しかなく(井上ら, 1982; 枝, 2011; 岩手県, 2014)、確認された産地、個体数とも少なく、絶滅が危惧される(環境省, 2006, 2015)。**[分布と生態の概要]** 国内での分布は本州北部の青森県と岩手県の2県である。青森県内では、1930年Aomori (Matsumura, 1931)、青森県(渡邊, 1934)、1952年黒石市砂森(斎藤・北畠, 1966)、板柳町(斎藤・北畠, 1966)、1975年黒石市境松(佐藤・葛西, 1978)、黒石市、板柳町(井上ら, 1982)などの記録がある。国内での食草などの詳しい生態は不明である。**[生存に対する脅威と保存対策]** 本種の明細な生態は不明であるが、確認された産地などから考え、深山ではなく里や里山で確認されている。このことから開発などによる環境変化が衰退要因と思われる。本種の再発見と生態解明が保護対策を立てる上からも急務である。

(山内智)

**トンボ目 イトトンボ科****B**

和名 キイトトンボ

環境省：該当なし

学名 *Ceriagrion melanurum* Selys

**[形態的特徴]** 全長：36～44.5mm。頭部と胸部は淡緑色で、腹部が黄色いトンボである。雌では腹部が淡緑色の個体もある。雄の腹部第7～10節の背面は黒い。

**[選定理由]** 1960年代迄は各地の水田・池・沼等に見られたが（奈良岡, 1977）、その後、生息地・個体数ともに減少した。県内広く局地的に見られるが、個体数の多い所は少ない。

**[分布と生態の概要]** 本州・四国・九州、国外では朝鮮・中国に分布する。平地・丘陵地の池沼・湿地・水田に生息し、成虫は6月から9月まで見られる。雄は10cm程飛んでは瞬間停止し、方向を変えて、また同じ飛翔と停止を繰り返す独特の飛び方をする。雌雄連結で水面や水中の植物組織内に産卵する。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 生息地である池沼、湿地の破壊と乾燥を防止する必要がある。

**[特記事項]** 水田での農薬の使用、機械化による耕作法の変化などが本種の生存に強く影響し、減少したと思われる。  
(奈良岡弘治)

**トンボ目 サナエトンボ科****B**

和名 ミヤマサナエ

環境省：該当なし

学名 *Anisogomphus maacki* (Selys)

**[形態的特徴]** 全長：52～55mm。黒地に黄色斑のある中型のトンボ。胸部前面に1対の「L」字紋がある。雄の腹部第7～9節が広まり、8節に1対の黄色斑がある。後肢が長く、前・中肢の2～3倍である。雄の尾部付属器は短く、上付属器の先端に針状突起を有する。

**[選定理由]** 1960年代までは各地に見られたが（奈良岡, 1977）、その後、生息地・個体数ともに減少した。現在、八戸市、弘前市の数か所で確認されているに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。

**[分布と生態の概要]** 本州・四国・九州、国外では朝鮮・台湾・中国・ロシア・ネパールに分布する。河川の流れの緩やかな、砂利・砂・泥からなる中・下流に生息し、成虫は7～9月に見られる。羽化後、山地などで未熟期を過ごし、成熟してから河川に帰る。雌は川岸に止まって卵を放出し、流れに打水して産卵する。一世代は2～3年を要すると考えられる。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 河川の改修による環境変化と水質汚染が脅威であり、それを防ぐ必要がある。  
(奈良岡弘治)

**トンボ目 ヤンマ科****B**

和名 コシボソヤンマ

環境省：該当なし

学名 *Boyeria maclachlani* (Selys)

**[形態的特徴]** 全長：78～83mm。茶褐色の地に黄色斑を有する大型のヤンマ。胸部前面に黄色の「ハ」字状紋があるが、雌では消失することがある。腹部第3節は著しくくびれる。雄の翅端に小さな淡褐色斑がある。

**[選定理由]** 1960年代までは各地に見られたが（奈良岡, 1977）、現在は青森市・八戸市・外ヶ浜町・東通村で確認されているに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。どの地域でも個体数が減っている。

**[分布と生態の概要]** 全国各地、朝鮮に分布する。平地や低山地の木陰の多い、水のきれいな川に生息する。成虫は7～9月に見られる。黄昏飛翔性があるが、日中でも木陰の水面上をパトロールすることがある。雌は単独で水際の土や朽木に産卵する。幼虫は挺水植物の中で生活し、掴むと足を縮めて擬死を装う。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 生息河川の環境破壊と水質汚染が最も脅威であり、それを防止することが必要である。  
(奈良岡弘治)

**トンボ目 トンボ科****B**

和名 コノシメトンボ

環境省：該当なし

学名 *Sympetrum baccha* Selys

**[形態的特徴]** 全長：36～43mm。翅端に褐色斑のあるアカトンボである。未熟時は黄褐色であるが、雄は成熟すると全身が赤化する。胸部側面の中央の黒条は途中で分岐して、後方の黒条と融合する。雌には1対の眉状斑があり、腹部背面が赤くなる個体もいる。

**[選定理由]** 2010年頃までは県内各地で普通に見られていた。しかし、その後ほとんどの地域で見られなくなった。2017年には青森市・つがる市・深浦町・東通村・大間町、および八甲田山でそれぞれ1、2頭が発見されたに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。最近では生息地・個体数ともに著しく少なくなっている。

**[分布と生態の概要]** 北海道から九州まで広く見られ、国外では朝鮮・台湾・中国・ロシアに分布する。平地から山地の開放的な池・沼・水田地帯に生息し、成虫は7月から10月まで見られる。産卵は雌雄連結して打水して行う。幼虫越冬し、年1化性である。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 池・沼の破壊と水質汚染の防止が必要である。（奈良岡弘治）

**トンボ目 トンボ科****B**

和名 マイコアカネ

環境省：該当なし

学名 *Sympetrum kunckeli* (Selys)

**[形態的特徴]** 全長：30～37mm。顔面が淡青白色の小型なアカトンボ。胸部側面に4本の細かい黒条斑がある。未熟成虫は橙色であるが、成熟すると雄は腹部が赤化し、雌は茶褐色、または赤化する。雌の翅に淡褐色斑があるものと無いものがあり、斑紋の大きさは連続的に変異する。

**[選定理由]** 1960年代までは県内至る所に見られたが（奈良岡, 1977）、その後少なくなり、ほとんどの地域で絶滅した。現在は十和田市・上北郡・下北郡、および津軽地方の一部の地域に生息しているが（奈良岡ら, 2018）、個体数の少なくなっている所が多い。

**[分布と生態の概要]** 北海道・本州・四国・九州、国外では朝鮮・中国・ロシアに分布する。平地・丘陵地の池・沼・湿地に生息し、成虫は7月中旬から10月末まで見られる。雌雄連結で打泥産卵をする。年1化性である。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 池・沼・湿地の破壊と水質汚染、また農薬汚染を起こさないようにするすることが重要である。（奈良岡弘治）

**トンボ目 トンボ科****B**

和名 オオキトンボ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Sympetrum uniforme* (Selys)

**[形態的特徴]** 全長：44～52mm。全体が橙黄色で斑紋を有しない大型のアカトンボ。成熟してもやや赤みを帯びる程度で、老熟した個体はくすんだ赤褐色となる。翅は一様に淡褐色である。

**[選定理由]** 局地的に分布し、現在、五所川原市・つがる市・三沢市・六ヶ所村にのみ知られる（奈良岡ら, 2018）。2000年頃までは個体数も多かったが、その後、いずれの地域でも少なくなり、最近では数頭が見られるだけのところが多い。

**[分布と生態の概要]** 本州・四国・九州、国外では朝鮮・中国・ロシアに分布する。平地や丘陵地の抽水植物が繁茂した池・沼に生息し、成虫は8月に羽化して11月まで見られる。生殖活動は午前中に盛んで、午後2時以降はあまり見られない。雌雄連結で打水、または打泥産卵をする。年1化性である。

**[特記事項]** 生息地の環境は、見た目には変化が感じられないが、個体数は年々減っている。より小型のキトンボと似ているが、大きさと翅の褐色斑の違いで区別できる。（奈良岡弘治）

**カマキリ目 カマキリ科****B**

和名 ウスバカマキリ

環境省：情報不足

学名 *Mantis religiosa* (Linneus)

**【形態的特徴】** 体長50～65mm程度の中型のカマキリで、緑色型と褐色型があり、いずれの場合も色彩は白色味を帯びており、他種より明らかに淡色である。前脚基節の基部内面に長円形の黒色の斑紋があり、腿節内面には黒色の斑紋を欠くことから、他種と区別できる。

**【選定理由】** かつての主要生息環境であったと考えられる平地・低山地の草地や旧採草地からはほとんど確認できない。多くが資材置場、クロマツ植林地、大豆畑などとして改変されている。

**【分布と生態の概要】** 戦前の古い記録としてShiraki (1911) の青森（県か市か不明）、石村・佐藤 (1941) のつがる市・八戸市、黒石市教育委員会 (2001) のつがる市がある。以後50年以上文献上の記録はなく、1970年頃、市田忠夫が青森市の牧草地で、工藤忠が五所川原市の公園の草地で生息を確認している。戦後の文献上の確認例としては市田 (1986)、市田 (2000) の五所川原市と奈良岡 (2005, 2009) のつがる市しかない。五所川原市では、2012、2013年にも確認されており、日本直翅類学会 (2016) に標本が掲載されている。 (市田忠夫)

**カメムシ目 タイコウチ科****B**

和名 タイコウチ

環境省：該当なし

学名 *Laccotrephes japonensis* Scott

**【形態的特徴】** タガメに次いで大形の黒褐色の水生カメムシで、体長30～38mm、体幅約10mmで扁平し、体長とほぼ等しい呼吸管を尾端に備える。太く発達した前脚で水中の小動物を捕らえる。

**【選定理由】** 大形種であるものの水深の浅い池を好み、かつては水苗代等に生息していたものと想像される。1970年代初頭に板柳町の水田地帯に多産していたことを工藤忠が確認しているが、1980年代には全くみられなくなった。

**【分布と生態の概要】** 石村・佐藤 (1941) では各地に産するとされているが、戦前の標本が確認された例は、市田 (1989) による八戸市、黒石市教育委員会 (2001) によるつがる市のみである。近年ではつがる市の湖沼群での目撃例が聞かれていたものの、正式に記録されることはなく、2008年になって大高らにより平滝沼・大滝沼・大沢辺沼からの確認記録が公表された。山形県でも準絶滅危惧種として扱われている。 (市田忠夫)

**カメムシ目 マキバサシガメ科****B**

和名 タイワンナガマキバサシガメ

環境省：該当なし

学名 *Nabis sauteri* (Poppius)

**【形態的特徴】** 体長7～10mmのやや細長いカメムシで、前翅が腹部の3分の2までしか達しないが、稀に長翅型も出現する。近縁種よりやや濃色である。

**【選定理由】** 六ヶ所村は本州唯一の本種の既知産地であるのみならず、複数個体が確認された生息地としては国内唯一の地点である。

**【分布と生態の概要】** 湖沼水際に生息する捕食性のカメムシで、日本での既知産地は北海道別海町 (Kerzhner, 1979)、青森県六ヶ所村 (市田, 1998aなど) のみである。国外での既知産地も台湾台南市、中国天津市北塘、北朝鮮南浦市・サハリン島南東部・色丹島 (以上Kerzhner, 1988) のみで、大河川河口域または海岸に面した低湿地である。六ヶ所村では湖沼沼縁の最も開放水面に近い場所に局所的に発達するマツバイ型の植物群落に集中してみられ、他の植物上で発見されることは稀である。捕食性の種で生息密度が高いものの、環境に対する許容度は極端に低いといえる。六ヶ所村の湖沼群は極めて貴重な塩性湿原であり、早急な調査と保全が必要である。 (市田忠夫)

和名 キバネツノトンボ

環境省：該当なし

学名 *Libellioides ramburi* (MacLachlan)

**【形態的特徴】** 体長20mm内外、前翅は透明で基部が黄色、後翅は灰褐色に黄色の斑紋がある。触角は長く先端が丸くなる。

**【選定理由】** 国内の産地は局地的であり（平嶋ら, 2008）、大変採集例の少ない珍しい種類で全国的に減少している。青森県での確認報告は少ない。生息に適した草地が消滅してきており生息が脅かされている。

**【分布と生態の概要】** 国内では本州・九州に分布している。青森県内では、青森、八戸（石村・佐藤, 1941）、1935年に八戸市（福田, 1984）などの記録がある。本種は草地に生息していて、成虫は日中活発に飛翔し、飛翔中の昆虫を捕食する。活動的であることから採集が難しい。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 本種の生息地である草むららが、開墾等により消滅することが脅威となっているが、青森県での調査は不十分で、今後保護対策を取るためにも草地調査や詳しい本種の分布や生態などの解明が望まれる。（山内智）

コウチュウ目 オサムシ科

和名 マークオサムシ本州亜種

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Carabus maacki aquatilis* Bates

**【形態的特徴】** 体長30mm内外。体は全体が黒色で、上翅に各3条の強い隆条がある。

**【選定理由】** 本亜種は、本州北東部に生息する日本固有亜種で、分布は局地的で、どの生息地でも開発・河川整備などで自然環境が劣化し、生息地・個体数とも減少している（井村・水沢, 2013；環境省, 2015）。

**【分布と生態の概要】** 本種は、泥炭地や湿地帯・河川敷などに見られる。青森県内ではつがる市柴田・林・中派立（山谷, 1939）、八戸市（石村・佐藤, 1941）、むつ市田名部（鈴木ら, 1951）、東通村小田野沢（外崎, 1952）、黒石市青荷（中根, 1955）、つがる市稲垣（斎藤, 1956）、つがる市館岡（阿部, 1970；下山, 1978）、五戸町中市（下山, 1978）、つがる市森田・田光沼、五所川原市嘉瀬（阿部, 1980）、東通村尻屋（黒沢, 1982）、五所川原市嘉瀬（富岡, 1982）、つがる市下繁田・富蒔、中泊町竹田（下山ら, 1982）、八戸市類家、上北町小川原、つがる市車力・繁田、五所川原市十三湖（山谷・草刈, 1982）、六戸町（福田, 1984）、つがる市出野里（山谷, 1989）、つがる市下車力（樋口・丸屋, 1995）、岩木川下流（工藤, 1995）、三沢市仏沼（ダム水源地環境整備センター, 1997；山内・宮, 2008）などから記録されている。古くは県内各地の湿地環境に見られたが、近年は岩木川沿い湿地、三沢市仏沼以外の記録は無く、ほぼ絶滅に瀕している。また、下山（1978）によると、つがる市館岡ではサルケ（泥炭）、草刈りで積んだ草の下などから成虫を採集している。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 本種は、低湿地帯に生息しているが、開発や河川整備などで生息環境が悪化し減少している。また、岩木川流域は好採集地として広く知られており、青森県内外の採集者による数十頭に及ぶ記録もあり、乱獲も衰退の大きな原因となっている。（山内智）

和名 イワキメクラチビゴミムシ

環境省：該当なし

学名 *Oroblemus caecus* S.Uéno et A.Yoshida

**【形態的特徴】** 体長3mm内外。複眼と後翅は退化し、体は細長く短い細毛で覆われている。

**【選定理由】** 本種は地中に生息する希少な種類である。小形で、複眼・後翅が退化しており、広範囲での移動が困難である。本種は、岩木山で採集された資料によって新種記載（Uéno, S. & A.Yoshida, 1966）されたもので、岩木山以外では知られていない、岩木山固有種である。岩木山は津軽国定公園に指定されているが、登山者の増加等で主な生息地である錫杖清水から山頂にかけての裸地化と登山道沿いが踏み固められ、環境が悪化している。絶滅が危惧される。

**【分布と生態の概要】** 本種は岩木山からのみ知られている。詳しい生態については不明である。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 登山者の増加等による生息地の裸地化が進んでおり、県をはじめ関係機関で山頂付近の裸地化防止対策、登山道以外の立入禁止などを行っている。生息地の土壌環境の悪化が、生存の脅威となる。登山者のマナー向上など継続した環境保全が望まれる。また、岩木山には採集者も頻繁に入っており採集は慎むべきである。 (山内智)

和名 カワラハンミョウ

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Chaetodera laetescrpta* (Motschulsky)

**【形態的特徴】** 体長15mm内外。上翅は銅緑色で白色の斑紋が外縁に沿って発達している。

**【選定理由】** 本種は、海岸や河原の砂地に分布するが、沿岸部の開発、車両の砂浜への乗り入れなどにより生息場所が踏み荒らされ、生息環境が悪化し、激減している（大野, 2000；環境省, 2015）。2011年の東北地方太平洋沖地震の津波によって生息地が大きな被害を受け、生息に大きな影響をあたえている。

**【分布と生態の概要】** 国内では、北海道・本州・四国・九州などに分布している。青森県内では、八戸市（福田・奈良, 1952）、八戸市湊（福田, 1969）、三沢市三川目・淋代・六川目・砂森・四川目、おいらせ町一川目・二川目（成田, 1988）、三沢市塩釜（成田, 1989b）、つがる市高山稲荷海岸（阿部, 2011）など砂浜のある海岸に記録が集中している。本種が生息する環境要因として、幼虫は草むらの空地に巣穴を作って生活していることから、砂礫の大きさ、砂地の状態、植物の定着が重要である（大野, 2000；環境省, 2015）。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 本種の生息地である砂浜に人や車両が入り込んで、砂地が踏み荒らされることで、幼虫が棲む場所を失うことになる。特に車両の立ち入りの自粛が求められる。太平洋側では東北地方太平洋沖地震の津波により生息地は大きな被害を受け、個体数が激減したが、今後、生息環境の回復による本種の動向の調査が望まれる。

**【特記事項】** 今後、更に日本海側に発達している砂原から確認される可能性がある。 (山内智)

**コウチュウ目 オサムシ科****B**

和名 ホソハンミヨウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cylindera gracilis* (Pallas)**[形態的特徴]** 体長10mm内外。上翅の外縁中央、翅端に白斑紋を持つ。**[選定理由]** 本種は、林や河川敷などの草地で見られるが、全国的に少なく稀種と言われている。開発や草地管理放棄などにより、草地の植生の遷移が進み、適した生息環境が衰退している（上野ら, 1985；環境省, 2015）。**[分布と生態の概要]** 国内では、北海道・本州・四国・九州などに分布している。青森県内では、つがる市森田（山谷, 1939；石村・佐藤, 1941）、弘前市笹森山・清水・相馬、むつ市恐山（福田・奈良, 1952）、弘前市笹森山（齋藤, 1956）、弘前市立構山、鶴田町廻堰（成田, 1988）、弘前市岳（成田, 1989b）、弘前市弥生（横山, 2002）などから記録されているが、その分布は局所的で、最近の記録は少ない。本種は、後翅が発達せず飛翔しないが、その動作は敏速である。**[生存に対する脅威と保存対策]** 本種の生息地は日当たりの良い草地であるが、開発などで適した環境が衰退し、消失傾向にある。生息地の環境保全と、生息地の再確認、特に記録が殆ど知られていない三八上北地方などの調査が望まれる。（山内智）**コウチュウ目 オサムシ科****B**

和名 ヒメハンミヨウ海浜型

環境省：該当なし

学名 *Cylindera elisae* (Motschulsky)**[形態的特徴]** 体長は雄10.5mm内外、雌12mm内外。内陸部に普通に見られる内陸型（雄10mm内外、雌11mm内外）とは、大型で横に広い体型を有し、上翅斑紋の幅が広いことで区別できる。**[選定理由]** 海浜型は海岸の砂丘地帯に注ぐ河口部のみに生息し、幼虫は河川周辺の粘土質土壌の裸地にしか見られない。このような環境は非常に不安定で、護岸工事や河川改修によって容易に減少・絶滅するおそれがある。**[分布と生態の概要]** 1980年以降、県内では日本海側の木造町（現つがる市）・陸奥湾内の野辺地町・太平洋側の東通村から百石町（現おいらせ町）の海岸部で記録されている（成田, 1988；成田, 1989b；櫛田, 1991；大八木, 2007；市川・吉川, 2012）。全国的にも産地が少なく、海岸部であっても内陸型しか見られない地域が多い。幼虫で越冬し、成虫は6～9月に見られる。**[特記事項]** 産地内では内陸型と混棲する場合も多く、両者の中間型も見られるが、連続的ではない。海浜型と内陸型の関係は、今後明らかにしなければならない課題である。（櫛田俊明）**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****B**

和名 サロベツナガケシゲンゴロウ

環境省：該当なし

学名 *Hydroporus fuscipennis* Schaum**[形態的特徴]** 体長3.7mm前後。同所的に見られるナガケシゲンゴロウとは、前胸背側縁の形状や雄交尾器の形状で区別できる。**[選定理由]** 本種は国内では北海道と本州北部（津軽半島中部）に分布し、県内では近年、乾燥化が激しく、生息域が急激に狭められている。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。小型だが産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。**[分布と生態の概要]** 正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群の湿原内の水溜まりや池塘に局所的に生息する（山本, 1996；池田・高橋, 2003）。成虫で越冬する。（櫛田俊明）

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****B**

和名 エゾヒラタヒメゲンゴロウ

環境省：該当なし

学名 *Colymbetes pseudostriatum* Nilsson**【形態的特徴】** 体長18～20mm。体形は長卵形でやや扁平、上翅全面に指紋状の横の縮刻を装う。**【選定理由】** 本種は国内では北海道と本州北部（津軽半島中部）に分布し、県内ではマルコガタノゲンゴロウなど（環境省編, 2015）と同様に、各地で侵略的外来種（オオクチバス・アメリカザリガニ・ウシガエル）の侵入により減少している。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。大型で産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。**【分布と生態の概要】** 近年、本種の生息域である平野部の池沼や溜め池などでもオオクチバスやウシガエルが多く見られるようになったことから（青森県, 2006）、絶滅の危機にある。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群の池沼や溜め池などに局所的に生息する（山崎・八木, 1992；丸屋, 1993；丸屋・樋口, 1993）。2000年代以降、急激に減少した。成虫で越冬する。 **（櫛田俊明）****コウチュウ目 ゲンゴロウ科****B**

和名 オオシマゲンゴロウ

環境省：該当なし

学名 *Hydaticus aruspex* Clark**【形態的特徴】** 体長14～15mm。体形は長楕円形でやや扁平、雌雄で上翅の斑紋が異なる。**【選定理由】** 本種は国内では北海道と本州北部（青森県）に分布し、県内ではマルコガタノゲンゴロウなど（環境省編, 2015）と同様に、各地で侵略的外来種（オオクチバス・アメリカザリガニ・ウシガエル）の侵入により減少している。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。中型で産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。**【分布と生態の概要】** 近年、本種の生息域である平野部の池沼や溜め池などでもオオクチバスやウシガエルが多く見られるようになったことから（青森県, 2006）、絶滅の危機にある。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群と岩木川下流域の池沼や溜め池などに局所的に生息する（山崎・八木, 1992；山本, 1996；田村, 2003；初宿, 2011）。2000年代以降、急激に減少した。2018年に、三沢市の湿原でも生息が確認された（岩田ら, 2019）。成虫で越冬する。 **（櫛田俊明）****コウチュウ目 ゲンゴロウ科****B**

和名 ゲンゴロウモドキ

環境省：該当なし

学名 *Dytiscus dauricus* Gebler**【形態的特徴】** 体長30～36mm。同所的に見られるエゾゲンゴロウモドキとは、腹部の腹面暗色紋や後基節突起の形状、雄交尾器の形状で区別できる。**【選定理由】** 本種は国内では北海道と本州北部（津軽半島中部）に分布し、県内では各地でウシガエルなどの侵略的外来種の侵入により減少している。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、容易に減少・絶滅するおそれがある。大型で産地も極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。**【分布と生態の概要】** 近年、本種の生息域である平野部の池沼や溜め池などでもオオクチバスやウシガエルが多く見られるようになったことから（青森県, 2006）、絶滅の危機にある。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群と岩木川下流域の池沼や溜め池などに局所的に生息する（松本ら, 1989；山崎・八木, 1992；樋口, 1993b；櫛田, 1995；山本, 1996；阿部ら, 2002；田村, 2003；鳥羽, 2011）。2000年代以降、急激に減少した。成虫で越冬する。 **（櫛田俊明）**

**コウチュウ目 ガムシ科****B**

和名 ホソガムシ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Hydrochus aequalis* Sharp**[形態的特徴]** 体長3mm内外。背面は暗褐色で翅鞘の各条溝の点刻は深い（佐藤, 1978）。**[選定理由]** 本種はガムシ科ホソガムシ亜科に属する水生昆虫で、希少種で近年青森県以外に採集例が殆どなく、湖沼・湿地などの環境劣化から絶滅が危惧される（環境省, 2015）。**[分布と生態の概要]** 本種は、本州の京都府・大阪府の標本で1884年に新種記載され、その後青森県などから記録されている。前2府ではその後追加記録が無い（佐藤・吉富, 2005）。青森県内では1997年つがる市平滝沼で採集された（佐藤・吉富, 2005）。その他につがる市コケヤチ、東通村尻屋（阿部, 2013）からも記録されている。本種の生息地は水生植物の繁茂する湿地環境で、つがる市コケヤチでは湿地での草の踏み込みでできた水溜まりに浮かんできた本種を採集した（阿部, 2013）。**[生存に対する脅威と保存対策]** 本種の生息地は、開発・外来魚の移入などによって湿地帯の乾燥化、池沼の水質汚染、水生植物の消滅などが進んでおり、絶滅が危惧される。池沼の継続した管理による環境保全が望まれる。  
(山内智)**コウチュウ目 ハムシ科****B**

和名 クロスジカメノコハムシ

環境省：該当なし

学名 *Cassida lineola* Creutzer**[形態的特徴]** ハムシという甲虫の仲間では体長は7mm前後。背面は赤褐色で6個の黒紋がある。**[選定理由]** 本州の青森・岩手・宮城県などで分布が確認されているがいずれも局所的で、本県では近年生息環境の悪化と個体数の減少が著しい。**[分布と生態の概要]** 県内では2002年に黒石市黒森山、青森市合子沢・小館、平川市軍馬平などの低山地で相次いで生息が確認された（工藤, 2004）。生息環境は乾燥した草原で、幼虫・成虫の食餌植物となっているキク科のオトコヨモギの群落が密に存在する。越冬から目覚めた成虫は5月下旬～6月上旬に産卵し8月になって新成虫が羽化する。年1回の発生。**[生存に対する脅威と保存対策]** 県内の生息調査で、生息地はこれまで6か所を数えたが、近年のモニタリングでは4か所の生息が確認されていない（室谷ら, 2017）。その要因は草原の植物遷移が進行し、ブッシュ化で食草が激減したことによるものと考えられる。生息に好適な環境を保全することが課題である。  
(工藤周二)**コウチュウ目 ハムシ科****B**

和名 イカリアオカメノコハムシ

環境省：該当なし

学名 *Cassida stigmatica* Suffrian**[形態的特徴]** 体長は6mm前後。背面は美しい緑色で胸部には錨状の赤褐色の斑紋がある。**[選定理由]** 本種の国内記録は本県の八戸市・階上町が最初で（1988年）、その後県内数か所で発見されたが、低地の産地はすべて失われた（安富・富岡, 1990；安富ら, 2011）。**[分布と生態の概要]** 本州北部の青森・岩手県だけで記録されているが、本県では上記2か所のほか低地で六ヶ所村、高地の十和田市・青森市（いずれも八甲田山）の3か所で確認されている。生息環境は、食餌植物となっているキク科のミズギク群落がある湿原。高地環境における観察では、越冬した成虫は6月下旬に姿を現し産卵、新成虫は8～9月に羽化する。産卵時期にばらつきがあることから羽化期にも遅速がみられる（室谷ら, 2016）。**[生存に対する脅威と保存対策]** 県内で確認された合わせて5か所の生息地のうち、低地の3か所は開発などで早い時期に失われた。ミズギクなど湿性植物を擁する湿原の生態系は脆弱で、その保全には多面的な施策が必要とされる。  
(室谷洋司)

和名 ウマノオバチ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Euurobracon yokahamae* (Dalla Torre)

**【形態的特徴】** 体長20mm内外。雌は体長の7～9倍の長い産卵管を持つ。体は黄赤褐色で、翅には外縁に広い褐色帯がある。近似種のヒメウマオバチとは、後翅の翅脈、雌は産卵管の長さの違いなどから区別される（平嶋・森本, 2008）。

**【選定理由】** 本種は、南方系の希少な寄生蜂で、全国的にその生息地は局地的である。里山の開発等により生息に適した環境が衰退し、生息地・個体数共に減少している（環境省, 2015；山田, 2010, p.240）。

**【分布と生態の概要】** 本種は、国内では本州・四国・九州などの主に里山に分布している（平嶋・森本, 2008；環境省, 2015）。青森県内では古くから棲息が知られており、青森県（和田, 1933）、黒石市（鳴海, 1935）、青森（Watanabe, 1937）、八戸・黒石市（山形村）（石村・佐藤, 1941）から知られていた。また、つがる市森田、弘前市十腰内産の記録（黒石市教育委員会, 2001）も1930年代のものである。近年になって青森市浅虫（工藤, 2011, 2013）、青森市駒込（工藤, 2013）、青森市滝沢（上原, 2013）、青森市久栗坂（上原, 2016）などでミズナラ・コナラ・ヤマナシの樹幹にいた記録が報告されている。本種は短時間に発生樹木から連続脱出し直ぐに分散する。特に雄は高所から雌を探す行動が確認されている（井藤, 2018）。近年、隣接する青森市東部地区で相次いで確認されているが、この分散行動による可能性がある。

本種の生態については解明が進んでおり、産卵はカミキリムシなどが作った樹木の坑道から入って行く。本種の寄主については諸説があるが、寄主は一般にシロスジカミキリと言われていた。神奈川県内でクリ材での寄生木分解、工業用内視鏡での観察などから、本種は蛹に産卵することが確認された。シロスジカミキリ蛹期間は秋で、ウマノオバチ産卵時期は晩春～初夏であり、本種の産卵行動の時期と一致しないことから、シロスジカミキリには寄生しないと言われている。また、寄生木内の本種と同居状態のカミキリ幼虫の形態の明細な調査から青森県にも分布するミヤマカミキリが寄主の一種として確認された（加賀ら, 2018；加賀・刈部, 2019）。ミヤマカミキリも食樹としてミズナラ・コナラ・カシワ・クリなどが知られている（小島・中村, 1986）。

青森県内でもウマノオバチの確認と併せて、寄生木の坑道出口の形状ではなく、内部で本種と同居状態での寄主についての確認が望まれる。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 開発等による里山の衰退、それに伴い寄生木や寄主が減少・消失し、本種の生息が危惧される。本種の生息する里山の環境保全が望まれる。（山内智）

**ハチ目 アナバチ科****B**

和名 ヤマトルリジガバチ

環境省：該当なし

学名 *Chalybion japonicum* (Gribodo)

**[形態的特徴]** 体長18mm前後。腹柄節のある細長な体型で、体色は金属光沢のある濃い藍色である。

**[選定理由]** 本種は以前希少種ではなかったが、現在は非常に少なくなっていて、県内でも同様である（山田, 2010, p.249）。営巣場所や餌となるクモ類が減少するなど生息環境が悪化している。

**[分布と生態の概要]** 国内では本州・四国・九州・琉球・小笠原・対馬・屋久島などから知られている。青森県内からは、古くは黒石市山形、青森、八戸（石村・佐藤, 1941）、鶴田町（弘前高等学校生物クラブ, 1957）、十和田山地（常木・下山, 1963）、黒石市板留、青森市野内（山田, 1998）、つがる市森田（黒石教育委員会, 2001）などで記録されている。近年、中泊町小泊（山田, 2008）、深浦町大間越（山田・山田, 2016）でも数個体確認されている。本種は、アシや竹の筒、建物の隙間などに営巣し、コガネグモ科やヒメグモ科などのクモ類を狩って幼虫の餌とすることが知られている（山本, 1959；寺山・田埜, 2006）。特に人家や人工建造物に巣を作るオオヒメグモを好み、かやぶき屋根などの家屋内に侵入して薄暗い所でも巣を作るので、家蜂の仲間に分類されている（岩田, 1982；山田, 2010, p.249）。また、本種はセイボウ科のミドリセイボウ等に寄生されることが知られている。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 人間の生活圏近くに生息するので人為的な影響を受けやすい種類で、近年の民家の構造の変化等から営巣環境が以前より悪くなっていると思われる（山田, 2010, p.249）。人間の生活環境の変化等による営巣地の衰退、餌となるクモ類の寄主の減少などが脅威となっている。本種の生息環境の保全が望まれる。

**[特記事項]** 和名を別名ルリジガバチとも呼ばれていた。

(山内智)

**ハエ目 セダカバエ科****B**

和名 フタイロオオメハシリバエ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Symbalophthalmus speciosus* Saigusa

**[形態的特徴]** 体長2.5mm内外。頭部は黒く、触角は黄色、腹部は黄褐色である（三枝, 2008）。

**[選定理由]** 本種は、ハシリバエ亜科アリガタハシリバエ族オオメハシリバエ属に属するが、国内では本属の唯一の種類である（三枝, 2008, 2014）。生息地は局地的で、極めて稀少な種類で、環境の劣化が絶滅に直結する（三枝, 2008；環境省, 2015）。

**[分布と生態の概要]** 本種は本州北部で確認されている。十和田市奥入瀬溪流石ケ戸から採集された資料によって新種記載された（Saigusa, 1963）。その後の記録は知られていない。生態については不明であるが、他の双翅目昆虫などを捕食しているものと思われる。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 生息地の奥入瀬溪流は、観光地として著名で、車道・遊歩道の整備、マイカー交通規制期間をもうけるなど自然保全の啓蒙活動を官民一体となって取り組んでいる。観光客の遊歩道以外の立入、車両の違法駐車なども見られ環境に悪影響をあたえている。継続して環境保全することが、本種の保護につながる。

**[特記事項]** 本種はフタテンアシホソハシリバエと呼ばれていたが、三枝豊平（2008）によって現在使用の和名に改称された。

(山内智)

和名 ルリハダホソクロバ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Rhagades pruni esmeralda* (Butler)

**【形態的特徴】** マダラガ科に属し翅長24～26mm。翅が濃青色に輝く美しい昼飛性のガ。

**【選定理由】** 本県では青森市高田朝日山・六ヶ所村尾駁・つがる市屏風山（佐藤, 2018）などの数か所で記録されているが、一部地域では近年の記録がない（古木, 2017）。

**【分布と生態の概要】** 本種は本州・九州などで局地的に記録されているだけである。県内の生息地はいずれも湿原で、幼虫の食餌植物はバラ科のナガボノシロワレモコウが確認されている。成虫は7月中旬～8月上旬に発生し、食草や近くのヨシなどの他物に産卵する。孵化した幼虫は中齢まで成長して越冬、翌春さらに成長して羽化に至る（古木, 2017）。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 幼虫が依存するナガボノシロワレモコウは県内各地の湿原に普遍的に自生する普通種である。一方、本種の生息が極端に限定されている要因は未解明である。湿原の生態系は脆弱で、上記のように産地が一部失われ個体数が減じていることから、その実態解明と保全策の検討が望まれる。  
(古木誠)

和名 ベニモンマダラ道南亜種

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Zygaena nippona hakodatensis* Inoue

**【形態的特徴】** 開長30mm内外。前翅は黒地に紅色の斑紋で金属光沢が強い、美麗種である。

**【選定理由】** ベニモンマダラの分布は、限られた地域で局地的である（大野, 1980）。青森県内でも食草の衰退の影響で生息地、個体数ともに減少している。

**【分布と生態の概要】** ベニモンマダラの亜種は、本州の名義タイプ亜種、北海道に分布する道南亜種の2亜種がある。堀江（2013）は本州北部（青森県、岩手県）の個体群を函館周辺に分布する亜種に含めた（環境省, 2015）。青森県レッドデータブックでもこれに従う。

青森県内では、古くは八戸市、黒石市六郷（石村・佐藤, 1941）、1957年八戸市大須賀（山内, 2018）から記録されている。そのほかに、大間町（阿部ら, 1960）、八戸市大久保・新井田（富岡, 1974）、青森市朝日山（佐藤ら, 1975）、青森市稲山（三橋, 1979）、六ヶ所村尾駁、大間町高岩（菊池, 1983）、八戸市鮫（木俣, 1984）、八戸市南郷（青森県生物学会八戸支部, 1989）、岩木山（黒石市教育委員会, 2001）、青森市合子沢（国際芸術センター青森, 2004）、三沢市仏沼（安藤, 2012, 2013）、八戸市根城、六ヶ所村鷹架（山内, 2018）などから記録されている。近年も一部で生息が確認されているが、分布地は激減している。

昼飛性で草上を低く飛び、花に集まる（大野, 1980）。食草はクサフジ（環境省, 2006, 2015）、オオバクサフジ、ツルフジバカマ（岩手県, 2001）などが確認されている。

**【生存に対する脅威と保存対策】** クサフジの自生する日当たりのよい草原は、開発等で年々少なくなってきた。草地の維持が必要である。また、必要以上の採集は慎むべきである。

**【特記事項】** 本亜種の和名は環境省レッドリスト2018に従い道南亜種とした。  
(山内智)

**チョウ目 セセリチョウ科****B**

和名 ギンイチモンジセセリ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Leptalina unicolor* (Bremer et Grey)

**[形態的特徴]** 前翅長は15mm前後。翅表は黒いが、後翅裏面には銀色の一文字が目立つ。

**[選定理由]** 草丈の低い草原に生息し、近年このような環境が急減し個体数が著しく減少した。

**[分布と生態の概要]** 北海道から九州まで分布するが一般的に局所的。県内でも広く分布するが生息地は限られ、食餌植物のススキがあるシバなどが生えた日当たりの良い草地である。成虫は5月下旬～6月下旬に出現し、まれに8月中旬頃に2化が発生。地上すれすれに低く飛翔する。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 1960年代まで牛馬飼料用の草刈場とされた里山は、適度な草丈の草原が保たれ本種が多産した(室谷・阿部, 1962)。同じ草原性のオオルリシジミ・オオウラギンヒョウモン(いずれもEXランク)が健在だったところは、草原を歩くと足元から湧き出るように沢山の個体が飛び立った。近年は農業の機械化が進み、草刈場は耕地整理で畑地・果樹園に転用された。現在は畑地の縁や放置されても条件の良い荒地などに細々と生息している。保存には、このような本種の生息に適した植生復元を念頭においた環境創出が必要である。(室谷洋司)

**チョウ目 アゲハチョウ科****B**

和名 ヒメギフチョウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Luehdorfia puziloi inexpecta* Sheljuzhko

**[形態的特徴]** 黄と黒のだんだら模様で、カタクリなどに吸蜜する姿は春の女神と愛称される。

**[選定理由]** 本県が本州亜種の北限地。県内では生息地が非常に少なくなり、いずれも局所的で個体数とともに著しく減少傾向にある。

**[分布と生態の概要]** 青森市・平内町・黒石市・平川市・大鰐町・三戸町・田子町と白神山地周辺部の西目屋村・深浦町などに分布域を示すが、いずれの産地も離散的で狭い(棟方ら, 1986)。年1回4月中旬～5月上旬に発生し、卵は幼虫の食餌植物であるウマノスズクサ科のウスバサイシン・オクエゾサイシンに産み付けられ、幼虫期を経て6月下旬頃には蛹となり、そのまま越冬する。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 本種の生息環境は、広範囲にわたるミズナラなどが主体の二次林で、林床には適度な明るさと湿り気が保持され食餌植物や吸蜜源植物の群落が必要。1990年代以降、スギ植林の進行とその高木化で生息不適地が急増した。本種の保存策として、行政などが指定した自然公園内に生息地が存在する場合、従来の里山環境の維持手法が効果的である。(室谷洋司)

**チョウ目 シロチョウ科****B**

和名 スジボソヤマキチョウ

環境省：該当なし

学名 *Gonepteryx aspasia nipponica* Verity

**[形態的特徴]** シロチョウ科の大形種で、雄の翅表は濃黄色、雌は黄白色。EXランクのヤマキチョウに似るが、翅脈が細いことや行動面で飛び方が緩やかなことなどから区別できる。

**[選定理由]** 本県が分布の北限である。幼虫はクロウメモドキの葉を食べるが、近年この植物を含む明るい雑木林や林縁・湿原環境が急減し、本種も著しく減少した。

**[分布と生態の概要]** 本州・四国に分布。1990年代までは、県内の低山地に広く分布し個体数も多かった。成虫は6月下旬～7月に出現し、盛夏に一時休眠し秋にふたたび現れ、成虫のまま越冬する。翌春、母チョウは食樹の新葉などに産卵し、孵化した幼虫は6月までに蛹化する。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 本種が普通に見られたのは各所に生息環境が整っていた年代までで、1990年代頃から多くの産地が消滅した(室谷, 未発表)。近縁種のヤマキチョウが1960年代後半から記録がなく、本種の生存も心配される。要因は里山・湿地が管理されなくなり林縁も荒廃。明るい空間を好むクロウメモドキが衰退したことで、このような環境回復が保全面で必要である。(室谷洋司)

和名 キタアカシジミ (カシワアカシジミ)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Japonica onoi onoi* Murayama

**[形態的特徴]** アカシジミに極めて近縁で、1990年に隠蔽種として分離されるまでは混同されていた。交尾器はアカシジミと明確に異なるが、斑紋だけの区別は容易でない。

**[選定理由]** アカシジミは全国に広く分布するが、本種はごく限られた地域のカシワ林にのみ生息し、近年は減少が著しい。

**[分布と生態の概要]** 北海道と東北北部・福島県・広島県に分布し、北海道から東北北部に産する個体群は名義タイプ亜種*onoi*とされる。また、広島県産は1993年に亜種*mizobei*、福島県産は2018年に亜種*sakumai*として区別された。成虫は年1回6月下旬から7月に出現し、雄による活発な探雌飛翔は14～16時に観察される。産卵はカシワの若枝へ数卵まとめ産みすることが多く、卵越冬（厳密には卵内幼虫越冬）して翌春孵化。幼虫はカシワの新芽を食べて蛹となる。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 自然度が高いカシワ林を好むため、伐採はもちろん、周辺環境の改変だけでも衰亡につながることが多い。  
(工藤忠)

和名 カバイロシジミ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Glaucopsyche lycormas* Butler

**[形態的特徴]** 雄翅表は淡青色で外縁部に細い黒帯を有する。雌翅表は黒褐色で基部寄りに青色鱗が出現するが、青色鱗の出現程度には個体差がある。種の特徴は翅裏面に顕著で、灰色地に黒点列が1列のみ縦走する。

**[選定理由]** 津軽・下北両半島の海岸部に局所的な生息地が点在するため、分布実態は破線的。

**[分布と生態の概要]** 北海道と本州が分布圏ながら、本州では津軽半島北部と下北半島西部の海崖斜面に限られ、ここに自生するヒロハノクサフジ群落でのみ発生する。成虫は5月下旬から8月まで出現し、雄は午前中に生息斜面を活発に飛翔する。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 青森県の本種は、本州唯一の遺伝子集団として重要なが、生息地は限られた地域の海岸線に点在し、極めて脆弱である。このため、下北半島西部や津軽半島北部において環境改変事業を実施する際には、本種の生息状況に影響を及ぼさないよう、特段の配慮が必要である。  
(工藤忠)

和名 オオゴマシジミ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Maculinea arionides takamukui* (Matsumura)

**[形態的特徴]** 前翅長は22mm前後。翅表は青藍色、裏面は灰白色でいずれにも黒斑がある。

**[選定理由]** 県内分布は深山溪谷の一部に限られ、近年生息環境の悪化と個体数の減少が著しい。

**[分布と生態の概要]** 北海道と本州に分布。県内では十和田湖から八甲田山系の城ヶ倉・折紙山などの溪谷地と白神山地の一部が生息地で、いずれも急峻な崩壊地の周辺に限られる。年1回7月下旬～8月上旬の発生で、孵化した幼虫は4齢までシソ科のクロバナヒキオコシの花穂を食べる。その後、クシケアリ類によってアリの巣穴に運ばれ、アリの幼虫を食べて育つ。アリは本種幼虫が分泌する甘露をなめる。幼虫期に植物食から肉食に転ずるという特異な生態を持つ。

**[生存に対する脅威と保存対策]** 一般には生息地が深山のため生息環境に影響がないと考えられるが、幼虫の食餌植物・クロバナヒキオコシ群落は断崖の崩壊地に形成され、自然災害や伐採・林道建設などで失われる脆弱性をもつ。これにより本種は生息できなくなり、八甲田山・白神山地では多くの生息地が失われた。このような繊細な生態系への配慮を踏まえた保全策が望まれる。  
(室谷洋司)

和名 クビグロケンモン

環境省：準絶滅危惧

学名 *Acronicta digna* (Butler)

**【形態的特徴】** 開長43mm内外。前翅は灰黒色、後翅中は春の個体は黄白色であるが、夏の個体は淡黄色である。

**【選定理由】** 国内での産地は湿地で、その分布は局地的で稀少な種類である（江崎ら, 1975；井上ら, 1982；枝ら, 2011；環境省, 2015）。食草はカキツバタやイタドリであるが、湿地開発や湿地の乾燥化などからこの群落も衰退し環境が悪化してきている。青森県内でも生息地及び記録ともに少ない。

**【分布と生態の概要】** 国内では北海道・本州・四国・九州・対馬に分布している。青森県内ではつがる市大滝沼（工藤, 1983）、つがる市平滝沼、六ヶ所村鷹架沼（葛西, 1987）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2004）などの屏風山地区と小川原湖湖沼群地区から確認されている。

**【生存に対する脅威と保存対策】** 屏風山地区と小川原湖湖沼郡地区は開発、盗掘、心ない人の湿地帯への踏み込み等により、食草であるカキツバタ群落が衰退している。湿地帯の保全とカキツバタの保護対策が望まれる。

（山内智）

**トンボ目 イトトンボ科****C****和名** ルライトトンボ**環境省：該当なし****学名** *Enallagma circulatum* Selys

全長：32.5～38.5mm。雄は瑠璃色の地に黒斑のある美麗種。雌は青色と黄緑色の2型がある。黒色斑は平地の個体では縮小し、高地や下北郡の個体では発達する傾向がある。

北方系の種で、岐阜県と福井県以北から北海道、国外では朝鮮・ロシアに分布する。県内では津軽地方・上北郡・下北郡・十和田市に生息するが（奈良岡ら, 2018）、局地的である。

成虫は6～9月に植生の豊かな池・沼に見られる。水面で産卵することは稀で、雌は単独で水中に逆さまに潜って産卵する。雄はその間、水面上で待機し、雌が浮上すると再連結することが多い。

最近では生息地・個体数共に減少し、多数見られる所が少なくなっている。（奈良岡弘治）

**トンボ目 イトトンボ科****C****和名** モートンイトトンボ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Mortonagrion selenion* (Ris)

全長：24.5～29.5mm。小型のイトトンボで、頭部の上と胸の前面は黒色。胸の側面と腹部第1・2節は緑色で、雄の第3節以降はオレンジ色である。未熟雌は全体が橙黄色であるが、成熟すると黄緑色となる。水田・池・沼・湿地に見られ、成虫は6～8月に出現する。

朝早く日の出前後の4時頃から活動し、8時頃までの間に交尾する。雄はその後、摂食活動をするだけで、ほとんど静止して過ごす。雌は9～15時頃にかけて水面や水中の植物に産卵する。

1960年頃までは各地の水田で多数見られたが（奈良岡, 1977）、耕作法の変化や農薬の使用などでほとんどの水田で絶滅した。今後ますます少なくなることが予想される。（奈良岡弘治）

**トンボ目 カワトンボ科****C****和名** ハグロトンボ**環境省：該当なし****学名** *Atrocalopteryx atrata* Selys

全長：52～63mm。雄の翅が黒く、胴体は金属緑色。雌の翅と胴体は黒褐色である。アオハダトンボに似るが、一回り大きく、雌雄ともに翅の色や縁紋はないことで区別できる。

本州・四国・九州、朝鮮・中国・ロシアに分布する。成虫は6～9月に出現し、雌は単独で水面の植物に産卵する。潜水産卵も行うことがある。

1970年代までは県内各地の水田・河川に見られたが（奈良岡, 1977）、その後、生息地・個体数ともに減少し、1990年代には県内数か所に生息するだけとなった。2000年代になって、再び各地の河川で復活しているが（奈良岡ら, 2018）、個体数は必ずしも多くない。（奈良岡弘治）

**トンボ目 ヤンマ科****C****和名** サラサヤンマ**環境省：該当なし****学名** *Sarasaaeschna pryeri* (Martin)

全長：55～63mm。黒字に黄色斑のある小型のヤンマである。雄では成熟すると黄色斑が緑色に変わる。雌では翅の基部と先端付近が淡褐色となる個体がある。県内に広く分布するが、山地は局所的である。北海道・本州・四国・九州、国外では朝鮮に分布する。

樹林に囲まれた平地・丘陵地の低湿地に生息し、湿地の空間、小径上をホバリングしながら飛翔する。成虫は5月下旬～7月初めに出現する。雌は単独で湿った土やコケ、朽木などに産卵し、幼虫は落ち葉などに覆われた湿った地面や浅い滞水に住んでいる。幼虫期間は1～3年を要する。

生息地の湿地の破壊、埋め立てを避けることが望ましい。（奈良岡弘治）

**トンボ目 サナエトンボ科****C****和名** オナガサナエ**環境省：該当なし****学名** *Melligomphus viridicostus* (Oguma)

全長：53～59.5mm。中型のサナエトンボで、黒地に黄斑を有する。雄の尾部付属器が長いのが特徴で、下付属器は細長く左右に二又し、上方に湾曲する。

河川の上・中流域に生息し、成虫は7～9月に出現する。雄は流れの中の岩や石に止まってテリトリーを張る。雌は浅瀬の水面上でホバリングしながら卵塊を出し、水中に落下させる。

日本特産種で、本州・四国・九州に分布する。県内では局地的に見られ、八戸市の新井田川、弘前市の岩木川、平川市や大鰐町の平川で確認されている（奈良岡ら, 2018）。

2000年頃には多かったが、津軽地方では最近、個体数が減少している。

**(奈良岡弘治)****トンボ目 サナエトンボ科****C****和名** ウチワヤンマ**環境省：該当なし****学名** *Sinictinogomphus clavatus* (Fabricius)

全長：76～83mm。黒地に黄色斑を有する。腹部第8節がウチワ状に拡がり、その名がある。本州・四国・九州、国外では東南アジア・朝鮮・台湾・中国・ロシアに分布する。池・沼・湖に生息し、成虫は6月から9月まで見られる。

羽化は夜半に行われ、羽化して間もなく暗闇の中を林に飛び立つ。産卵は雌が水面上でホバリングして卵を糸状に出し、腹端を打って水面の植物に付着させる。雄はその周りを警護飛翔することがある。前肢をたたみ、中・後肢の4本でヤジロベエ型に止まる特徴がある。

県内に広く生息するが、生息地・個体数ともに減少している。

**(奈良岡弘治)****トンボ目 エゾトンボ科****C****和名** コヤマトンボ**環境省：該当なし****学名** *Macromia amphigena* Selys

全長：67～75mm。やや大型のトンボで、黒地に黄斑を有する。同じ科のオオヤマトンボに酷似するが、一回り小さく、頭部前面の黄色条が1本であることなどで区別できる。

北海道から九州までの日本全土、朝鮮・中国・ロシアに分布する。平地から山地の河川・沼・湖に生息し、成虫は6月から9月にかけて見られる。雄は池や沼岸などをパトロール飛翔する。産卵は雌が単独で水面や湿った土に尾端を打ち付けて行う。

1960年代前半までは各地に普通だったが（奈良岡, 1977）、その後少なくなり、現在は人里を離れた地域に限られる傾向があり、生息地・個体数ともに減少している。

**(奈良岡弘治)****トンボ目 トンボ科****C****和名** ハラビロトンボ**環境省：該当なし****学名** *Lyriothemis pachygastra* (Selys)

全長：30.5～37.5mm。小型の腹部が平べったいトンボである。雄の未熟個体と雌は黄褐色の地に黒斑がある。成熟した雄は胸部が黒色、腹部が青灰色となる。翅の基部は黄褐色である。

北海道南端から九州、国外では朝鮮・中国・ロシアに分布する。平地から丘陵地の湿地や水田に生息し、成虫は6月から9月まで見られる。雄は湿地に縄張りを形成する。雌は単独で打水産卵し、その近くをオスが警護飛翔する。

県内に広く分布するが、1980～1990年代に津軽地方を中心にほとんどいなくなった。2000年頃から復活したが、最近はまだ見られなくなり、個体数の多い所は少ない。

**(奈良岡弘治)**

**トンボ目 トンボ科****C****和名** オオシオカラトンボ**環境省：該当なし****学名** *Orthetrum melania* (Selys)

全長：46.5～54.5mm。未熟成虫は黄色の地に黒斑を有する。雄は成熟すると白粉を装い、全体が青色となる。雌の第9腹節は側片が膨れている。翅の基部と先端が黒褐色である。

日本全土、国外では朝鮮・台湾・中国・ロシアに分布する。平地から低山地の湿地・池・沼に見られ、成虫は7月から9月に出現する。雌は単独で打水産卵をする。この時にオスは近くを飛び警護する。シオカラトンボに似るが、やや太く黒っぽい。

1960年代までは県内各地に普通に見られたが（奈良岡, 1977）、その後各地で少なくなり、最近では生息地・個体数ともに減少している。**（奈良岡弘治）**

**トンボ目 トンボ科****C****和名** ショウジョウトンボ**環境省：該当なし****学名** *Crocothemis servilia* (Drury)

全長：41.5～48.5mm。未熟成虫は橙黄色であるが、雄は成熟すると全体が赤くなり、雌は茶褐色となる。翅の基部に赤褐色斑がある。北海道南端から九州まで、国外では朝鮮・台湾・中国・東南アジア・アフリカに分布する。

成虫は6月から9月まで見られる。交尾は飛翔しつつ行い10秒ほどで短い。雌は単独で打水産卵をする。雄は産卵雌の近くを飛びまわり警護することがある。

1960年代までは県内各地に普通に見られたが（奈良岡, 1977）、その後、ほとんどの地域でいなくなった。2010年頃から各地で復活の傾向が見られるが、個体数は少ない。**（奈良岡弘治）**

**トンボ目 トンボ科****C****和名** ヒメアカネ**環境省：該当なし****学名** *Sympetrum parvulum* (Bartenef)

全長：27.5～34mm。アカトンボ中で最も小さく、マユタテアカネに似るが、胸部前面中央の黒条が太く鮮明で、肩の黒条と上部で繋がることや、雌の産卵弁が腹端よりも長いことで区別できる。未熟成虫は黄褐色であるが、雄は成熟すると顔面が黄白色となり、腹部が赤化する。雌は橙褐色であるが、腹部が赤化するものもある。

日本全土に生息し、国外では朝鮮・中国・ロシアに分布する。平地から山地の湿地や休耕田などに生息し、成虫は7月から10月まで見られる。県内に広く分布するが、湿地の減少などで、生息地・個体数ともに著しく少なくなり、容易に発見できなくなっている。**（奈良岡弘治）**

**トンボ目 トンボ科****C****和名** カオジロトンボ**環境省：該当なし****学名** *Leucorrhinia dubia* (Van der Linden)

全長：31.5～36mm。小型のトンボで、黒地に黄褐色、または赤褐色の斑紋がある。頭部前面が乳白色で、翅の縁紋の外側が白い。成熟すると、雄では黄斑が赤化し、雌は黒味が増す。翅の基部に褐色斑がある。

北海道と本州山岳地帯、国外では朝鮮・中国・ロシア・ヨーロッパに分布する。青森県では八甲田山地域が唯一の産地である。湿地帯に生息し、6月下旬から8月末まで成虫が見られる。

生息地が国立公園の中にあるが、湿地の乾燥化や観光客の増加により個体数が減っている所もある。湿地帯の踏み荒らしなどによる、生息地の破壊を防ぐ必要がある。**（奈良岡弘治）**

**ゴキブリ目 ブラベルスゴキブリ科****C****和名** オオゴキブリ**環境省：該当なし****学名** *Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki)

本亜種は、国内では本州・四国・九州などに生息する森林性のゴキブリで、その生息環境は限定され局地的で、個体数は多くない（朝比奈, 1992；大野, 1993）。青森県内では深浦町十二湖（松野ら, 1966；朝比奈, 1988；福田ら, 1992；大野, 2002）、深浦町平沢川（工藤, 2019）などから記録されている。本種の生息地である十二湖ではブナの朽木の中に生息しているが、同じ朽木中に成虫と幼虫が混棲し（松野ら, 1966）、朽木の腐り加減や固さ・湿り具合に好みがあり、朽木は限定される（山内, 2014）。本生息地は白神山地の一部に属し、津軽国定公園に指定され保護されている。近年登山者・観光客が増加しており、登山道・遊歩道も整備され環境保全活動も活発に行われているが、写真撮影などのため林内・湖岸などへの立入が頻繁に見られ、環境の劣化が危惧される。林内の倒木・朽木などは撤去することなくそのままの自然状態に置くことが寛容である。マナー向上など継続した環境保全が望まれる。

**(山内智)****ナナフシ目 ヒゲボソナナフシ科****C****和名** ヤスマツトピナナフシ**環境省：該当なし****学名** *Micadina yasumatsui* Shiraki

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布（市川, 2014）するが、北海道では、松前半島などの津軽海峡側からのみ確認されている（堀・栗林, 2017）。おもに低山地の古い広葉樹林に生息しているが、里山の開発で生息地が衰退しており、少なくなっている。青森県内では、八戸市（福田, 1990）、大鰐町蔵館（福田, 1990；山田, 2002）、青森市横内、外ヶ浜町袴越岳、弘前市相馬・百沢、階上町、十和田市、五所川原市飯詰（山田, 2002）、青森市月見野（山内, 2004）、田子町新田、深浦町鯉山（山田, 2010）、南部町名久井岳、深浦町十二湖（山田, 2010, p.255）などから記録されている。深浦町鯉山ではミズナラの樹上で採集されている（山田, 2010）。県内でもナラ類の生育している里山は、開発によって徐々に無くなってきており、本種の生息適地が衰退し、減少している。里山の環境保全に配慮が望まれる。

**(山内智)****カメムシ目 ツノゼミ科****C****和名** ニトベツノゼミ**環境省：該当なし****学名** *Centrotus nitobei* Matsumura

翅端までの全長が、10mm前後と日本最大のツノゼミで、前胸背の角が後方に曲がる。本県では十和田市で採集されたタイプ標本1頭のみ記録されていた（Matsumura, 1912）。その後、関東地方などでは林縁のマユミヤコブシで発生することが確認された（林ら, 1983など）。佐藤（2016）により本県における宿主植物はホオノキであり、2012年に複数の幼虫・成虫が青森市で発見され、その後西目屋村でも確認された。ホオノキは各地に個体数が多いが、発生しているのは高木に限られるため、調査自体が容易ではない。個々の発生地は孤立しているおそれがあり、伐採などの環境改変に脆弱と考えられる。

**(市田忠夫)**

**カメムシ目 コオイムシ科****C**

和名 コオイムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Appasus japonicus* Vuillefroy

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などの、水田や池沼の開放的な止水域の清水に生息する。以前は全国的に普通に見られていたが、開発や水質汚染などから近年激減している（環境省, 2006, 2015；平嶋・森本, 2008）。青森県内では、石村・佐藤（1941）に黒石市浅瀬石、つがる市森田、八戸市に普通に分布とあり、古くから広域に分布していた。最近、深浦町赤石川（下山ら, 1991）、東通村荒沼（福田ら, 1997）、むつ市芦崎（むつ市教育委員会, 2002）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などからも記録された。県内でも、池沼の開発で本種の生息域である止水の池沼が減少し、水質汚染や外来魚放流など池沼を取り巻く環境も悪化してきており、生息地、個体数共に減少している。池沼や湿地環境の保全が望まれる。

(山内智)

**カメムシ目 ミズムシ科****C**

和名 ミズムシ

環境省：該当なし

学名 *Hesperocorixa distanti distanti* (Kirkaldy)

本亜種には、名義タイプ亜種ミズムシと *H. d. hokkensis* ホッケミズムシの2亜種が知られているが、名義タイプ亜種は国内では北海道・本州（青森県）から知られている。山形以南・四国・九州には後者が分布している（日本昆虫学会, 2016）。本亜種は池沼に生息するが開発等で生息に適した池沼が衰退し、減少してきている。青森県内では、つがる市森田、黒石市山形（石村・佐藤, 1941）、東通村荒沼・タカ沼（福田ら, 1997）、つがる市冷水沼・ソリ沼・大滝沼・ベンセ沼・平滝沼（大高ら, 2008a, 2008）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから記録されている。古くは県内でも各地の池沼に普通に見られていたと思うが、池沼の減少や水質汚染などによる環境の悪化から、生息地や個体数とも減少してきたと考えられる。

(山内智)

**カメムシ目 カタビロアメンボ科****C**

和名 エサキナガレカタビロアメンボ

環境省：該当なし

学名 *Pseudovelgia esakii* Miyamoto

本種は、本州北部（青森県・秋田県）の池沼の岸沿いの石下、倒木下に群生している。生息する場所が限られる。水質ばかりでなく湖岸の環境も劣悪になってきており、絶滅が危惧される（環境省, 2006；宮本, 2008；日本昆虫学会, 2016）。本種は十和田湖、むつ市宇曾利山湖で採集された標本によって、新種記載されたアメンボである（Miyamoto, 1959）。これらの地区では水質には大きな変化がないが、観光客は増加しており、一部の人々が湖岸まで入り込み、踏み荒らしている。またむつ市宇曾利山湖湖岸では車両が乗り入れて環境が悪化してきている。湖岸周辺部も含めた環境保全と観光地でのマナーの啓蒙が望まれる。

和名はエサキカタビロアメンボ（宮本, 2008）の別名もあるが日本昆虫学会（2016）に従った。

(山内智)

**カメムシ目 アメンボ科****C**

和名 ババアメンボ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Gerris babai* Miyamoto

本種は、国内では北海道・本州・九州などに分布する。止水域の池沼で、水草の繁茂する水面に生息している。生息地はかなり局地的で少ない（環境省, 2015）。青森県内では弘前公園（日浦, 1967, 1968）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから記録されている。

生息に適した湖沼が、開発や外来水生生物の放流などにより水質の悪化や水草減少などが進んでおり生息の脅威となっている。池沼の環境保全と本種の県内各湖沼群での調査が望まれる。

(山内智)

**カメムシ目 アメンボ科****C**

和名 キタヒメアメンボ

環境省：該当なし

学名 *Gerris lacustris* (Linnaeus)

ヒメアメンボと混同されていたが、微翅型を高率で発現させることなどから、別種であることが判明した。交尾器や腹部腹板の構造によりヒメアメンボやババアメンボと区別される。

これまでのところ、北海道・本県・岩手県・福島県からのみ確認されている (Usui *et al.*, 1997; 碓井, 1998; 碓井・疋田, 2001)。本県からは十和田市のみから確認されている。碓井 (1998) により、南八甲田山系の湖沼群の微翅型個体群がキタヒメアメンボであることが明らかにされ、普通のヒメアメンボと混生している。生息地では生息密度は高いものの、遊魚用としてニジマスなどの捕食性外来魚を放流している生息地もあり、捕食圧を受けているものと考えられる。 (市田忠夫)

**カメムシ目 ミズギワカメムシ科****C**

和名 ヒメミズギワカメムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Micracanthia hasegawai* (Cobben)

3～3.5mmの短翅 (中翅) で卵形の種で、背面に細毛を密生する。

本県の恐山を原産地とする種で (Cobben, 1985)、八甲田山系でも確認されている (市田, 1991)。ミズゴケ上に生息する種で、7月頃に成虫となる。恐山では1988年と2007年に、八甲田山系では1989年と1997年に市田が実際に確認している。1998～1999年の八甲田山系での調査の際には、注意して探したが確認できなかった。成虫の出現期間が短いため確認されにくいということもあるだろうが、楽観のできる現状ではない。北海道 (Cobben, 1985)、秋田県 (林, 2003) からも確認されているが、既知産地は少ない。 (市田忠夫)

**カメムシ目 カスミカメムシ科****C**

和名 モンキカスミカメ

環境省：該当なし

学名 *Capsodes gothicus* (Linnaeus)

体長7mm程度の中型で黒色のカスミカメムシで、小盾板・前胸側縁・前翅前縁・楔状部が黄色。雌は翅が短く飛翔できない。北海道と本県及び岩手県の海岸に分布し、風衝を受ける草地に生息する。安永ら (2001) で、クサフジが食餌植物であるとされ、本県でも幼虫がヒロハノクサフジから吸汁していることが確認された。市田 (1988) で外ヶ浜町と中泊町から、富岡 (1989) で八戸市から記録されている。 (市田忠夫)

**カメムシ目 マキバサシガメ科****C**

和名 オオマキバサシガメ

環境省：該当なし

学名 *Nabis ferus* (Linnaeus)

淡褐色のやや細長いカメムシで、触角や脚は細長い。水田などでも良く見られるハネナガマキバサシガメと似ているが、比べて見ると明らかに体幅が広いことから識別できる。従来、北海道と北陸地方から単発的に確認されていただけ (宮本, 1997) で、生息環境等は不詳であった。1998年に本県の下北半島太平洋側の砂浜海岸に広く生息していることが確認されたが、下北半島の津軽海峡側、陸奥湾沿岸、津軽半島日本海側の砂浜海岸からは全く発見できなかった (市田, 1999a, b)。東日本大震災後に八戸市からも確認された (野村・早坂, 2013)。震災後の防災工事などで、海岸への海砂供給が減少すれば、生息環境が悪化するおそれがある。 (市田忠夫)

**カメムシ目 マキバサシガメ科****C**

和名 ツマグロマキバサシガメ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Stenonabis extremus* Kerzhner

体長7.5~9.5mmの長翅のマキバサシガメで、普通のハネナガマキバサシガメに比べ、やや大きく体幅も広い。色彩は灰色味が強く、後腿節端が黒色になる。

日本では北海道遠軽町の1例のみが知られていた種であるが (Kerzhner, 1988)、その後本県のむつ市、西目屋村から確認され (市田, 1991)、宮城県でも発見された (市田, 1998b)。本州では河川敷・水田地帯の灯火へ飛来した個体が得られた例が多く、六ヶ所村で1例だけすくい採りで得られているが、生息する微環境は不明である。 (市田忠夫)

**カメムシ目 サシガメ科****C**

和名 ゴミアシナガサシガメ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Myiophanes tipulina* Reuter

体長17mm前後の一見ガガンボを思わせる細長いカメムシで、全身が長い毛で覆われる。

戦前の記録は石村・佐藤 (1941) の黒石市しかなかったが、市田 (1989) により弘前市の1961年の記録、黒石市教育委員会 (2001) によりつがる市の1934年の記録が報告されている。以後65年以上確認されていない。家屋性で物置などの壁面にいて他虫を捕食していたようであり、家屋構造の近代化により全国的にも急激に衰退しているが、伝統的な構造の民家などでは生存している可能性がある。山形県では情報不足とされている。 (市田忠夫)

**カメムシ目 ヒラタカメムシ科****C**

和名 ヤセオオヒラタカメムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Mezira termulae* (Germer)

9~10mmの扁平なカメムシで、黒褐色で全く艶がない。雄は他種にない下ぶくれ体型となる。

本種は枯倒木を豊富に有する老齢林の指標となる種で、全国的に確認例が少なく、環境省の新レッドリストでも準絶滅危惧とされている。本県では八甲田山系・白神山系・津軽山地から確認されているが、個体数は少ない (市田, 1991, 1993)。ヒラタカメムシは枯倒木を腐朽させる真菌類に寄生するもので、特に本種はブナ極相林の指標種となるものと考えられる。本県において自然度の高いブナ林は何らかの保全が図られており、差し迫った危機にはない。ただし、生息密度が低いため本種の発見は困難である。 (市田忠夫)

**コウチュウ目 オサムシ科****C**

和名 ナミハンミョウ

環境省：該当なし

学名 *Cicindela japonica* Thunberg

本種は、本州・四国・九州などの、沢・小川や小水路沿いの未舗装の林道や裸地した場所が主な生息地で、幼虫は土壤に穴を掘って生息している。全国的に少なくなっている。青森県内では、八戸市 (石村・佐藤, 1941; 福田・奈良, 1952)、黒石市 (石村・佐藤, 1941)、平川市津軽湯ノ沢 (福田・奈良, 1952; 佐藤ら, 1967)、平川市久吉 (佐藤ら, 1967)、三戸町蛇沼・赤岩 (山美ら, 1986)、南部町横沢 (佐藤ら, 1987)、十和田市滝沢、南部町鳥舌内、五戸町浅水 (成田, 1988)、南部町名久井岳・平川市古遠部 (成田, 1989b) などから記録されている。青森県内での生息地は、主に秋田・岩手県の県境付近に集中しており、局地的である。以前は山麓の未舗装林道、壁土の切通しなどによく見られたが (福田, 1969a)、近年は林道や農道の整備、切土や盛土が崩壊しないよう法面や斜面の整備も進み、適した生息環境が少なくなり、生息地消失、個体数の減少などが見られる。県内の本種生息の調査が望まれる。 (山内智)

**コウチュウ目 オサムシ科****C**

和名 コハンミヨウ

環境省：該当なし

学名 *Myriochila speculiferis* (Chevrolat)

体長は雄13.5mm、雌14mm内外。本種は関東地方までは普通種であるが、本県は分布の北限に当たり産地数・個体数ともに少ない。県内では平地から低山地の池沼・溜め池・河川敷などの湿った場所に局所的に生息し、幼虫は湿地周辺の裸地に見られる。このような環境は不安定で、護岸工事や河川改修によって減少するおそれがある。幼虫で越冬し、成虫は6～9月に見られる。

1980年代以降、津軽地域では平賀町（現平川市）・弘前市・黒石市・木造町（現つがる市）・森田村（現つがる市）・金木町（現五所川原市）・青森市（以上、成田，1988；成田，1989b）の記録があり、2010年には鶴田町で生息を確認した。下北地域では恐山（北畠，1955）の古い記録しかなく調査不足と思われる。  
(櫛田俊明)

**コウチュウ目 オサムシ科****C**

和名 セアカオサムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Carabus tuberculatus* Dejean

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などの、草原や草地などに生息しているが、草地管理放棄、草地開発などによって生息地が減少してきている（環境省，2015；井村・水沢，2013）。青森県内では、黒石市山形、八戸市（石村・佐藤，1941）、東通村尻屋（阿部，1970；下山，1978）、大間町（阿部，1970）、階上町道仏、弘前市百沢（下山，1978；山谷・草刈，1982）、平川市大木平（下山，1978；吉武ら，2011）、黒石市田中・青荷、平川市葛川・温川（下山，1978）、八戸市笹子・番屋、野辺地町、青森市野内、つがる市木造・出野里・林・森田・相野、五所川原市飯詰、鱈ヶ沢町長平、深浦町大戸瀬・松神、弘前市松原（山谷・草刈，1982）、平川市平賀（吉武ら，2011）など広域で生息が確認されているが、草地開発や河川敷の整備などにより、生息に適した環境が衰退してきており、生息地消失、個体数の減少などが見られる。継続した草原・草地の適切な管理と環境保全が望まれる。  
(山内智)

**コウチュウ目 オサムシ科****C**

和名 ヒメクロオサムシ東北地方亜種

環境省：該当なし

学名 *Carabus opaculus shirahatai* Nakane

本亜種は、主に東北地方の亜高山・高山に生息し、山頂付近の石下などから採集される。青森県内では、青森市大岳（阿部，1970，1980；山谷・草刈，1982）、岩木山（阿部，1970；下山，1978）、深浦町白神岳（阿部，1970，1980；山谷・草刈，1982）、八甲田山（下山，1978）、岩木山山頂（阿部，1980）、弘前市岳、十和田市高田大岳（山谷・草刈，1982）など、岩木山・八甲田山・白神岳の山地から記録されている。本生息地域の一部は、国立・国定公園、世界自然遺産登録地域で保護されている。しかし近年登山者が増加し、登山道以外の立入禁止やゴミ・糞尿の処理、裸地化などの対策も官民一体となって取り組んでいるが、生息に適した環境の悪化が危惧される。登山者のマナー向上など継続した環境保全が望まれる。  
(山内智)

**コウチュウ目 オサムシ科****C****和名** アカガネオサムシ本州亜種**環境省：絶滅危惧Ⅱ類****学名** *Carabus granulatus telluris* Bates

本亜種は、国内では本州中部から北東部の主に水辺の湿地帯を生息地としているが、その分布は局地的である。湿地帯の開発、河川敷湿地の整備、採集圧などにより全国的に生息地、個体数ともに減少してきている（環境省, 2015；井村・水沢, 2013）。青森県内では、十和田湖畔（石村・佐藤, 1941）、つがる市森田・稲垣（阿部, 1970）、つがる市緑川（下山, 1978）、つがる市柴田・繁田（下山, 1978；山谷・草刈, 1982）、つがる市車力・中派立・出野里・林、五所川原市十三湖（山谷・草刈, 1982）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999）、六ヶ所村室ノ久保・鷹架（荒木, 2001）などから記録されている。特に、つがる市柴田では積んでいたサルケ（泥炭）から越冬個体を採集した（下山, 1978）。十和田湖湖畔からは近年の採集記録は知られていない。生息地の岩木川河川敷の湿地帯は好採集地として広く知られており、採集者も多く訪れ、湿地立入、トラップ設置、倒木・枯木の破壊などが生息環境に大きな影響を与えている。また河川敷の湿地帯では開発や河川整備も行われており生息を困難にしている。

青森県の個体については北海道亜種 *C. g. yezoensis* Bates（別名：エゾアカガネオサムシ）との類似性が議論され、下山（1978）ではエゾアカガネオサムシとして記録している。本レッドデータブックでは井村・水沢（2013）に従い本州亜種とした。（山内智）

**コウチュウ目 オサムシ科****C****和名** ワタラセハンミョウモドキ**環境省：絶滅危惧ⅠB類****学名** *Elaphrus sugai* Nakane

本種は本州の茨城県・栃木県・青森県などの池沼・河川周辺のヨシ原の湿地に限られ生息し、その産地は大変局地的で希少種である。生息地周辺の湿地植生の遷移などにより、どここの生息地でも絶滅に瀕している（環境省, 2006, 2015）。青森県内では最近中泊町長泥のヨシ原で記録されている（横山, 2008）。生息地の岩木川河川敷のヨシ原は長年計画的に野焼きされ維持されてきたが、一部は開発や河川整備が行われ、ヨシ原に遷移が見られる。また、本種はオオハンミョウモドキ亜属のなかでも特に珍しい種類のため採集者による採集圧が絶滅の脅威となっている。生息地の環境保全と採集者のマナーの啓蒙が望まれる。（山内智）

**コウチュウ目 オサムシ科****C****和名** イワキナガチビゴミムシ**環境省：該当なし****学名** *Trechiana oreas* (Bates)

本種は、亜高山から高山帯に見られ東北地方北部などに分布している。土中に生息し、森林の溪流沿いの石下から採集される。体長6mm内外と小さく後翅も退化して、移動力は低い。採集例の少ない種類である。本種は、岩木山から G. Lewis が1880年に採集した資料によって新種記載（Bates, 1883）された。青森県内では岩木山の他に横岳赤滝（八甲田山）（下山, 1978）などの高山帯からも記録された。生息地は国立（定）公園であり、登山道の整備、裸地化の改善、環境保全活動にも官民一体で取り組んでいるが、登山者も年々増えており、登山道以外の立入、山菜の採取などによる土壌環境の悪化が危惧される。登山者のマナー向上など継続した環境保全が望まれる。（山内智）

**コウチュウ目 オサムシ科****C****和名** シラカミナガチビゴミムシ**環境省：該当なし****学名** *Trechiana albidivalis* S.Uéno

本種は、深浦町白神岳・天狗峠・一ツ森・青池、鱒ヶ沢町乱岩ノ森・二ツ森、そして秋田県の藤里町で採集された資料によって新種記載 (S.Uéno, 1994) された、世界自然遺産「白神山地」及び周辺地域の固有種である。土中の浅層に生息している。体長6mm内外と小さく、後翅が退化して、移動力が低い。環境の変化に大変敏感な種類である。白神山地及び周辺地域の環境が大変良好な状態で保たれてきた証拠となる種類で、近年登山者や観光客が増加しており、登山道や遊歩道も整備され環境保全活動も活発に行われているが、写真撮影などのため林内や湖岸などへの立入などが頻繁に見られ、土壌環境の劣化が危惧される。マナー向上など継続した環境保全が望まれる。(山内智)

**コウチュウ目 オサムシ科****C****和名** シラカミメクラチビゴミムシ**環境省：該当なし****学名** *Oroblemus yamauchii* S.Uéno

本種は、深浦町白神岳で採集された標本によって新種記載 (S.Uéno, 1993) されたが、個体数も少なく、世界自然遺産「白神山地」の固有種である。地中の浅層に生息し、体長3.3mm内外で複眼と後翅は退化している。そのため移動範囲は大変に狭く、広範囲での移動は不可能であり、生息地は極端に限定される。白神山地の環境が大変良好な状態で保たれてきた証拠となる大変貴重な種類で希少種である (山内, 1996)。

本種は環境変化による土壌の乾燥などに大変弱く、環境悪化が起これば短期間で絶滅する可能性が高い。本生息地域は世界自然遺産登録地域で保護されている。しかし近年登山者が増加し、官民一体となって、登山道以外の立入禁止やゴミ・糞尿の処理に取り組んでいるが、土壌環境の悪化が危惧される。登山者のマナー向上など継続した環境保全が望まれる。(山内智)

**コウチュウ目 オサムシ科****C****和名** オオワニメクラチビゴミムシ**環境省：該当なし****学名** *Kurasawatrechus nishikawai* S.Uéno

本種は、大鰐町十和田山で採集された標本によって新種記載された (S.Uéno, 1993)。個体数も少ない希少種である。地中に生息しており、複眼と後翅は退化して無く、移動力が低い種類である。本種は地上の環境変化に大変敏感で、土壌の乾燥に大変弱い種類である。環境が変化しても微小で複眼・後翅とも痕跡的にしか無いため、良好な環境を求めて移動することも出来ず、環境の変化によっては短期間で絶滅する可能性が高い。本地域の樹木伐採や水路の分断などの環境の変化が生息に大きな脅威となる。環境保全が望まれる。(山内智)

**コウチュウ目 オサムシ科****C****和名** オソレヤマミズギワゴミムシ**環境省：該当なし****学名** *Bembidion negrei* Habu

本種は、国内では北海道・本州などに分布する。生息地は硫化水素の臭いのする温泉水の流れる水辺でのみ生息する (森田, 1984; 山内, 1989; Morita, 2010)。生息環境が特殊なこともあり、本種が棲む生息地は局地的で少ない。本種は、むつ市恐山の宇曾利山湖湖畔で採集された資料によって新種記載された (Habu, 1958; 森田誠司・山内智, 1986)。生息地は下北半島国定公園であり環境省の重要湿地にも指定され、観光客も年々増加している。生息地では湖畔まで人が入り込み、また車両が乗り入れられ、生息場所が踏み荒らされている。さらに継続した環境保全が望まれる。(山内智)

**コウチュウ目 オサムシ科****C**

和名 スナハラゴミムシ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Diplocheila elongate* (Bates)

本種は、国内では本州・四国・九州などの河川や溜池周辺の湿性草地に見られるが、その生息は局地的で全国的に少ないゴミムシである（環境省, 2015；森, 2018）。

青森県内では、つがる市高山稲荷（吉武ら, 2011）などから記録されているが、生息地周辺の草地環境は開発などで遷移しており、河川周辺の湿地草原の環境保全と県内での今後の調査が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 オサムシ科****C**

和名 イグチケブカゴミムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Peronomerus auripilis* Bates

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布している。池沼や河川の水辺や湿地などの草地で見られるが、生息数は多くない。池沼や河川敷・湿地の整備等から、生息に適した環境が衰退し、全国的に生息が危惧されている（環境省, 2015；森, 2017）。

青森県内では三沢市八幡（山内, 1999）、三沢市仏沼・内沼（阿部ら, 2002）、つがる市森田、外ヶ浜町龍飛（吉武ら, 2011）などから記録されているが県内での記録は少なく希少種である。生息地では開発や整備が進んでおり、本種の生息適地が少なくなっている。水辺の環境保全が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 オサムシ科****C**

和名 クマガイクロアオゴミムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Chlaenius gebleri* Ganglbauer

オサムシ類に共通の体形で、体色も黒色である。上翅の間室は光沢が鈍く、密生した暗色毛と金色の毛を交互に備えて縞模様になっている。同様の環境に生息するマークオサムシを小型にしたような種とも云える。青森県では岩木川河口部からの限定的な記録のみで（佐藤・尾崎, 2000）、北海道では多く、秋田県や関東からの記録もある。

生息域は、ヨシやイネ科等の水辺植物の生えた良好な環境であり、より水辺を好むと考えられることから、河川改修等でヨシ原の乾燥が進むと棲家も失われ、絶滅に追い込まれ易いと考えられる。

(佐藤隆志)

**コウチュウ目 オサムシ科****C**

和名 エチゴトツクリゴミムシ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Oodes echigonus* Habu et Baba

本種は、本州・九州などの池沼周辺や湿地帯に生息する、好湿地性ゴミムシである。生息地は局地的に限られた環境に生息するが、全国的に池沼や湿地の開発などにより生息環境が劣化し、生息が危惧されている（森, 2011；藤本, 2013；環境省, 2015）。青森県内ではつがる市平滝沼（下山, 1979；吉武ら, 2011）などから記録されている。生息地は湿地草原が広がっているが、車両の立入や周辺では開発が進んで、生息に適した環境が失われつつある。池沼周辺の湿地草原の環境保全と県内での今後の調査が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科****C**

和名 ヒゲブトコツブゲンゴロウ

環境省：該当なし

学名 *Noterus angustulus* Zaitzev

体長4.0mm前後。平地から丘陵地の水生植物の豊富な止水域に生息する。本種は国内では新潟県・福島県以北に分布し、県内では正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群（山崎・八木, 1992；山本, 1996；大高ら, 2008）、岩木川下流域（中根, 1993）、小川原湖沼群（堀, 2000；岩田ら, 2019）に局所的に生息する。同所的に見られ、平地から山地の池沼に普通なコツブゲンゴロウとは、雄では触角の形状で容易に区別できる。しかし、雌では体型がやや細い程度（体長は体幅の約2倍、コツブは2倍未満）で、区別は難しい。成虫で越冬する。

(櫛田俊明)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 ヒメケシゲンゴロウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Hyphydrus laeviventris* Sharp

体長4.5～5.0mm。平地から丘陵地の水生植物の豊富な止水域に生息する。本種は国内では北海道・本州・四国・九州に分布し、県内では正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群・岩木川下流域・小川原湖沼群の池沼や溜め池などに局所的に生息し（山崎・八木, 1992；中根, 1993；神奈川県立博物館編, 1995；林・初宿, 2003；山本, 1996；志賀ら, 2009；岩田ら, 2019）、個体数も少ない。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。小型だが産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。成虫で越冬する。

(櫛田俊明)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 ケシゲンゴロウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hyphydrus japonicus* Sharp

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布している。池沼・湿地帯などの止水域に見られるが生息地は局地的である。特に最近では池沼などの開発や水質汚染などで全国的に減少している（環境省, 2015）。青森県内からは古くは青森市・黒石市・八戸市などに普通に見られたが（石村・佐藤, 1941）、最近では深浦町十二湖（福田ら, 1995）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999；岩田ら, 2019）、つがる市冷水沼・ソリ沼・筒木坂5号溜池（大高ら, 2008）などから記録されているが、池沼周辺地の開発、水田放棄、外来魚の放流などによって、池沼の環境悪化や消失などから、個体数を減らしている。本種生息地の保全が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 ナガケシゲンゴロウ

環境省：該当なし

学名 *Hydroporus uenoi* Nakane

体長3.5mm前後。本種は本州（東北地方・中部地方）に分布し、本県は分布の北限に当たる。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群と岩木川下流域・三沢市の湿原内の水溜まりや池塘に局所的に生息する（山崎・八木, 1992；Nilsson & Nakane, 1993；山本, 1996；池田・高橋, 2003；鳥羽, 2011；岩田ら, 2019）。近年、乾燥化が激しく、生息域が急激に狭められている。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。小型だが産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。成虫で越冬する。

(櫛田俊明)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 コウベツブゲンゴロウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Laccophilus kobensis* Sharp

本種は、国内では本州・四国・九州などに分布している。平野部の池沼・湿地帯などの止水域に見られるが生息地は局地的で、開発や水質汚染などから全国的に絶滅が危惧されている（環境省, 2015；森・北山, 1993）。青森県内では、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから最近記録されているが、池沼や湿地などの開発、整備、外来魚の放流などで、良好な水生植物群落が失われてきており、溜池などの維持管理と環境保全、県内各池沼などでの今後の調査が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 ルイスツブゲンゴロウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Laccophilus lewisius* Sharp

本種は、日本国内では本州・四国・九州などに分布する。平野部の水生植物が繁茂している池沼や湿地帯などに生息しているが、開発などで池沼環境が衰退し、全国的に分布は局地的で個体数が減少している（環境省, 2015；森・北山, 1993）。青森県内からは、青森市梵珠山滝巻沢（山内, 1996）、つがる市冷水沼・ソリ沼・筒木坂5号溜池（大高ら, 2008a, 2008）などから記録されている。生息地の屏風山地区も、池沼や湿地の開発や外来魚の放流などにより生息に適した環境が衰退してきており、個体数ともに減少してきている。溜池などの維持管理と環境保全、県内各池沼などでの今後の調査が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 キベリクロヒメゲンゴロウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Ilybius apicalis* Sharp

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布する。丘陵地などの水生植物が生育している池沼などに生息しているが、開発などにより池沼が衰退して、全国的にやや局地的で個体数が減少している（環境省, 2015）。最近、青森県内では東通村小沼・荒沼（大高ら, 2008b；木村ら, 2018）、つがる市平滝沼（大高ら, 2008a, 2008）、弘前市弘前だんぶり池（木村ら, 2016）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから記録されているが、池沼の減少と外来魚の放流などによる環境の悪化で、生息地・個体数ともに減少してきている。生息地の環境保全が必要である。

(山内智)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 シマゲンゴロウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hydaticus bowringii* Clark

体長12~14.5mm。平地から丘陵地の水生植物の豊富な浅い池沼や溜め池などに生息する。本種は国内では北海道から南西諸島まで分布し、県内でも、かつては山形村、黒石町（ともに現黒石市）（石村・佐藤, 1941）や森田村（現つがる市）（阿部, 2008）など、局所的だが広く分布していたようである。本種の記録は非常に少なく、正式な報告例は横浜町（1999年：阿部, 2008）と三戸町（1991~1993年：田沢, 2000）だけであったが、2019年に大鰐町で生息が確認された（渡辺・大庭, 2019）。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、容易に減少・絶滅するおそれがある。成虫で越冬する。

(櫛田俊明)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 マルガタゲンゴロウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Graphoderus adamsii* (Clark)

体長12～14.5mm。平地から丘陵地の水生植物の豊富な止水域に生息する。本種は国内では北海道・本州・四国・九州に分布し、県内では正式な報告例は少ないが、1990年代までは屏風山湖沼群や岩木川下流域などの平地から丘陵地の池沼や溜め池などに生息していた（山崎・八木, 1992；山本, 1996；初宿, 2011）。しかし、2000年代以降、急激に減少した。全国的にも減少が著しく、環境省編（2015）によれば、各地でアメリカザリガニ等の侵略的外来種の侵入により減少しているという。近年、本種の生息域である平地から丘陵地の池沼や溜め池などでもオオクチバスやアメリカザリガニ、ウシガエルが多く見られるようになったことから（青森県, 2006）、既に絶滅あるいは絶滅の危機にある場所も多い。

(榎田俊明)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 クロゲンゴロウ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Cybister brevis* Aubé

本種は、国内では本州・四国・九州などに分布する。平地の水生植物が生育している池沼や水田・湿地などに生息しているが、やや局地的である。開発や整備・水質汚染などにより全国的に生息地及び個体数が少なくなっている（環境省, 2015）。青森県内では八甲田、八戸市（石村・佐藤, 1941）、つがる市コケヤチ（阿部, 2008）などから記録されているが、開発などによる池沼や湿地の減少と外来魚の放流などによる環境の悪化で、生息地・個体数ともに激減し絶滅が危惧される。生息に適した良好な環境の池沼保全が必要である。

(山内智)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 ゲンゴロウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Cybister chinensis* Motschulsky

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などで、山地から平野部まで広く分布している。本種は水生植物が生育している池沼や水田・湿地などを生息地とし、小魚や昆虫などを食べている。全国的に各地に普通であったが、池沼の農薬などによる水質汚染、外来魚の放流などによる環境の劣化などによって全国的に激減している（日本野生生物研究センター, 1980；環境省, 2006, 2015；森・北山, 1993）。青森県内では戦前は各地の池沼に普通であったが（石村・佐藤, 1941）、最近では三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999；岩田ら, 2019）、弘前市弘前だんぶり池（木村ら, 2016）、東通村下小沼（木村ら, 2018）などから記録されている。生息地・個体数ともに激減し絶滅が危惧される。生息に適した良好な環境の池沼の保全が必要である。

(山内智)

**コウチュウ目 ゲンゴロウ科****C**

和名 エゾゲンゴロウモドキ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Dytiscus marginalis czerskii* Zaitzev

本亜種は、国内では北海道・本州中部以北の山間部の水のきれいな池沼に生息している。個体数は少なく環境の変化に弱い。本州の生息地は局地的である（環境省, 2006, 2015）。青森県内では、八戸市（中根, 1986）、むつ市川内（下山ら, 1986）、鱒ヶ沢町ノロ沼・青沼・乱岩ノ森、深浦町追良瀬川（阿部ら, 1987）、大鰐町十和田山（榎田ら, 1990）、深浦町十二湖（森・北山, 1993）、十和田市蔦（榎田, 1995）などから記録されている。近年、深浦町十二湖では心ない採集者の乱獲により、個体数が激減した。他地域でも乱獲や池沼への外来生物流入などにより環境が生息に適しなくなっており、生息地や個体数が減少して絶滅が危惧される。生息に適した良好な環境の池沼の保全が必要である。

(山内智)

**コウチュウ目 ミズスマシ科****C**

和名 オオミズスマシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Dineutus orientalis* (Modeer)

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布する。自然環境が残された池沼の止水域に生息するが、池沼の開発や整備・水質汚染などにより全国的に生息地及び個体数が少なくなっている（環境省, 2015）。青森県内では青森市横内、黒石市、八戸市（石村・佐藤, 1941）など各地に見られていた。最近はつがる市大滝沼・平滝沼（大高ら, 2008a）、東通村左京沼（大高ら, 2008b；木村ら, 2018）、つがる市大滝沼・ベンセ沼・筒木坂5号溜池（大高ら, 2008）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから記録されている。本種は池沼や湿地の開発、水質汚濁、外来魚流入による捕食圧などから他県同様その生息地及び個体数を減らしている。池沼の環境保全と本種の保護が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 ミズスマシ科****C**

和名 ミズスマシ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

学名 *Gyrinus japonicus* Sharp

本種は、北海道・本州・四国・九州などに分布する。主に平野部にある良好な環境に残された池沼に見られる。本種は以前全国的に普通に見られる種類であったが、池沼の衰退や環境悪化などから絶滅が危惧されている（佐藤, 1977；環境省, 2015）。青森県内でも以前は各地に普通に生息していた（石村・佐藤, 1941）が、最近では深浦町赤石川（青森県立郷土館, 1988）、深浦町森山（福田ら, 1995）などから記録されている。本種は池沼や湿地の開発、水質汚濁、外来魚流入による捕食圧などから他県同様その生息地及び個体数を減らしている。池沼の環境保全と本種の保護が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 ミズスマシ科****C**

和名 ヒメミズスマシ

環境省：絶滅危惧ⅠB類

学名 *Gyrinus gestroi* Régimbart

本種は、本州・四国・九州などに分布している。池沼の良好な環境が残された止水域の水面を生活の場としているがもともと個体数は少ない（佐藤, 1977）。開発や水質汚染などから水中・水面とも環境が悪化し、全国的に絶滅に瀕している（環境省, 2015）。青森県内でも以前各地に普通に生息していた（石村・佐藤, 1941）が、最近では深浦町赤石川（青森県立郷土館, 1988）、深浦町森山（福田ら, 1995）、つがる市冷水沼・出来島2号溜池・平滝沼（大高ら, 2008）、東通村左京沼（木村ら, 2018）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから記録されている。本種は池沼や湿地の開発、水質汚濁、外来魚流入による捕食圧などから他県同様その生息地及び個体数を減らしている。池沼の環境保全と本種の保護が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 ガムシ科****C**

和名 ガムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布し、池沼などの止水域を主な生息地としている。開発などで全国的に生息に適した池沼などが減少し、本種の生息も衰退している（環境省, 2015）。青森県内でも以前は普通に見られたが（石村・佐藤, 1941）、池沼開発、水田整備、外来魚流入などからその生息地及び個体数を減らしている。最近では三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999；岩田ら, 2019）、平川市、弘前市浜の町、西目屋村砂子瀬、つがる市コケヤチ、鶴田町胡桃館（阿部, 2013）、弘前市弘前だんぶり池（木村ら, 2016）などから記録されている。本種は池沼や湿地の開発、水質汚濁、外来魚流入による捕食圧などから生息地及び個体数を減らしており、池沼の環境保全と本種の保護が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 ガムシ科****C****和名** エゾコガムシ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Hydrochara libera* (Sharp)

ゲンゴロウ類と同様に扁平・楕円形で、水中生活に適応した形態を有し、県内では五所川原市十三湖鳥谷川河口、中泊町十三湖南岸、つがる市豊富・牛潟池・袴形池・平滝沼、東通村尻屋崎・荒沼、むつ市八忠沼での記録がある（林・八木, 2000；佐藤, 2006；吉富ら, 2001）。

また、以前は北日本中心の記録であったが、近縁のコガムシとの再検討が進んだことで、近畿、広島県（秋山, 2004）・佐賀県でも分布することが確認された。

生息域は、津軽半島・下北半島の湿原地帯であり、水生植物が繁茂する良好な止水環境と考えられ、池の富栄養化に伴う水質悪化等により、種の維持が困難になり易いものと予想される。

**(佐藤隆志)****コウチュウ目 オサシテムシ科****C****和名** ツガルホソシテムシ**環境省：該当なし****学名** *Lyrosoma pallidum* (Eschsholtz)

本種は、国内では北海道・本州北部に分布している。青森県内からは外ヶ浜町龍飛崎の海岸の波際の石下（Mroczkowski, 1959；下山, 1978）、深浦町森山の海岸の砂浜（福田ら, 1994）などから記録された。いずれの生息地も海岸であり、生息地も局地的で個体数も少ない希少種である。青森県以外では、北海道（Shibata, 1969；吉田, 2014）と岩手県（中村, 1985）などの海岸からも記録されている。

生息地が海岸と言う特殊な場所であり、海岸の開発、車両立入などによる環境の衰退が生息に影響する。小石や礫が自然状態で堆積した部分を含めての砂浜の環境保全の配慮が必要である。

**(山内智)****コウチュウ目 クワガタムシ科****C****和名** オオクワガタ**環境省：絶滅危惧Ⅱ類****学名** *Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse

本亜種は国内では、北海道・本州・四国・九州などに分布している。山里の開発や採集圧等により全国的に生息地や個体数とも絶滅が危惧されている（環境省, 2015；岡島ら, 2012）。青森県内では主に環境の良いブナ林に生息しており個体数は少ない。十和田市蔦・青撫山（山谷, 1938）、青森県（山谷, 1938）、八甲田山（石村・佐藤, 1941）、十和田市宇樽部、新郷村迷ヶ平、青森市酸ヶ湯（柏崎, 1974）、十和田市焼山・蔦（下山, 1985, 1988, 1989）などで朽木や灯火飛来した個体が記録されている。県内でも森林の開発や採集のための朽木の分解などの採集圧のため、生息に適した環境が失われてきており、生息地の環境保全と保護が望まれる。

**(山内智)****コウチュウ目 コガネムシ科****C****和名** ダイコクコガネ**環境省：絶滅危惧Ⅱ類****学名** *Copris ochus* (Motschulsky)

本種は、国内では北海道・本州・九州などに分布する。牧場などの獣糞にあつまり、灯火にもよく飛来する。酪農の放牧地や飼養頭数が飼養家の減少や飼養形態の変化などから減少しており、それに伴うように全国的に本種も生息地及び個体数とも激減している（川井ら, 2008；環境省, 2015）。青森県内では、東通村尻屋（山内, 1981；福田ら, 1998）、東通村下田代（山内, 1981）などで放牧場の牛糞から、東通村小田野沢、横浜町桧木（山内, 1983）では灯火に飛来した個体が記録されている。

青森県でも酪農家の高齢化や後継者の問題から、酪農家戸数、乳用牛・肉用牛の飼養頭数も年々減少している（青森県農林水産部畜産課, 2019）。本種の生息に適した環境も少なくなっている。今後、各地域の放牧地での詳しい調査が待たれる。

**(山内智)**

**コウチュウ目 コガネムシ科****C****和名** ミヤマダイコクコガネ**環境省：該当なし****学名** *Copris pecuarius* Lewis

本種は国内では本州・四国・九州などに分布し、牛馬糞に集まることが多く、灯火にも飛来する（川井ら, 2008；岡島ら, 2012）。産地は限られ少ない。本種は高原の放牧地に見られることが多く、青森県内では、青森市田代平、平川市湯ノ沢（阿部, 1980）、むつ市大室平（斎藤, 1987）、青森市田代平・寒水沢・萱野茶屋、十和田市葛・焼山（斎藤, 1993）などの記録がある。八甲田山地の高原に広がる放牧地に記録が集中している。

飼養形態の変化、また飼養戸数や放牧地の減少（青森県農林水産部畜産課, 2019）が生息に影響している。森林内の獣糞にも集まることから、明細な調査が望まれる。（山内智）

**コウチュウ目 コガネムシ科****C****和名** オオチャイロハナムグリ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Osmoderma opicum* Lewis

本種は、国内では本州・四国・九州などに分布し、自然度の高い地域に分布する希少種であるが、森林の伐採、林道整備などで絶滅が危惧されている（環境省, 2006, 2015）。幼虫は森林内の大径木の樹洞内に溜まったフレークを食べているが、ブナ・スギに多いと言う（大野, 1987）。青森県内では、十和田市葛（古川, 1928）、十和田市十和田湖（平山, 1936）、十和田市奥入瀬（山谷, 1936）、三戸町（渡邊, 1937）、平川市御鼻部山（山谷, 1943）、むつ市恐山（鈴木ら, 1951）、平川市矢捨山、深浦町十二湖（五所川原農林高校自然科学部, 1966）、むつ市薬研（太田ら, 1970）、鱒ヶ沢町赤石川（楢引, 1971）、弘前市中村川（阿部, 1972）、青森市野内川（木村, 1973）、中泊町七ツ滝（阿部・藤田, 1976）、十和田市青撫山（山谷, 1977）、田子町雷鉢森（漆館ら, 1978）、鱒ヶ沢町女行沢・乱岩森、深浦町追良瀬川、平川市滝ノ沢、青森市田代平（阿部, 1980）、中泊町折腰内、弘前市高岡、平川市尾崎山・温川、十和田市黄瀬川（成田, 1980）、弘前市湯口山（下山, 1989）、鱒ヶ沢町奥赤石（下山ら, 1991）、十和田市赤沼沢（山内, 1999）、七戸町大坪川（上原, 2007）などの自然林で確認されているが、どこでも確認個体数は少なく、継続した生息調査と樹洞を形成する巨木などのある自然林の環境保全が望まれる。（山内智）

**コウチュウ目 コメツキムシ科****C****和名** キベリマルヒサゴコメツキ本州亜種**環境省：該当なし****学名** *Hypolithus littoralis michinoku* Kishii

本亜種は、国内での分布は本州で、風間浦村蛇浦をタイプ産地に新亜種として記載された（Kishii, 2004）。その生息地は海岸で特殊な種類である（大平, 1963）。産地は局地的で、採集記録が少ない希少種である。青森県内では、他に、東通村野牛・岩屋、大間町大間平（荒木, 1995）などの下北半島の海浜で確認されている。

本亜種の生息地は海岸で特殊な環境であり、青森県内では下北半島の津軽海峡に面した地域で確認されている。海岸の環境保全と、記録がみられない太平洋沿岸、陸奥湾沿岸、日本海沿岸での分布の詳しい調査研究が望まれる。（山内智）

**コウチュウ目 コメツキムシ科****C****和名** シモヤマミヤマヒサゴコメツキ**環境省：該当なし****学名** *Homotechnes motschulskyi shimoyamai* (Ôhira)

本亜種の属するミヤマヒサゴコメツキ類は、国内から多くの亜種が知られている。本亜種は、深浦町白神岳から採集された資料によって新亜種記載（大平・下山, 1984）された。この他深浦町笹内川（福田ら, 1993）などからの記録がある。白神山地固有種で、生息地が限定され、個体数の少ない希少種である。本亜種は白神岳を中心に生息するが、隣接する秋田県二ツ森、鱒ヶ沢町乱岩の森には別亜種トウホクミヤマヒサゴコメツキが生息する（Kishii, 1999）。白神山地の中で2亜種に分かれたのは赤石川・追良瀬川などの河川が関係している可能性がある（山内, 1994）。種の分化の問題からも貴重な種類である。

生息地は、世界自然遺産登録地域で保護されているが、近年、白神岳及び周辺地域への登山者が増加し、官民一体となって登山道以外の立入やゴミ・糞尿処理などに取り組んでいるが、環境の悪化が心配され、本種の生息が危惧される。  
(山内智)

**コウチュウ目 コメツキムシ科****C****和名** チビヒサゴコメツキ本州亜種**環境省：該当なし****学名** *Hypnoidus rivularius rivalis* (Lewis)

本種は、高山性で産地が局地的な希少種である。G. Lewisが1880年に岩木山山頂付近で採集した標本によって新種記載（Lewis, 1894）された。その後本州亜種となった。

本種は、青森県・秋田県・岩手県・山形県・福島県の東北地方などに分布（Kishii, 1999）するが、青森県内では岩木山（Lewis, 1894）、岩木山、八甲田山（Kishii, 1962）、十和田市黄瀬菴（青森県, 1993）、弘前市岩木山（大平・山内, 1994）、青森市大岳（大平・山内, 1997）などの記録がある。これら山頂付近の石下から発見されることが多い。県内の生息地は、国立（定）公園に指定され保護されているが、近年の登山者の増加により、環境が悪化しており、青森県が中心になって岩木山、八甲田山の両地域の山頂付近の表土の保全対策などを行っているが、本種の生息が危惧される。

(山内智)

**コウチュウ目 コメツキムシ科****C****和名** ミチノクシモフリコメツキ**環境省：該当なし****学名** *Actenicerus nempta* Kishii

本種は、青森県・岩手県などに分布（Kishii, 1999）する希少種である。本種は、青森市酸ヶ湯、十和田市谷地・猿倉と岩手県松尾村の資料に基づいて新種記載（Kishii, 1996）された。他に青森県内からは青森市毛無岱（大平・山内, 1997）、十和田市猿倉岳、平川市ズネカ森（大平・山内, 1998）などから記録されている。本種は、高層湿原の湿地内に残されたダケカンバやチシマザサなどの葉上から見出され、幼虫の生息場所は湿地性の傾向が強いと思われる（大平・山内, 1997）。生息地域は、十和田・八幡平国立公園内で昆虫採集の禁止区域で保護されているが、成虫・幼虫の生息環境である湿地帯への入山者、山菜採取者の立入などにより環境が悪化し、本種の生息が危惧される。

(山内智)

**コウチュウ目 コメツキムシ科****C****和名** エゾクロツヤミズギワコメツキ本州亜種**環境省：該当なし****学名** *Fleutiauxellus yezoensis tsugaru* Ôhira

本亜種は、青森市酸ヶ湯の山道の砂礫中から採集された資料を基に新種記載（大平, 1994）された。分布が局地的な希少種である。

本亜種の生息地域は、十和田・八幡平国立公園内で温泉地でもあり北八甲田の登山口にあたり、登山者や車両の出入りも多く、環境が悪化し、生息が危惧される。今後も継続した環境の保全活動が必要である。本亜種の分布や生態など不明な点もあり、今後の詳しい調査が待たれる。（山内智）

**コウチュウ目 ホタル科****C****和名** ゲンジボタル**環境省：該当なし****学名** *Luciola cruciata cruciata* Motschulsky

本種は、国内では本州・四国・九州などに分布し、国内の自然分布では青森県が分布の北限である。青森県内では弘前市、大鰐町、平川町、黒石市、西目屋村、青森市（阿部, 1980）、八戸市（福田, 1984, 1988）、むつ市新助川（下山ら, 1986）、青森市八甲田山鏡沼、十和田市蔦（中根, 1987）、東通村大沼（福田ら, 1997）、むつ市脇野沢（山内・三上, 1998）、中泊町下高根（山内, 2000）などから記録されている。十和田市などでは前胸の無紋型が確認されている（中根, 1987）。生息河川の水質汚染、護岸等で生息環境が悪化している。また本種には発光周期から東日本型と西日本型が知られ（大場, 2004）、遺伝的にも地域固有性が高いことが確かめられている（Suzuki *et al.*, 2002）。近年、他地域個体群の放飼が行われ、在来個体群との雑交により、遺伝子浸透や攪乱などから遺伝的固有種の絶滅が危惧されており、他地域からの放飼は慎むべきである（山内, 2007）。（山内智）

**コウチュウ目 テントウムシ科****C****和名** ルイヨウマダラテントウ**環境省：該当なし****学名** *Henosepilachna yasutomii* Katakura

本種は、国内では北海道・本州中部以北などに分布するが、その分布は局地的で、県内での産地は食草であるルイヨウボタン群落とともに点在している（安富, 1973；富岡, 1983, 1986；山内, 1994, 1996）。本種は、十和田市蔦のルイヨウボタンを摂食していた個体によって新種記載（Katakura, 1981, 福田, 1970）された。本種は食性の地域分化が著しく、ルイヨウボタン・トチバニンジン・ジャガイモなどの食草によって、生育完了・羽化率・幼虫期間など地域によって違いが報告され、また本種が属するオオニジュウヤホシテントウ群のジャガイモへの害虫化について多くの研究が行われている（安富, 1974, 1976, 1977；片倉, 1988；山内, 1994）。

西津軽郡で確認された個体群では林内での食草の摂食衰退から、越冬個体がルイヨウボタンからトチバニンジンに移動し世代交代し、新成虫の一部が林内に食草がなくなると隣接するジャガイモ畑に移動した。翌年この越冬個体が林内のルイヨウボタンで再確認された。害虫化の一例が確認された（山内, 1994）。なお本個体群は青森県に分布しないヤマブキソウも好食するがタイプ産地の蔦個体群は食べない。なお、本個体群は環境の変化により現在は生息が衰退している。

本種の害虫化の研究上、タイプ産地である蔦個体群との食性の比較は研究上不可欠である。蔦個体群の生息地は十和田八幡平国立公園に指定され食草は保護されているが、昆虫採集は禁止されていない。環境変化がないのにタイプ産地での個体数が異常に減少し、まったく生息が確認できない年もあった。減少原因は明確でないが採集圧も原因の一因と思われる。タイプ産地の個体数は以前よりもかなり少なく回復はしていないが毎年見られる。本種は、主食草であるルイヨウボタン群落があっても生息しない群落もあり、森林開発などの環境変化で、短期間に衰退する。県内全域での生息環境の保全が強く望まれる。（山内智）

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** ホクチチビハナカミキリ**環境省：該当なし****学名** *Alosterna tabacicolor fusca* Matsushita

国内では北海道・本州・利尻島・佐渡などに分布しており、成虫は夏期にオオハナウド・ヤグルマソウ・ショウマ類など草本類の花から採集される。

北海道では普通であるが本州では個体数は少ない。青森県内での記録は深浦町（阿部, 1974）と中泊町小泊袋内、深浦町追良瀬川上流（下山ら, 1982）の記録がある。県内での詳しい分布や幼虫の寄主植物などの調査が望まれる。  
**（今純一）**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** ヒゲブトハナカミキリ**環境省：該当なし****学名** *Pachypidonia bodemeyeri* (Pic)

本種は原生林の大木の樹洞内に生息するが個体数は少ない。樹洞を持つ大木の混在するような環境は限定され、ますます減少しつつあるように思われることから、生存が危惧される種類である。本種は、北海道・本州・四国・九州に分布するが、いずれの産地でも非常にまれである。幼虫はブナの樹洞内から発見され、成虫はノリウツギの花に来る。

青森県内での記録は1954.8の1個体（下山, 1964a）、1978.7の1雄（毛塚, 1982）、1987.8の1雄（三上隆司, 私信）で十和田湖周辺と弘前市相馬で採集されている。また、近年十和田市谷地（上原, 2011）でも記録されている。大径木を有する自然林の存続が望まれる。  
**（今純一）**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** ヤマトキモンハナカミキリ**環境省：該当なし****学名** *Judolia japonica* (Tamanuki)

本種は個体によって斑紋（上翅黄紋）の変化の大きい種であり、北海道・本州・九州に分布しているが個体数は少ない。

青森県内では弘前市（鈴樹, 1986）、中泊町小泊（大西, 1992）、弘前市岩木（工藤周二, 私信）などの記録があり、クリの花上から採集されている。他県ではノリウツギやリョウブなどに訪花した成虫も得られている。保護対策のためには、訪花する樹木の混在する雑木林等の保全に配慮する必要がある。  
**（今純一）**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** イガブチヒゲハナカミキリ**環境省：該当なし****学名** *Stictoleptura igai* (Tamanuki)

国内では本州・四国・九州に分布しているが、その生息地は局地的で個体数も少ない。

青森県内では、弘前市相馬村で1981年～1998年にかけて数十頭の個体が記録されているが（三上・佐藤, 1981；三上隆司, 私信）、地理的にみて非常に特殊な分布のように思われる。他に1985年に大鰐町（工藤周二, 私信）、弘前市（鈴樹, 1988）で数個体記録されている。幼虫の食樹としてトウヒ、サワラが知られているが、本県ではヒバで確認された（三上, 1989）。

生息地は限られているが、上記地域以外のヒバ林での詳しい調査が望まれる。

**（今純一）**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** オオハナカミキリ**環境省：該当なし****学名** *Konoa granulate* (Bates)

国内では北海道・本州に分布するが、東北地方では非常にまれである。

青森県内では十和田でヤマアジサイの花やブナの朽木から採集された（下山, 1964a）。他に、八甲田山系（尾崎, 1988；尾崎・鈴樹, 1989）、七戸町大坪川（上原, 2009, 2012）、十和田市谷地1998.8.19の1雄（工藤周二, 私信）の記録がある。

幼虫の食樹としてブナ、ダケカンバ、モミが知られている。本県ではノリウツギに訪花中のものも得られており、またブナの立ち枯れ木に飛来することが知られている。さらに、寄主植物の分布する山間地での詳しい調査が望まれる。  
**（今純一）**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** コウヤホソハナカミキリ**環境省：該当なし****学名** *Strangalia koyaensis* Matsushita

国内では本州・四国に分布するが、関東以北では非常にまれである。東北地方では青森県と秋田県で記録されているだけで、非常に特殊な分布をしている。

青森県内では弘前市相馬で数個体記録されており（三上・佐藤, 1981；三上, 1986）、ノリウツギの花から採集されている。また、幼虫の食樹としてスギやヒノキが知られているが、弘前市相馬ではヒバを食樹とすることが判明している（三上, 1989）。

県内の生息地は限定されているが、ヒバ林が分布する他地域での詳しい調査が望まれる。

**（今純一）****コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** オニホソコバネカミキリ**環境省：該当なし****学名** *Necydalis gigantea gigantea* Kano

国内では北海道・本州・四国・九州に分布するが、非常にまれである。他県ではクワ古木のコルク質部に幼虫が寄生するため、古木のある桑畑で採集される。しかし、桑畑は全国的に消滅しつつあり、今後さらに採集が困難になることが考えられる。

青森県内では、十和田市（三上, 1987）、五所川原市市浦（大西, 1992）、今別町（上原, 2012）で記録されているが、採集地での乱獲による生息環境の悪化から、生息の継続が危惧される。

保護対策から県内の上記以外の残されたクワ古木での調査が必要である。

**（今純一）****コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** ヒゲシロホソコバネカミキリ**環境省：該当なし****学名** *Necydalis odai* Hayashi

国内では北海道・本州・四国・九州に分布するが、非常に稀である。

青森県内では、平川市大木平、十和田でミズナラの立木の枯死部から採集された記録（下山, 1964a）がある。この他に1996～1997年に中泊町小泊でミズナラの立ち枯れから十数頭採集されており（三上隆司, 私信）、近年、青森市田代平（上原, 2017）からも記録された。

幼虫の食樹であるミズナラは県内各地に見られることから、新しい生息地が確認される可能性があり、さらに詳しい調査が必要である。また、ミズナラの生育する生息環境の保全が望まれる。

**（今純一）**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 ヨコヤマヒメカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Ceresium holophaeum* Bates

国内では本州・四国・九州・南西諸島などに分布する。南西諸島では普通種であるが本土域では少なく、東北地方では非常に稀である。

青森県内では鱒ヶ沢町（三上, 1988）や中泊町三角山（大西, 1993）の海岸近くで記録されており、オオバクロモジ、イタヤカエデ、ヤブツバキなどの枯枝から脱出したものが得られている。

今後の調査で新産地が確認される可能性があり、さらに詳しい調査が必要である。また、寄主植物の分布する里山の生息環境の保全が望まれる。  
(今純一)

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 ツシマアメイロカミキリ本土亜種

環境省：該当なし

学名 *Obrium obscuripenne takakuwai* Niisato

国内では北海道・本州・四国・九州に分布するが少ない。本亜種はサドチビアメイロカミキリとも呼ばれていた。

青森県内では平川市大木平と大鰐町長峰でゴトウヅルの花から採集された記録がある（下山, 1964b）。他県では幼虫がオニグルミ、ケヤキ、ヤチダモ、アオダモを食樹とすることが判明している。

本種の寄主植物は里山に広範囲に分布しているので、今後新しい生息地が確認される可能性があり、さらに詳しい調査が必要である。  
(今純一)

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 ホソツヤヒゲナガコバネカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Glaphyra nitida nitida* (Obika)

国内では本州・四国に分布するが、産地は局地的である。

青森県内では鱒ヶ沢町然ヶ岳のエゾエノキの材から脱出した個体が得られている（三上, 1989）。本種はカエデ類の花に飛来することが知られており（大林ら, 1992）、寄主植物であるエゾエノキは県内各地に見られることから、今後、新しい生息地が確認される可能性があり、さらに詳しい調査が必要である。  
(今純一)

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 オダヒゲナガコバネカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Glaphyra gracilis* (Hayashi)

国内では本州・四国・九州に分布する。

青森県内では十和田市猿倉温泉付近でミズキの花から得られており（尾崎, 1986）、1997年にアオモリトドマツの材から脱出した記録がある（三上隆司, 私信）。さらに、青森市酸ヶ湯（上原, 2008, 2012）、十和田市谷地、青森市萱野高原（上原, 2013）で採集されている。

幼虫の食樹であるアオモリトドマツが分布する、上記産地以外での詳しい調査が望まれる。

(今純一)

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 ムモンベニカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Amarysius sanguinipennis* (Blessig)

国内では本州・九州に分布するが少ない種である。

青森県内では階上町名久井岳（小倉, 1971）や弘前市相馬（三上・阿部, 1985）での記録があり、コナラやオオバクロモジの材から脱出したものが採集されている。本種の寄主植物は前記の他、ケヤキ、クリ、イタヤカエデなど多数確認されている（小島ら, 1986）。また、成虫がカシワの新葉を後食することが知られている（小島ら, 1986）。

これらの寄主植物は本県の里山や山間地に広く分布していることから、さらに詳しい調査が必要である。 **（今純一）**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 ハセガワトラカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Teratoclytus plavilstshikovi* Zaitzev

国内では北海道・本州に分布するが、その産地は局地的で、個体数も少ない種である。

青森県内では佐井村の記録があり（斉藤, 1989）、幼虫はヤマブドウやノブドウに寄生することが知られている。成虫も山林のヤマブドウの枯蔓の叩き網などで採集される。

本県での記録は少ないが、寄主植物であるヤマブドウは里山や山間地の林縁部に広く分布していることから、さらに詳しい調査が望まれる。遷移の進行や山地開発などにより、本種の生息地は減少しているものと思われ、山間地の生息環境の保全が望まれる。 **（今純一）**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 トウホクトラカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Chlorophorus tohokensis* Hayashi

国内では北海道・本州北部（東北地方）に分布するが、局地的で産地は少ない。

本種は、平川市温川の標本で新種記載された（Hayashi, 1968）。この他、青森県内では中泊町七ッ滝（下山ら, 1982）、弘前市藍内、むつ市湯ノ沢（尾崎, 1985）、十和田市字樽部、横浜町八郎烏帽子（西沢, 1987）でノリウツギの花上から少数の個体が採集されている。また、1990・1995・1996年に中泊町小泊のヤマブドウの枯れ蔓から、多数の個体が脱出した記録がある（三上隆司, 私信）。寄主植物であるヤマブドウは里山や山間地の林縁部に広く分布していることから、さらに詳しい調査が望まれる。 **（今純一）**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 ヒトオビチピカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Sybra unifasciata* Fujimura

国内では北海道・本州・四国・九州に分布するが、全国的に少ない。

青森県内では弘前市座頭石・久渡寺山（佐藤, 1984）、深浦町森山（福田ら, 1996）で採集されている。また、弘前市相馬のマルバマンサク（三上, 1990）、五所川原市のエゴノキ（三上隆司氏, 私信）の材から成虫が脱出した記録がある。個体数は非常に少ない。本種の寄主植物は前記の他、オニグルミ、サワグルミ、コナラなど多数確認されている（大林ら, 1992）。広葉樹林での叩き網などで採集されているが、本種の生息地は減少しているものと思われ、寄主植物が生育している里山や山間地の生息環境の保全が望まれる。 **（今純一）**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** ケマダラカミキリ本州亜種**環境省：絶滅危惧Ⅱ類****学名** *Agapanthia daurika sakaii* Hayashi

山地の草原に生息している種類であり、個体数は少ない。このような生息環境はもともと不安定で開発の影響も受けやすく、個体群を維持できるような地域は減少しているものと思われる。本亜種はミチノクケマダラカミキリとも呼ばれていた。

本亜種は本州北部に分布し、青森県内では五所川原市飯詰で1974.5.21に1雌採集されている（阿部・藤田, 1976）。成虫はヨモギやハンゴンソウなどの草本の葉や茎に見出され、幼虫はハンゴンソウの茎を食べる。

遷移の進行や山地開発により、本種の生息地は減少しているものと思われる。山間地の生息環境の保全が望まれる。  
**(今純一)**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** アカガネカミキリ本州亜種**環境省：該当なし****学名** *Plectrura metallica yoshihiro* Takakuwa

本亜種は本州山地（中部山岳地帯東部・東北地方）に分布するが、個体数は少ない。成虫は登山道沿いの枯れ枝・枯葉などから見つかることがある。本亜種はホンドアカガネカミキリとも呼ばれていた。

青森県内では八甲田山系（尾崎, 1993；上原, 2009, 2011, 2012, 2013）、むつ市川内（下山ら, 1986）、岩木山周辺（三上隆司, 私信）で採集されており、青森市酸ヶ湯のアオモリトドマツ（三上隆司, 私信）やコメツガ（三上, 1990）の材から成虫が脱出した記録がある。本種が生息する山間地の環境保全に配慮することが望まれる。  
**(今純一)**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C****和名** ヒメヒロウドカミキリ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Acalolepta degener degener* (Bates)

本種は、個体数の少ない種類で低地の草原に生息する。このような生息環境は植生遷移や開発の影響を受けやすい。

本種は国内では本州・九州・対馬に局地的に分布し、東北地方では深浦町と秋田県八峰町（八森岩館）、岩手県宮古市（新里）、宮城県白石市の記録がある。青森県内では、深浦町で1991.7.27に2個体（尾崎・一戸, 1992）、深浦町岩崎で1992.7.25～1992.8.29に数十個体（三上, 1993）、深浦町岩崎で1995.7.9に9個体（三上隆司, 私信）が海岸域で採集されている。成虫は草地のオトコヨモギやヨモギに集まり、幼虫はこの茎に穿入して加害する。護岸工事などにより、本種の生息地は減少しつつあり、海岸の自然草地の保全が望まれる。  
**(今純一)**

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 ヨコヤマヒゲナガカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Dolichoprosopus yokoyamai* (Gressitt)

国内では本州・四国・九州に分布し、青森県が北限である。幼虫はブナの生木に寄生することが知られている。成虫は夏期に寄主植物であるブナ生木で見られるが、灯火にも飛来する（日本鞘翅目学会, 1984）。

青森県内では深浦町白神岳（長尾, 1984）、深浦町櫛石山、青森市梵珠山沢内沢（村上, 1993）、中泊町今泉（上原, 2008）、青森市下湯（上原, 2012）などで採集されているが、個体数は少ない。中泊町小泊では海岸近くにあるブナの大木から、一度に数十頭の個体が採集された記録がある（大西, 1994）。本県ではブナ林が山間地に広く分布していることから、新産地が確認される可能性があり、今後の調査が望まれる。  
(今純一)

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 シロオビドイカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Mimectatina fuscoplagiata* (Breuning)

国内では、北海道・本州に分布する。本州では中部山岳地帯や青森県などで採集されているが、個体数は非常に少ない。

青森県内では、十和田市猿倉温泉付近で採取したアオモリトドマツの枯枝から脱出した2頭を記録している（三上, 1997）。本種の寄主植物に本県で普通に見られるオオカメノキ（日本鞘翅目学会, 1984）なども知られており、県内での詳しい分布や幼虫の寄主植物との関連の調査が望まれる。

山地開発などにより、本種の生息地は減少していると思われる。山間地の生息環境の保全に配慮することが望まれる。  
(今純一)

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 トホシカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Saperda alberti* Plavilstshikov

国内では北海道・本州に分布しているが、個体数は少ない。

成虫はヤナギ類の立ち枯れ木などに集まり、幼虫はドロノキやヤナギ類に寄生することが知られている。

青森県内では平川市滝ノ沢（下山, 1964c）で記録されている。県内での分布や生態については殆ど知られていないが、寄主植物であるドロノキは山間地の溪流沿いに多く分布していることから、山間地での詳しい調査が望まれる。  
(今純一)

**コウチュウ目 カミキリムシ科****C**

和名 ヤツボシカミキリ

環境省：該当なし

学名 *Saperda octomaculata* Bleesig

国内では北海道・本州に分布するが、個体数は少ない。本種はサクラやナナカマドなどの伐採木に集まり、アズキナシの葉を後食することが知られている。また、灯火にも飛来する。

青森県内では平川市大木平（下山, 1964c）、鱒ヶ沢町（鈴樹, 1991）で採集されており、また、青森市城ヶ倉のナナカマドの材から成虫が脱出した記録がある（三上, 1990）。

幼虫の寄主植物であるナナカマドは県内の山間地に広範囲に分布することから、山間地の詳しい調査が望まれる。  
(今純一)

**コウチュウ目 ハムシ科****C**

和名 オオヨモギハムシ

環境省：該当なし

学名 *Chrysolina angusticollis* (Motschulsky)

本種の国内での分布は、北海道と本州北部の青森県・岩手県などである（木元・滝沢, 1994）。本種の後翅は退化して飛べなく、食草としてキク科植物が確認されている。生息地での個体数は少なく、分布は局地的である。

青森県内では、深浦町十二湖（五所川原農林高等学校自然科学部, 1966）、中泊町小泊（同, 1970）、岩木山、深浦町追良瀬川、鱒ヶ沢町真瀬岳（阿部, 1980）、中泊町冬部沢・褌内、外ヶ浜町算用師、金木町（下山ら, 1982）、東通村桑畑山（福田ら, 2001）などから記録されている。遺伝的な調査も行われており、生息地の環境保全と、今後の県内での記録蓄積が望まれる。（山内智）

**コウチュウ目 ハムシ科****C**

和名 キアシネクイハムシ

環境省：該当なし

学名 *Donacia bicoloricornis* Chen

本種の、国内での分布は関東以北の本州で、産地は局地的である（木元・滝沢, 1994；林, 2012）。青森県内では、三沢市仏沼、野辺地町巫子沼（野尻湖昆虫グループ, 1985）、深浦町追良瀬川（木元, 1989）、深浦町中山峠、鱒ヶ沢町中村川（富岡, 2000）などから記録されている。湿地帯のガマ類、ミクリ類を食べ、灯火にも飛来する（小宮ら, 1986；富永, 1986；林, 2012）。

本種の生育に適した水草の繁茂した池沼が、開発や外来魚移入等のため水質環境が悪化し、水草が減少している。生息に適した池沼が少なくなっており、生息が危惧されている。（山内智）

**コウチュウ目 ハムシ科****C**

和名 オオルリハムシ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Chrysolina virgate* (Motschulsky)

本種の国内での分布は九州・本州などの湿地帯で生息地は局地的である。全国的に湿地の環境の悪化と採集圧により、絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。本種については岩井ら（2003）が詳しくまとめている。それによると青森県内では文献記録も含め、つがる市平滝沼・牛滝沼、五所川原市十三、東通村下田代・野牛沼、野辺地町巫女沼、六ヶ所村市柳沼・鷹架沼・二又、三沢市仏沼、八戸市市川・桔梗野の地域を上げている。この他に六ヶ所村内沼（阿部ら, 2004）などから記録されており、概ね津軽半島の屏風山地区の湿地帯、下北半島から八戸にかけての湖沼地帯に見られる。

本種は、シロネ・ヒメシロネの食草が確認されているが（岩井ら, 2003）、このような植物が繁茂する湿地は減少してきており、湿地の保護対策が望まれる。（山内智）

**コウチュウ目 ハムシ科****C**

和名 キイロカメノコハムシ

環境省：該当なし

学名 *Cassida concha* Solsky

本種の国内での分布は、北海道・本州で、珍しい種類で、分布は局地的で希少種である（木元・滝沢, 1994；安富ら, 1997, 1999）。

青森県内では、八戸市白浜・種差～大久喜、階上町小舟渡・階上岳、黒石市黒森山（安富ら, 1997）、八戸市是川・新井田、東通村尻屋崎（安富ら, 1999）などから記録されている。本種の食草はフシグロセンノウ、カワラナデシコなどのナデシコ科である。

本種は、全国的に生息地が限られているが、園芸種のナデシコからも発見（安富ら, 1999）されていることから、今後の分布や生態などについて継続した調査が望まれる。（山内智）

**コウチュウ目 ハムシ科****C**

和名 ベニカメノコハムシ

環境省：該当なし

学名 *Cassida murraea* Linnaeus

本種は、国内では本州に分布する。生息地は局地的で希少種である（日本野生生物研究センター, 1980）。国内では、1933年十和田市猿倉温泉（渡邊, 1935）で初めて記録された（Kimoto, 1966）。近年は個体数が減少している。青森県内では、上記以外に八戸市（福田, 1956, 1969b）、十和田（Kimoto, 1966）、十和田市睡蓮沼（安富, 1991）などから記録されている。青森県内では八甲田山地での記録が多く、湿地帯のミズギクを食草（安富, 1991）としている。

本種の生息地の一つである八甲田山地は、十和田八幡平国立公園内で採集は禁止されているが、湿地への入山者立ち入りや採集者の乱獲によって絶滅が危惧される。（山内智）

**コウチュウ目 ハムシ科****C**

和名 スジキイロカメノコハムシ

環境省：該当なし

学名 *Cassida nobilis* Linnaeus

本種は、国内では青森県・山形県・群馬県・栃木県などに分布し、生息地は局地的で、国内では採集例、個体数とも大変少ない希少種である（木元・滝沢, 1994）。

青森県内からは、八戸市（福田, 1940）、八戸市大久保（安富・富岡, 1988）、八戸市湊高台、黒石市境松（富岡, 2000）などから記録されている。国内ではアカザが食草として確認されている（安富・富岡, 1988）。

八戸市で確認された生息地は、宅地化されており（安富・富岡, 1988）、生息地付近の食草が刈り取られることが生存の脅威となっている。今後の分布や生態についての継続した調査が望まれる。

（山内智）

**ハチ目 オナガコバチ科****C**

和名 オナガアシフトコバチ

環境省：該当なし

学名 *Podagrion nipponicum* Habu

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布している。本種はカマキリ類の卵の寄生者として知られているが、寄主であるカマキリ類の生息できる環境が減少している。本種は青森県内からは八戸市（Habu, 1962）、つがる市平滝沼（田中, 1984）などから記録されている。石村・佐藤（1941）がカマキリコバチとして黒石町（現；黒石市）、山形村（現；黒石市山形）、八戸市を上げているが、本種のことであると考えられる（山田, 2010, p.267）。

山田（2010, p.267）によると、本種はオオカマキリの卵のう内で越冬し、6月頃になって寄主がふ化する前に羽化し、その後カマキリの産卵が行われる9月までの所在が不明で、これが低寄生率や個体数減少と関係ある可能性もあると述べている。

青森県レッドデータブックでBランクに指定されているウスバカマキリも本種の寄主（岩崎, 2000）であり、本種と寄主のカマキリ類の両種の調査及び保全対策が必要である。（山内智）

**ハチ目 アリ科****C****和名 エゾアカヤマアリ****環境省：絶滅危惧Ⅱ種****学名** *Formica yessensis* Wheeler

国内では北海道・本州などに分布している。本種は開けた場所に針葉樹の落ち葉や枯れ草で大きな塚（営巣）をつくる。涼しい環境を好むが、生息適地の環境の悪化で全国的に営巣が少なくなってきた（寺山ら, 2014；環境省, 2015）。

本種は青森県（石村・佐藤, 1914；Japanese Ant Database Group, 2003）にも分布し、青森市萱野茶屋（加藤, 1939；青森市, 1994）、八甲田（Kato, 1939；Yasuno, 1963；福島, 1968）、弘前市久渡寺山（前川, 1978；山田, 2004）、弘前市百沢・岳・座頭石（前川, 1978）、青森市横内八重菊・雲谷（青森市, 1994）、深浦町見入山・白神山地（山田, 2009）などの主に八甲田山系・岩木山麓・白神山地から記録されているが、最近の記録はあまり見られない。近年の温暖化などの影響が生息に影響していることが示唆されているが（環境省, 2015）、継続した本種の記録の蓄積と、環境保全活動が必要である。  
**（山内智）**

**ハチ目 スズメバチ科****C****和名 モンスズメバチ****環境省：情報不足****学名** *Vespa crabro* Linnaeus

国内では、北海道・本州・四国・九州などに分布する。本種は樹洞や住居の壁の隙間・軒下・天井裏・戸袋などに営巣するが、全国的に減少傾向にある（環境省, 2015）。主にセミを捕獲するが少ない時期はトンボも餌となる。攻撃性は強い（松浦, 1995）。

青森県内では、八甲田山（石村・佐藤, 1941）、八戸、大鰐町、弘前市・岳、大鰐町戸和田山（福田・山田, 1955）、十和田市蔦（青森県, 1993；山田, 1997）、十和田市猿倉（青森県, 1993）、青森市梵珠山（山内, 1996）、青森市田代平、弘前市文京町・新寺町・岳・大石・桜林（山田, 1996）、弘前市弘前公園・藤代・百沢・高岡、西目屋村大川、黒石市三島・大川原・厚目内・福民、平川市大落前、つがる市平滝沼（山田, 1997）、西目屋村暗門川（山田, 2008）、つがる市出来島（山田, 2013）などから記録されている。経年調査は行われておらず、近年の採集記録はあまり見られない。自然環境や住居環境の変貌から営巣に適した環境が衰退している。獲物であるセミも含め、今後の継続した調査が必要である。  
**（山内智）**

**ハチ目 ギングチバチ科****C****和名 ニッポンハナダカバチ****環境省：絶滅危惧Ⅱ種****学名** *Bembix niponica* Smith

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布している。本種の営巣は海岸、河川敷、湖岸の砂地であるが、開発等で適した生息環境の砂地が失われてきていることから、全国的に生息地・個体数とも減ってきている（環境省, 2015）。青森県内では東通村左京沼（弘前高等学校生物クラブ, 1953）、岩木川（弘前高等学校生物クラブ, 1957）、つがる市平滝沼（下山, 1967；山田, 1999）、東通村猿ヶ森（山田, 1996）、五所川原市十三湖、深浦町大間越、三沢市天ヶ森（山田, 1999）、中泊町小泊（山田, 2008）などの砂丘地から記録されている。山田（2010, p.267）によると、従前は内陸の岩木川など大きな川の河川敷にも普通に生息していたが、河川敷の生態系が激変し壊滅状態となった。

本種は幼虫の餌として大型のアブ類を狩るが、つがる市平滝沼では砂地に営巣しアブを抱えて巣に入った本種が観察されている（下山, 1967）。砂があまり移動せず、草も伸びないような適地には集団営巣地が形成されるが（山田, 2010, p.267）、そのような場所は開発等で少なくなった。  
**（山内智）**

**ハチ目 ギングチバチ科****C****和名 シモヤマギングチ****環境省：準絶滅危惧****学名** *Ectemnius shimoyamai* (Tsuneki)

本種は、国内では青森県・栃木県・福井県・福島県などに分布（菊池, 2014）するが、採集記録の極めて稀な狩り蜂である。生息地は限定されている（環境省, 2015）。本種は十和田をタイプ産地に新種記載されたギングチバチの仲間である（Tsuneki, 1958）。青森県内からは十和田山地（常木・下山, 1963；下山, 1980, 1987；Tsuneki, 1983）、平川市御鼻部山（阿部, 1980）、八甲田山地（山田, 1998, 1999）などから記録されている。

最初に十和田で採集された経緯については下山（1987）に詳しく、枯木のある林で採集している。枯木が残されている原生林が主な生息地となっているが（山田, 2010, p.267）、詳しい生態についてはまだ十分に解明されていない。

**(山内智)****ハチ目 ギングチバチ科****C****和名 ササキリギングチ****環境省：準絶滅危惧****学名** *Ectemnius furuichii* (Iwata)

本種は、国内では北海道・本州などに分布している。全国的に少ない種類で、生息地は枯死樹が放置されるような原生林及びそれに近い広葉樹林に限定されている。青森県内からは十和田（下山, 1960, 1978）、十和田山地（常木・下山, 1963）、むつ市円山（下山ら, 1986）、鯉ヶ沢町乱岩ノ森・櫛石山（下山ら, 1991）、黒石市沖揚平、平川市滝ノ沢、西目屋村大川、深浦町笹内川・入良川、十和田市蔦、新郷村戸来岳（山田, 1999）などの良好な自然環境が残された十和田山地、八甲田山地・白神山地・恐山山地などから記録されている。

本種の生態について下山（1960）が十和田山地で詳しく観察している。それによると成虫は7月中旬から活動をはじめ、ブナ・カエデなどの立枯木で見られ、穿孔して複合分岐巣をつくりササキリを狩って1分岐巣あたり2～3匹を詰め込み幼虫の餌とする。

本種の生存にはササキリの生息も必須の条件であり、営巣素材と合わせ両者が共存するような森林の維持が重要である。

**(山内智)****ハチ目 ギングチバチ科****C****和名 ニトベギングチ****環境省：情報不足****学名** *Ectemnius nitobei* (Matsumura)

本種は、国内では本州などに分布している。全国的に希少な種であり、生息条件が自然度の高い森林に限定され、環境変化の影響を受けやすい狩り蜂である。本種は青森をタイプ産地に記載されたギングチバチの仲間である（松村, 1912）。本種は県内では青森県（田埜・常木, 1969；Tsuneki, 1990）、弘西林道（阿部, 1979；下山, 1987）、七戸町小坪川（下山, 1987）、鯉ヶ沢町乱岩ノ森（下山, 1987；下山ら, 1991；山田, 1999）、西目屋村大川（山内・阿部, 1989；下山ら, 1991）、西目屋村暗門川（山内・阿部, 1989）、深浦町追良瀬川（山内, 1990；山田, 1999）、鯉ヶ沢町櫛石山・赤石川（下山ら, 1991；山田, 1999）、弘前市相馬西又沢、西目屋村川原平、青森市横内、十和田市蔦、田子町黒森山（山田, 1999）、中泊町小泊（山田, 2008）などから記録されている。

本種の営巣について下山（1987）が白神山地で詳しく観察している。それによると成虫は7～9月に現れブナ、トチなどの枯木に穿孔して分岐した巣を作り、大型のヤガ科シタバガ亜科のゴマシオキシタバやオニベニシタバなどのガ類の成虫を狩って、その分岐した幼室に幼虫の餌として入れる。

山田（2010, p.268）によると、本種の生息地は広葉樹林が発達した山地で、適度に腐朽した太めの立ち枯れ樹が経年的に存在するところである。近年森林開発などで適地が少なくなっている。

**(山内智)**

**ハチ目 ミツバチ科****C****和名** エチゼンヒメハナバチ**環境省：該当なし****学名** *Andrena echizenia* Hirashima

本種は、国内では北海道・本州などに分布している。本種の営巣は河川敷の砂地に集団で作られる（羽田, 1989）。青森県内からは弘前市安東橋（山田, 1998）の岩木川河川敷で記録された。

山田（2010, p.268）によると生息地は河川改修のあまり行われていない極めて限定された地域で、成虫は4月下旬に出現して、ヤナギの花から花粉を集める。河川敷は河川改修などで、環境が改変されることが多く、不安定な場所であることから、生息適地は減少し、営巣の確認も少なくなっている。（山内智）

**ハチ目 ミツバチ科****C****和名** シロアシクサレダマバチ**環境省：該当なし****学名** *Macropis tibialis* Yasumatsu et Hirashima

本種は、国内では北海道・本州などに分布している。青森県内からは弘前市百沢・湯段、平内町夏泊、鱒ヶ沢町菱喰山（山田, 1992）、西目屋村川原平（山田, 2008）、五所川原市十三湯（山田, 2012）などから記録されているが、各地とも生息は局地的で、個体数も少ない。

山田（2010, p.268）によると、成虫は7月下旬から8月にかけて活動し、クサレダマ、オカトラノオなどを訪れる。中でもクサレダマが花粉採集源として特に利用されている。営巣は穿孔して粘土質裸地に見られるが、粘土地のクサレダマ生育地は極めて限定された地域にしかなく、開発等で少なくなっている。（山内智）

**ハエ目 カ科****C****和名** トワダオオカ**環境省：該当なし****学名** *Toxorhynchites towadensis* (Matsumura)

国内では北海道・本州・四国・九州などに分布している。産地が局地的で希少種である。また、自然度の高い樹林に生息することから、自然環境の指標昆虫の一つでもある（大野, 1989）。本種は十和田をタイプ産地に新種記載された蚊の仲間である（松村, 1916）。青森県内では、十和田（松村, 1916）、青森市梵珠山（石村, 1952）、黒石市浅瀬石川流域（内田, 1962）、十和田市焼山・休屋・御鼻部山・猿倉、平川市沖揚平（阿部, 1980）、むつ市川内（下山ら, 1986）、青森市酸ヶ湯、十和田市猿倉・蔦（大野, 1989）、西目屋村大川・湯ノ沢、鱒ヶ沢町櫛石山・赤石川（阿部・山内, 1989）、大鰐町虹貝沢、深浦町津梅川、中泊町冬部越林道（市田, 2002）、八戸市是川（市川, 2008）などからの記録がある。

本種は、吸血性ではなく、幼虫はブナ等の樹洞の中の水たまりに生息し他の蚊の幼虫を捕食する（石村, 1952）。生息地が開発等で良好な適地が少なくなっている。今後の継続した調査が必要である。（山内智）

**チョウ目 マダラガ科****C****和名 ヤホシホソマダラ****環境省：準絶滅危惧****学名** *Balataea octomaculata* (Bremer)

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布する。河川敷や湿地などの明るい草地に局地的に見られ、採集例の少ない種類である（環境省, 2015）。青森県内では八戸市（石村・佐藤, 1941）、東北町上北（山内, 2018）、むつ市冷水峠（福田ら, 2001）などの記録が知られている。

本種の寄主はヌマガヤ、ササ類などのイネ科植物で、日中に草地で飛翔しているのが採集される。

草地の開墾や造成などの開発によって生息適地が少なくなっている。ヌマガヤなどの生育する湿地の環境保全が望まれる。(山内智)

**チョウ目 スカシバガ科****C****和名 ミチノクスカシバ****環境省：該当なし****学名** *Nokona michinoku* Kishida, Kudo et Kudo

岩木山を模式産地として2014年に新種記載されたハチ擬態の昼行性蛾類。現在の知見では日本の固有種で、新種記載時までに判明した生息地は、本県の5市町村（青森市浅虫・弘前市百沢・西目屋村川原平・つがる市屏風山・深浦町松神）と岩手県の1市（宮古市川井）のみ（Kishida *et al.*, 2014）。その後の調査で北海道が加わった（堀・櫻井, 2015）。

マント群落を形成するブドウ科 *Vitis* 属の蔓植物に産卵。幼虫は蔓内部へ穿孔し樹液由来物質を摂食。老熟幼虫で越冬し初夏羽化に至る。同群落は、景観整備でしばしば撤去対象となるが、そこに依存する動植物は少なくない。構成植物の中に、貴重生物と関わるものがないかを精査したうえで整備が求められる。(工藤忠)

**チョウ目 ツトガ科****C****和名 ソトシロスジミズメイガ****環境省：該当なし****学名** *Nymphula distinctalis* (Ragonot)

本種は、国内での分布は北海道や本州で北海道函館（Yosiyasu, 1985）、東通村大利（佐々木・葛西, 1994）、秋田県（田中, 2016）などが知られている。記録の少ない希少な種類である。

本種の日本における詳しい生態は不明であるが、ヨーロッパでは幼虫がコウホネ属・ミクリ属・ヒルムシロ属・スイレン属などを食草（井上ら, 1982）としていることから、東通村大利では食草となる水生植物の繁茂した湖沼に生息すると推定される。この湖沼は主に農業用水等に活用されているが、湖沼の環境が維持されることが望まれる。(山内智)

**チョウ目 ツトガ科****C****和名 ムナカタミズメイガ****環境省：準絶滅危惧****学名** *Parapoynx ussuriensis* (Rebel)

本種は、国内では北海道・本州（新潟県以北）などに分布し、青森県内では、八戸市（石村・佐藤, 1941）、1935年八戸市糠塚（山内, 2018）、2002年つがる市大滝沼（亀田・山内, 2003）と八戸市とつがる市などから記録されている。八戸市の記録は古く現地の環境が大きく変わっており、その後の追加記録は無い。

本種の食草はイネ・タヌキモ等（吉安, 2013）が知られているが、タヌキモは全国的に絶滅に瀕しており、青森県レッドデータブックでもBランクに指定されている（青森県, 2010）。食草の減少に伴って本種も生息地・個体数ともに減少してきており、最近では屏風山地区以外記録されていない。タヌキモなどの生育する湿地の環境保全が望まれる。(山内智)

**チョウ目 セセリチョウ科****C****和名** アオバセセリ**環境省**：該当なし**学名** *Choaspes benjaminii* (Guérin-Ménéville)

本州から東南アジアの赤道地帯にまで広く分布する熱帯系のセセリチョウ。本県は世界最北の生息地に当たり、熱帯系の本種が、本県の自然環境で安定的に発生していることは注目に値する。

青森県内では暖地性植物であるアワブキでのみ発生し、日本海側では深浦地方、太平洋側では名久井岳をはじめとした県南地方のアワブキ自生地でのみ生息する。

成虫は年2回の発生。夕刻に山の頂上で活発な占有飛翔を行う習性がある。強い飛翔力で拡散しアワブキが自生しない地域の山頂で飛来個体が発見されることがある。しかし、発生源であるアワブキの自生地は局所的で、食餌植物など発生源を含めた保全対策が求められる。**(工藤忠)**

**チョウ目 セセリチョウ科****C****和名** スジグロチャバネセセリ**環境省**：準絶滅危惧**学名** *Thymelicus leoninus* (Butler)

北海道南西部から九州まで広く生息するが、青森県における分布は限定的。成虫は年1回、夏に出現し、オカトラノオやヒメジョオン、アザミ類といった各種の花を訪れる。

開放的な草原よりも、山間の疎林や林間の草地を好み、幼虫は林縁的な環境に自生するイネ科植物から見出される。

1980年代までは、局所的ながらいくつかの多産地が知られていたが、1990年頃から減少傾向が認められ、21世紀の青森県では稀な存在になってしまった。**(工藤忠)**

**チョウ目 セセリチョウ科****C****和名** オオチャバネセセリ**環境省**：該当なし**学名** *Polytremis pellucida* (Murray)

北海道から九州まで広く分布し、田畑周辺の明るい草原や雑木林の林縁に生息する。かつての青森県内では、夏から秋にかけて咲くキク類の花に、おびただしい数の本種成虫が吸蜜を訪れた。1990年代に入った頃から減少傾向が認められ、2000年代以降は稀な存在になってしまった。

幼虫は、雑木林の林床に密生するササ類を食べて成長する。幼虫にとって重要な食餌植物は、今日も豊富に存在しており、減少の理由は不明。衰亡の理由を強引に捻出することは避けたい。

**(工藤忠)****チョウ目 セセリチョウ科****C****和名** ミヤマチャバネセセリ**環境省**：該当なし**学名** *Pelopidas jansonis* (Butler)

本州・四国・九州に広く分布し、本県がその北限。県内では平地から山地の草原に広く記録があるが、一般的に個体数は少なく散発的である。その中でも屏風山一帯(つがる市)に多産地があった。5月と8月を中心とした年2回の発生。幼虫の食餌植物はススキ類で、蛹で越冬する。

生息環境はススキ類を含む草原で近年、個体数の減少が顕著である。上記の多産した屏風山では1990年代以降、生息地そのものが耕地化などで失われた。一般に草原性チョウ類の衰退が目立っているが、それは幼虫の食餌植物だけの増減だけに起因するものではない。これらに共通した生息上の欠落要素は何かを調査し、保全策を考える必要がある。**(室谷洋司)**

**チョウ目 シロチョウ科****C****和名** ヒメシロチョウ**環境省：絶滅危惧 I B類****学名** *Leptidea amurensis* (Ménétrières)

国内では北海道・本州・九州に分布。日本列島全域で減少傾向が著しく、西日本ではすでに絶滅した地域個体群も報告されるようになった（矢後ら編, 2016；工藤, 2018）。

成虫は年3回、春・夏・秋に出現し、蛹で越冬。明るく草丈の低い草原環境を好み、幼虫はこうした環境に自生するツルフジバカマ（マメ科）のみを食べて成長する。

青森県はかつて、国内有数のヒメシロチョウ多産地域であったが、日本海側では2000年ころから急激に減少し、2010年代には危機的な状況に陥った。太平洋側における生息状況は日本海側に比べて良好であったものの、2011年の東日本大震災以降、生息草原の多くがソーラー施設に置き換わり、今後の衰亡が懸念される。  
(工藤忠)

**チョウ目 シジミチョウ科****C****和名** ウラミアカシジミ**環境省：該当なし****学名** *Japonica saepestriata* (Hewitson)

国内では北海道・本州・四国に分布。本種はクヌギ（岩手県以南に自生するブナ科植物）に強く依存した樹上性のシジミチョウとして知られ、クヌギが自然分布しない青森県以北の個体群はコナラ（ブナ科）の若齢林に食性転換している点が注目される。

成虫は年1回、夏前半に出現し、里山的な明るい若齢林上空を夕刻に飛翔する。1970年代までは、県内各地のコナラを主体とした里山環境で普通に見られ、弘前城の外堀斜面にも多産した。こうした若齢林は、畑地転用で伐採され、あるいは管理されないまま老齢林となり、2000年以降の本種は危機的な存在となった。  
(工藤忠)

**チョウ目 シジミチョウ科****C****和名** ウラジロミドリシジミ**環境省：該当なし****学名** *Favonius saphirinus* (Staudinger)

北海道から九州まで分布し、県内でも広くみられる。幼虫の食餌植物は、ブナ科のカシワのみに依存しカシワ林のチョウとして知られる。年1回の発生で成虫期は7～8月。卵で越冬する。

食樹のカシワは主として海岸部に多く防風林の役割をにない、内陸部では乾燥した丘陵地に限られる。また、地形的に開発の対象となりやすく、耕地転用や空港など人工構築物の用地に変容してきた。これは1990年代から顕著になり発生地が急減。さらにかつての薪炭林としての活用がなくなったことから樹林が老齢化し環境が悪化した。以前は個体数が多かったが（室谷, 1962）、近年は減少傾向が著しい（室谷, 未発表）。残された発生地でのカシワ林の保全策が課題である。

**(室谷洋司)****チョウ目 シジミチョウ科****C****和名** ハヤシミドリシジミ**環境省：該当なし****学名** *Favonius ultramarinus* (Fixsen)

北海道・本州・九州に分布し、県内でも広くみられる。幼虫の食餌植物がブナ科のカシワに依存しカシワ林のチョウとして知られる。年1回の発生で成虫期は7～8月。卵で越冬する。

カシワの分布は主として海岸部や内陸部の乾燥した丘陵地に限られる。本種の多産地だった屏風山（つがる市）一帯は広く畑作地帯に変えられ、青森市の西部低山地は空港・ゴルフ場に転用された。所々に小規模な樹林が残されているが、薪炭林として更新されず老木化が進行、本種の発生に不適となった。西部低山地は、以前は個体数が多かったが（室谷, 1962）、近年は減少傾向が著しい（室谷, 未発表）。残された発生地でのカシワ林の保全策が課題である。  
(室谷洋司)

**チョウ目 シジミチョウ科****C****和名** ミヤマカラスシジミ**環境省：該当なし****学名** *Fixsenia mera* (Janson)

本州から九州まで広く分布するが、北海道では渡島半島に限定される。県内では各所に広く分布し、成虫は年1回7～8月に発生。生息地は明るい雑木林から林縁・湿原で、幼虫の食餌植物クロウメモドキの自生に制約される。普遍的な種ではないが、個体数は少ないものではなかった（室谷・阿部, 1962）。

同じ植物に依存するスジボソヤマキチョウと同じように1990年代後半から減少が顕著で、この植物を含む生息環境の悪化が主因である。クロウメモドキの実生は各所に多く見られるが、草刈などの管理がなされないことや、林床の暗化から極端に生長が阻害され減少している。このような観点から食餌植物の増殖など生息環境の創出が必要である。（室谷洋司）

**チョウ目 シジミチョウ科****C****和名** ゴマシジミ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Maculinea teleius* (Bergsträsser)

幼虫時代の前期約1か月間はナガボノシロワレモコウ（バラ科）の花を食べ、中期以降の約9か月間はアリの巣の中でアリの幼虫を捕食するという特殊な生活史をおくるシジミチョウ。難解きわまりない生活史は、青森県人・石村清の手によって1952年に解明された。

国内では北海道・本州・九州に分布。全国的に減少が著しく、関東・中部地方における一部の個体群は環境省「種の保存法」、岩手県の個体群は「岩手県希少野生動植物の保護に関する条例」によって、捕獲や譲渡が禁止されている。

青森県は全国屈指のゴマシジミ多産地域として知られていたが、風力やソーラーといった新エネルギー施設の乱立によって生息草原そのものが失われつつある（工藤, 2016）。（工藤忠）

**チョウ目 シジミチョウ科****C****和名** ヒメシジミ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Plebejus argus* (Linnaeus)

国内では北海道・本州・九州に分布。北海道や中部山地以外の地域では生息地が限られ、減少傾向にある。九州ではすでに絶滅状態だという（矢後ら, 2016；工藤, 2018）。

成虫は年1回、平野部で6月後半、山間部では7月前半に出現。草丈の低い草原環境を好み、シロツメクサやミヤコグサなどの花を訪れる。幼虫の食餌植物として、ヨモギ、ナワシロイチゴ、マルバハギが確認されており、野焼きや河川氾濫の跡地に侵入したヨモギの若年株への嗜好性が高い（工藤, 1987）。青森県内での分布は限定的で、草原管理の放棄による減少が認められる。（工藤忠）

**チョウ目 タテハチョウ科****C****和名** テングチョウ**環境省：該当なし****学名** *Libythea celtis celtoides* Fruhstorfer

国内全域に分布するが、北海道ではまれな種。隣接の岩手県では生息地が広く個体数も多い。県内では普遍的ではないが八戸市・名川町・田子町・新郷村・階上町の県南地方に広く記録され（阿部, 1969）、津軽地方では青森市・平川市・黒石市・中泊町（旧小泊村）・深浦町に散発的な記録がある。発生は年1回で6月下旬に出現するが間もなく姿をかくし、そのまま越冬に入る。成虫は翌春4月上旬に再び姿を現す。

幼虫期の食餌植物はエゾエノキである。

1970年代までは県南地方各所で個体数も多く記録されていたが、近年は減少した。エゾエノキは里山の雑木林に多いが、伐採や老木化による枯死が進み環境の悪化が懸念される。（室谷洋司）

**チョウ目 タテハチョウ科****C****和名** ヒョウモンチョウ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Brenthis daphne* (Denis et Schiffermuller)

本種は北海道・東北北部・中部山岳に分布するが、最近の研究では北海道から東北北部に生息する個体群と中部山岳の個体群とを別種とする見解がある（北原・黒田, 2017）。

成虫は年1回、夏の前半に出現し、低くゆるやかに飛翔しながら各種の花を訪れる。幼虫は溪流沿いのオニシモツケや湿性草原のワレモコウ類を食餌植物とするが、本県では平坦な湿性草原に自生するナガボノシロワレモコウのみでの発生が確認されている。しかし、こうした平坦地の生息環境は風力やソーラーといった新エネルギー施設用地として開発され易く、生息環境の減少が危惧される。（工藤忠）

**チョウ目 タテハチョウ科****C****和名** ウラギンスジヒョウモン**環境省：絶滅危惧Ⅱ類****学名** *Argyronome laodice japonica* (Ménétrières)

北海道から九州まで広く分布する。県内では平地から低山地の田畑周辺や林縁の草地に見られる。成虫は年1回7月から発生し、高温期には一時休眠し8月下旬～9月にかけて再び姿を現す。

幼虫の食餌植物はスミレ類で普遍的。したがって何処でも個体数が多い普通種であった。ところが2000年代以降、個体数に減少傾向が認められるようになった。継続調査により本種の産卵行動の観察から、近縁の他種に比べて日当たりのよい草地への嗜好性が強いことが分かった（室谷, 未発表）。近年、生息地の草地は定期的な草刈などがなされなくなり地表の暗化が進行。日当たりのよい植生環境の減少が、本種の生息に負の影響を及ぼしているものと考えられる。（室谷洋司）

**チョウ目 タテハチョウ科****C****和名** オオミスジ**環境省：該当なし****学名** *Neptis alwina* (Bremer et Grey)

北海道・本州に分布する。本県では広くみられ7月から8月が成虫期である。幼虫の食餌植物はバラ科のウメ・アンズ・スモモなどで、このことから平地から低山地にかけての村落やその周辺に多くみられた（室谷・阿部, 1962；阿部, 1969）。しかし、これは1990年代までのことで、その後は、発生地・個体数の減少が顕著になっている（室谷, 未発表）。

以前は、幼虫の食樹は農村地帯の身近な果実として栽培が盛んだったが、近年は病虫害の防除態勢が整った果樹園で管理され、本種の生息が不適になった。現状は周辺にのこされた遺存木にかろうじて発生しているにすぎない。このことから保全策には困難がともなっている。（室谷洋司）

**チョウ目 タテハチョウ科****C****和名** ホシミスジ**環境省：該当なし****学名** *Neptis pryleri iwasei* Fujioka

本州・四国・九州に分布する。中部地方では分布域も広く各地に普通であるが、東北地方では局所的になり本県が北限。県内では県南地方の特産種で、1962年に八戸市是川で初記録がなされて以来、南部町・五戸町・三戸町・階上町などで生息地が確認。発生は6月中旬～8月下旬の年1回。

中部地方の多産地では、シモツケ類の自生する明るい疎林や林縁部に多く見られるが、県内の発生地の特徴は、一般の人家や畑地境界に植えられたユキヤナギ・コデマリなどの植栽植物に発生していることである。このような地域は常に宅地造成などの危機にさらされており（室谷, 2018）、北限の種を保存する意味からも、発生地の保全などの対策が必要である。（室谷洋司）

**チョウ目 タテハチョウ科****C****和名** オオムラサキ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Sasakia charonda* (Hewitson)

日本の国蝶として知られ、いわゆる里山環境で多く見られる。全国に広く分布するが、北海道での分布は極めて局地的。青森県内でも限られた地域にのみ生息し、里山環境の荒廃により減少傾向にある。

成虫は年1回、7月上旬～8月に出現し、ニレ類、ナラ類、ヤナギ類などの樹液に集まるほか、獣の排泄物や腐った果実でも吸汁する。幼虫はエノキ類の葉を食べて成長するが、青森県のエノキ類は大半がエゾエノキ（寒地性）で、深浦地方にのみ北限のエノキ（暖地性）が自生する。深浦地方では双方のエノキ類で発生するものの、エノキは海浜寄りに自生するために利用度が低く、主要な発生源はエゾエノキとなっている。

**(工藤忠)****チョウ目 タテハチョウ科****C****和名** ヒカゲチョウ**環境省：該当なし****学名** *Lethe sicelis* (Hewitson)

日本特産種で、本州・四国・九州に分布。本県は北限の生息地で非常にまれな種である。県内の記録は新郷村（千葉ら, 1966）と十和田市（三浦, 2002）などで、発生地は深山に局限されている。成虫の発生は、県外では5～6月と8～9月の年2回。県内の記録は7月下旬～8月上旬で年1回と判断される。幼虫の食餌植物はタケ科のクマイザサが確認されている。

暖かい地方では、一般に平野部を生息地としているが、県内では山地に限られることから生態など研究の余地が残されている。この北限の生息地付近にはゴルフ場など開発が進められるなど、十分な調査が行われないうまま現在に至っており、生息環境が失われる危険性をはらんでいる。

**(室谷洋司)****チョウ目 シャクガ科****C****和名** クロフカバシャク**環境省：絶滅危惧Ⅱ類****学名** *Archiearis notha okanoi* (Inoue)

本亜種は、岩手県繋温泉で採集された個体によって新亜種記載（Inoue, 1958）された。国内では青森県と岩手県などに分布（環境省, 2015）する。青森県内では平川市唐竹（菊池, 1981；松野, 1987）、弘前市和徳町（杉木, 1986）、黒石市虹の湖（工藤・工藤, 2017）、青森市下湯（上原, 2017）などで記録されているだけの希少種である。

本亜種の幼虫はヤマナラシ属を食するが、岩手県の産地では、ゴルフ場の造成により自然生育のヤマナラシ属が伐採され、植栽されたイタリアポプラに寄生していることが知られている（井上ら, 1982；環境省, 2006, 2015）。植栽したイタリアポプラが緊急避難的な食樹になるが、個体数や生息地が少ないだけに食草のヤマナラシの減少が脅威となる。

**(山内智)****チョウ目 シャクガ科****C****和名** フチグロトゲエダシャク**環境省：該当なし****学名** *Nyssiodes lefuarius* (Erschoff)

成虫は4～5月に出現し晴天の昼間活発に飛ぶ。雄の触角は特徴的な長い羽毛状、前翅は橙黄色で黒褐色の幅広い縁取りがあつて美しいが、飛翔中は目立たない。雌は翅が退化しており広範囲の移動ができない特性がある。幼虫は多食性で、タデ科・バラ科・マメ科・キク科などの草本につく。

国内では北海道・本州・四国・九州に分布するが、いずれも産地に限られる。青森県内では現在のところ、岩木川下流の河川敷およびその周辺で見られる。このような環境は開発されやすく、すでに宮城県・茨城県・埼玉県・新潟県・高知県ではレッドリストに記載されている。

**(佐藤博)**

**チョウ目 シャクガ科****C**

和名 チャホシホソバナミシャク

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Brabira kasaii* Sato

本種は、国内では本州（青森県）などに分布している。1984年に東通村大利で採集された複数個体によって新種として記載された（佐藤, 1986）。同地での追加記録は知られていない。東通村をタイプ産地とするシャクガの仲間である。

その分布状況や生態などについては不明である（環境省, 2015）。今後の調査で本種の更なる生息地の確認とその生態の解明が望まれる。  
(山内智)

**チョウ目 シャクガ科****C**

和名 エゾヤエナミシャク

環境省：該当なし

学名 *Philereme corrugate* (Butler)

本種は、国内では北海道・本州・九州などに分布する。大変に珍しい希少種で産地も局地的である（中島・矢崎, 2011）。青森県内からは、つがる市高山稲荷（葛西・佐藤, 1977）、東通村大利（葛西, 1989a）などの記録が知られている。

本種の幼虫はクロウメモドキ科を食草とすることが知られている（井上ほか, 1982）。生息地が限定されるだけに、開発などによる生息地での食草の減少が脅威となる。  
(山内智)

**チョウ目 シャクガ科****C**

和名 シロマダラカバナミシャク

環境省：準絶滅危惧

学名 *Eupithecia extensaria leuca* Dietze

本亜種の、国内での分布は北海道・本州などから記録されているが、分布も局地的で個体数も非常に少ない種類である（中島ら, 2011）。青森県内からは青森市大滝平（葛西・佐藤, 1977）、三沢市仏沼（阿部ら, 2001）などから記録されている。

幼虫は、ヨーロッパではヨモギ属を食草としているが国内での詳しい生態は不明であり、今後の調査が待たれる。  
(山内智)

**チョウ目 ヤママユガ科****C**

和名 オナガミズアオ

環境省：準絶滅危惧類

学名 *Actias gnoma* (Butler)

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布する。個体数は少ない（江崎, 1975）。青森県内では東通村石持（大高, 1976）、十和田市蔦（佐藤・葛西, 1981）、八戸市南郷（青森県生物学会八戸支部, 1989）、東通村大沼（福田ら, 2001）、東通村野牛（亀田・山内, 2016）などから記録されているが多くはない。

本種の幼虫は、ハンノキやヤシャブシなどを食草としているが、ハンノキは低地や湿地、沼岸に自生し森林を形成する。湿地林の主要樹種である。近年の湿地林の開発などで樹林消失や乾燥化もありハンノキ林が減少し、生息環境が劣化しており、本種の生息衰退の原因となっている（環境省, 2015）。湿地林の保全に配慮が必要である。  
(山内智)

**チョウ目 ヒトリガ科****C****和名 シロホソバ****環境省：準絶滅危惧類****学名** *Eilema degenerella* (Walker)

本種は、北海道・本州・四国・九州などに分布する日本固有種である。全国的に個体数が減少し、採集記録も少なくなっている（岸井, 2011）。青森県内では八戸市（石村・佐藤, 1941）などから希少種として記録されている。隣接する岩手県からも盛岡市と北上市から少数であるが記録されている（土井, 2005）。

本種は、平地に多く、幼虫は地衣類を食草としている。近年の開発等で食草の地衣類の衰退・減少が見られ、生息に適した環境が悪化し、生息地・個体数ともに激減している。地衣類の保全と併せて、本種の調査及び資料の収集に努める必要がある。（山内智）

**チョウ目 コブガ科****C****和名 ミカボコブガ****環境省：準絶滅危惧類****学名** "*Meganola*" *mikabo* (Inoue)

本種は、国内では北海道・本州・九州などのカシワ林から記録されている。青森県内では深浦町十二湖（工藤, 1976）、青森市高田、つがる市屏風山・平滝沼（葛西, 1989）、つがる市大滝沼（亀田・山内, 2003）などのカシワ林から記録されている。近年カシワ林が残されている屏風山地域で生息が確認された。

本種の幼虫はカシワを食草としており、近年の開発等によってカシワ林が消滅・衰退しており、生息環境が悪化し、生息地及び個体数とも減少している。青森県等が実施している屏風山地区の環境保全事業が本種の生息に一定の効果を上げている。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****C****和名 カギモンハナオイアツバ****環境省：準絶滅危惧類****学名** *Cidariphura signata* (Butler)

本種は、国内では本州・四国・九州などから記録されているが少ない（大和田, 2011）。青森県内では東通村大利（葛西, 1985, 1988）などから記録されている。

本種の食草などの生態は不明で、雑木林縁・河川敷などで記録されているが（環境省, 2015）、開拓・開発等によって生息環境が悪化してきている。東通村以外でもさらに確認される可能性もあり、野外調査や資料収集に努める必要がある。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****C****和名 ヨスジカバイロアツバ****環境省：該当なし****学名** *Herminia robiginosa* Staudinger

本種は、国内では北海道・東北地方北部などの湿地帯に分布する個体数の少ない種類である。青森県内からは、つがる市屏風山（工藤, 1985）、つがる市平滝沼（葛西, 1983, 1988b；亀田・山内, 2003）、東通村大利（葛西, 1988b）、三沢市仏沼（阿部ら, 2001）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2002）、つがる市大滝沼（亀田・山内, 2003, 2007）、つがる市筒木坂（亀田・山内, 2005）などの湿地草原から記録されている。

本種の日本における詳しい分布や生態は不明であるが、湿地草原に限って確認されている。湖沼群を含む湿地帯が開墾等で減少しており、環境保全に配慮が必要である。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****C****和名** ミヤマキシタバ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Catocala ella* Butler

国内では北海道と本州に分布し、成虫は盛夏に出現する。幼虫の食餌植物としてはハンノキとヤマハンノキの記録があるが、ハンノキへの依存度が著しく高く、ヤマハンノキでの発生例は極めて少ない。

もとより希少な種であったが、自然度の高いハンノキ林が青森県内から激減。このため20年近く記録が途絶え、ようやく上原（2015）によって八甲田山と蓬田村から再発見された。その後、工藤ら（2017）は岩木山や十和田湖周辺にも生息することを確認し、成虫によるミズナラ樹液での吸汁行動、ハンノキ大木の樹幹亀裂部への産卵行動、幼虫はヤマハンノキよりもハンノキの若葉を好んで摂食したことなどを報告。  
(工藤忠)

**チョウ目 ヤガ科****C****和名** ヒメシロシタバ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Catocala nagoides* Wileman

本種の、国内での分布は北海道・本州・四国・九州などであるが、その分布はやや局地的である（井上ら, 1982；岸田ら, 2011）。青森県内ではつがる市大滝沼（工藤, 1983；亀田・山内, 2003）、つがる市平滝沼（亀田・山内, 2002）、弘前市岳・悪戸（柳田, 2004）などから記録されている。

本種の幼虫はカシワを食草としており、近年の開発等によってカシワ林が消滅・衰退しており、生息環境が悪化し、生息地及び個体数とも減少している。つがる市屏風山一帯には大規模なカシワ林が残っているが近年少なくなっている。青森県等が実施している屏風山地区の環境保全事業の継続とカシワ林の保全、今後の詳しい本種の分布調査が望まれる。  
(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****C****和名** マガリスジコヤガ**環境省：絶滅危惧Ⅱ類****学名** *Protodeltote wiscotti* (Staudinger)

本種は、国内では北海道・本州の沼沢地に分布するが全国的に少ない種類である（岸田, 2011）。

青森県内では、つがる市平滝沼（葛西, 1983；亀田・山内, 2003）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999；阿部ら, 2001, 2005）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2003, 2004）、鱒ヶ沢町長沼（亀田・山内, 2005）などの湿地帯から記録されている。

本種の詳しい生態は不明であるが、沼沢地の湿地に限って確認されている。近年、湿地帯が開墾等によって生息地環境が悪化し、全国的に絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。青森県では屏風山地域と小川原湖沼群地域から記録されているが、開発や整備によって生息に適した環境が狭まれている。環境保全に配慮が必要である。  
(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****C****和名** ウスジロケンモン**環境省：準絶滅危惧****学名** *Acronicta lutea* (Bremer et Grey)

本種は、国内では北海道・青森県・岩手県・秋田県・長野県などに局地的に分布している（枝ら, 2011；環境省, 2015）。青森県内では青森市高田（葛西, 1987）などから記録されている。

本種の食草はワレモコウで草原から生息が記録されている。近年、青森県内を含め全国的に草原などの開墾等で、ワレモコウの分布する地域が減少し、生息に適した環境が悪化してきている。開発等に環境保全の配慮が必要である。  
(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****C****和名** オオチャバネヨトウ**環境省：絶滅危惧Ⅱ類****学名** *Nonagria puengeleri* (Schawerda)

開帳は35mm～50mm、前翅は暗褐色で目立つ斑紋はないが中室端に白点が1つあらわれる。後翅は淡い黄白色。成虫は7～8月に見られ、国内では北海道・本州・九州で局地的に記録されるが少ない種である。

青森県内では黒石市境松（1978年）・軍馬平（1985年）（佐藤, 1985）、ベンセ沼（2006年）・冷水沼（2012年）（佐藤, 未発表）で記録されている。幼虫はガマを食しており、近年全国で湿地環境が消失する傾向にあるため、レッドリスト種として抽出している県が多い。本県においてもガマなどの繁茂する環境は開発が懸念され、本種の生息を危ういものにする可能性がある。（佐藤博）

**チョウ目 ヤガ科****C****和名** キスジウスキヨトウ**環境省：絶滅危惧Ⅱ類****学名** *Capsula sparganii* (Esper)

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに局地的に分布している（環境省, 2015）。青森県内では、つがる市牛潟池・大滝沼（工藤, 1983）、東通村大利（佐藤, 1985）、三沢市仏沼（オオセツカの生態環境研究グループ, 1999）、つがる市ベンセ沼・平滝沼（亀田・山内, 2002）、田子町花木（山内, 2011）などから記録されている。

本種の食草はガマやミクリなどの湿地性の植物が知られている。近年、青森県を含め全国的に湿地帯の開発等で生息環境が悪化してきており絶滅が危惧される。湿地環境の指標種となる種類である（枝ら, 2011）。湿地の開発等では環境保全の配慮が必要である。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****C****和名** ガマヨトウ**環境省：絶滅危惧Ⅱ類****学名** *Capsula aerate* (Butler)

本種の、国内での分布は北海道・本州などで、個体数は少ない（井上ら, 1982；環境省, 2015）。青森県内では、つがる市大滝沼・平滝沼（工藤, 1983）、東通村大利（佐藤, 1985）、三沢市仏沼（オオセツカの生態環境研究グループ, 1999）などの湿地帯から記録されている。

本種の食草はガマ等が知られている。湿地を生息地としており、湿地環境の指標種となる種類である（枝ら, 2011）。近年の湿地帯の開発等でその生息環境は劣化してきており絶滅が危惧される。開発等では環境保全の配慮が必要である。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****C****和名** ウスミモンキリガ**環境省：準絶滅危惧****学名** *Eupsilia contracta* (Butler)

本種の、国内での分布は北海道・本州・四国・九州などで局地的である（枝ら, 2011；環境省, 2015）。青森県内では、青森市大釈迦・眺望山・浪館・三本木（葛西・佐藤, 1979）、青森市梵珠山（葛西, 1984）などで記録されている。

本種の食草はハンノキで、生息地は湿地でハンノキ林が残されている地域である。湿地等は農耕地造成や整備などの開発により年々減少し、生息環境のハンノキ林が少なくなっている。開発等では環境保全の配慮が必要である。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****C**

和名 ミスジキリガ

環境省：準絶滅危惧

学名 *Jodia sericea* (Butler)

本種の、国内での分布は北海道・本州・四国・九州などでやや局地的な種類である（井上ら, 1982；枝ら, 2011）。青森県内では、青森市大釈迦・高田・谷地山（葛西・佐藤, 1979）、青森市梵珠山・浅虫・大谷（葛西, 1984）などから記録されている。

本種の食草は、カシワが知られており、二次林のカシワ林で得られている（井上ら, 1982）。青森県内の生息もカシワ林で見られる。近年各地のカシワ林は開発などで減少してきており、開発等では環境保全の配慮が必要である。つがる市屏風山地区の広域にカシワ林が残っている地区でまだ確認されておらず詳しい調査が望まれる。  
(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****C**

和名 オイワケクロヨトウ

環境省：絶滅危惧 I B類

学名 *Lacanobia aliena amurensis* (Staudinger)

本亜種の、国内での分布は北海道・本州などであるが、生息地は局地的で大変少ない種類である（井上ら, 1982；吉松, 2011）。青森県内では平川市軍馬平（葛西・佐藤, 1980）、平川市平賀（井上ら, 1982）などの記録が知られている。

国内の分布地は青森県を含め、草原で記録されている（井上ら, 1982）。国内での詳しい生態は不明であるが、今後の調査で更に生息地が確認される可能性が高い。  
(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****C**

和名 ダイセツヤガ

環境省：該当なし

学名 *Xestia albuncula* (Eversmann)

本種の、国内での分布は北海道・本州の山岳地帯である。本種は高山帯に生息する高山蛾である（井上ら, 1982；小林, 2011）。青森県内では八甲田山（葛西, 1986）、青森市大岳（神保ら, 1991）などの記録があり、八甲田山系からのみ確認されている。

本種の食草は高山に見られるガンコウラン・コケモモ等である（小林, 2011）。高山の特殊な環境に好んで生活し、分布範囲は狭い。生息地の八甲田山は国立公園に指定され保護されているが、入山者の増加などにより一部裸地化しており、官民一体となって環境改善に取り組んでいる。環境の変化が脅威となる。  
(山内智)

**トビムシ目 シロトビムシ科****D**

和名 エピガラトビムシ

学名 *Homaloproctus sauteri* Börner

環境省：該当なし

本種の体長は4～5mmと大型種である。体色は黒褐色～黒紫色であり、眼がなく、PAO（触角後器）は小さい。跳躍器はやや発達し尾角はない。擬小眼が各体節表面に規則的に配列する。日本固有種で、国内では青森・山梨・福岡・大阪・京都・福井・富山・群馬などの各府県で採集され、青森県内では弘前市と黒石市青荷から雪上・コケ類中から採集されている（Uchida, 1953）。この他、弘前市岩木山（須摩・山内, 2006）から記録されている。（須摩靖彦）

**トビムシ目 イボトビムシ科****D**

和名 エサキウミトビムシ

学名 *Oudemansia esakii* (Kinoshita)

環境省：該当なし

本種は体長2.5mm内外、体は細長く口が突出する。体色は黒藍色、環節や背板・腹板の所々に白条や白点がある。小眼は8個、PAO（触角後器）はなく、跳躍器は短い。長崎県対馬の海岸波打ち際で最初に発見、その後和歌山県瀬戸白浜・潮の岬で見つかった。青森県内では青森市浅虫の海岸の石下で発見され（内田, 1952）、その後、青森市奥内（須摩・山内, 2016）、むつ市芦崎、平内町浅所（須摩・山内, 2015）などの海岸から記録された。（須摩靖彦）

**トビムシ目 イボトビムシ科****D**

和名 キボシアオイボトビムシ

学名 *Morulina gilvipunctata gilvipunctata* (Uchida)

環境省：該当なし

本種の体長は2～3mmで、各節に長い剛毛の生えた半球状イボがあり、腹部末部の節にはイボ2個の突起がある。体色は青黒色で黄色の斑紋があり、眼は小眼5個、PAO（触角後器）は楕円形で200余の副瘤がある。青森県内では黒石市中野山から採集し新種記載された（内田, 1938）。その後、黒石市中野神社（鳴海, 1938, 1951；田中, 2013）、むつ市恐山、黒石市青荷（鳴海, 1951）や秋田・山形県などでも採集された。北方系の種である。（須摩靖彦）

**トビムシ目 クモマルトビムシ科****D**

和名 コシダカマルトビムシ

学名 *Gibberathrix tsugarensis* Uchida

環境省：該当なし

本種の体長は1.8mmの球形で、胴部の背部が大きく上に突き出ているのが特徴である。体色は薄黄色の地色に紫色の模様がある。触角第3節の先端に指状突起があるのも特徴である。1属1種である。分布は青森県のみで、平川市竹館と黒石市青荷から湿った枯葉の下と湿った土から採集されたものを新種記載した（Uchida, 1952）。最近ではむつ市北国山（須摩・山内, 1988）、佐井村磯谷（須摩・山内, 2013）から記録されている。（須摩靖彦）

**トビムシ目 クモマルトビムシ科****D**

和名 ミツワマルトビムシ

学名 *Ptenothrix tricycla* Uchida

環境省：該当なし

本種の体長は2mm前後の球形で、体色は黄色の地色で、頭部は黒紫色、胴部の背面に二重の褐色の輪があり、その外の側板と肛生殖節に焦げ茶色の輪があり、全体で三重の同心円の輪を構成する美麗種である。分布は青森県のみで、黒石市青荷・山形の湿った落葉下、倒木樹皮やハイマツ樹皮から採集し、新種として発表された（Uchida, 1953）。その後八甲田山地（Uchida, 1969など）、むつ市恐山山地（須摩ら, 2003）などから記録された。（須摩靖彦）

**バッタ目 コオロギ科****D**

和名 エゾエンマコオロギ

学名 *Teleogryllus yezoemma* (Ohmachi et Matsuura)

環境省：該当なし

河川敷の礫地に生息する種であるが、河川改修に伴い生息環境が悪化していると考えられる。松浦（1981）の簡単な分布図では弘前と鱒ヶ沢の付近に点があるが、詳細及び根拠は不明で、正式な記録はないようである。2001年の国交省の河川水辺の国勢調査で、八戸市から確認されている。山形県でも準絶滅危惧とされている。（市田忠夫）

**バッタ目 マツムシ科****D**

和名 カヤコオロギ

学名 *Euscyrthus japonicas* (Shiraki)

環境省：該当なし

草原性の小型コオロギで、草に登って生活し、鳴かない。かつては採草地などに生息していたと考えられるが、草原環境の衰退とともに減少しているようである。本県が北限とされる。土屋 (1931) で弘前市、市田 (1986) で五所川原市、黒石市教育委員会 (2001) でつがる市 (1934年の採集標本) から記録されている。五所川原市ではその後の度重なる調査でも再確認できない。  
(市田忠夫)

**バッタ目 ヒシバッタ科****D**

和名 トゲヒシバッタ

学名 *Criotettix japonicus japonicas* (de Haan)

環境省：該当なし

翅端まで19~27mmに達する大形のヒシバッタで、前胸背板測縁に顕著な棘を有する。湿地に生息する種で、かつては水田畦畔などにもいたようである。県内では市田・市川がつがる市から2000年に初めて記録し (市田・市川, 2001)、2013年にも幼虫が採集されたが個体数は少ない。黒石市教育委員会 (2001) により、つがる市と黒石市の古い標本の存在が確認された。  
(市田忠夫)

**バッタ目 バッタ科****D**

和名 セグロバッタ

学名 *Shirakiacris shirakii* (Bolivar)

環境省：該当なし

やや湿度の高い草原に生息する種とされる。土屋 (1931) により弘前市、石村・佐藤 (1941) により黒石市、八戸市より記録されているが、県内では戦前の確認例しかなく、65年以上確認例が知られていない。本県が北限とされる。山形県で情報不足種。  
(市田忠夫)

**バッタ目 バッタ科****D**

和名 ショウリョウバッタモドキ

学名 *Gionista bicolor* (de Haan)

環境省：該当なし

本県が北限の草原性のバッタで、かつては採草地などに生息していたと考えられ、草原環境の衰退とともに減少していると思われる。弘前市・黒石市・つがる市から戦前の記録があり (石村・佐藤, 1941)、三戸町の記録は1953年 (故福田進私信)。過去50年以内では1991年のつがる市の記録しかない (市田, 1993)。岩手県で情報不足、山形県で準絶滅危惧。  
(市田忠夫)

**バッタ目 バッタ科****D**

和名 カワラバッタ

学名 *Eusphingonotus japonicas* (Saussure)

環境省：該当なし

記録としては戦前の土屋 (1931) による弘前市、石村・佐藤 (1941) による黒石市しかない。河川敷の礫地に生息する種であるが、河川改修に伴い生息環境が悪化していると考えられる。市田が黒石市に赴任した当時 (1983~85年頃) 旧農業試験場構内で目撃しているが、その後浅瀬石川は河川改修され、浅瀬石橋より下流には礫の河原は存在しなくなった。本県が北限とされる。岩手県で準絶滅危惧相当。  
(市田忠夫)

**ガロアムシ目 ガロアムシ科****D**

和名 ガロアムシ

学名 *Galloisiana nipponensis* (Gaudall et King)

環境省：該当なし

本種は無翅で、森林等の伏流水の流れるガレ場や土壌に潜んでいる。環境指標となる種類であり、稀少な種で、本州に分布している。本属の幼生の記録は多くあるが、本種と確定される記録は少ない (山田, 2001)。山田 (1999) は成虫で記録された弘前市大和沢、大鰐町戸和田山の2か所を本種の確認された青森県内の生息地として上げている。地中生活するため、分布地の環境保全と、今後県内の成虫での確認の蓄積が望まれる。  
(山内智)

**カメムシ目 ミズムシ科****D**

和名 ミゾナシミズムシ

学名 *Cymatia apparens* (Distant)

環境省：準絶滅危惧

本種は小型の水生昆虫で、池沼などの止水域に生息している。希少な種類で、近年水質悪化、外来魚侵入などで、全国的に絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。国内では北海道・本州・四国・九州などに分布するが、青森県内ではつがる市ベンセ沼（小笠原・鳥居, 2007；大高ら, 2008a, 2008）などから生息が確認されている。生息地は青森県で保全対策を行っているが、周辺地域の湿地開墾などの影響もあり、今後も継続した保全活動が必要である。県内の多数ある池沼での生息調査も望まれる。（山内智）

**カメムシ目 ツチカメムシ科****D**

和名 シロヘリツチカメムシ

学名 *Canthophorus niveimarginatus* (Scott)

環境省：準絶滅危惧

市田（1989）は、1979年の弘前市と、1935年の八戸市での、それぞれ1頭の標本を紹介した。後者は石村・佐藤（1941）の三戸郡からの記録の根拠標本である。近年全国的に確認例が少なく、環境省の新レッドリストでは準絶滅危惧、山形県では情報不足とされている。半地下性のツチカメムシ類は、一般的な調査では検出しにくいのが、寄主とされるススキに半寄生するカナビキソウの開花・結実期には、調査効率が良くなると考えられる。（市田忠夫）

**コウチュウ目 オサムシ科****D**

和名 オオヒョウタンゴミムシ

学名 *Scarites sulcatus* Olivier

環境省：準絶滅危惧

本種は、主に海岸の砂地に生息している。海岸部の護岸や開発等から砂浜の衰退がみられ全国的に生息地が減少してきており、絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。国内で北海道・本州・四国・九州などに分布し、東北地方からは青森県と秋田県などから記録されている。青森県内では八戸市（石村・佐藤, 1941）、深浦町（阿部, 1976；下山, 1978）などから記録されているが、どの地域も、護岸工事、風力発電、車両進入等や、津波の自然災害によって、生息環境が変貌してきており、今後砂浜海岸の環境保全と生息調査が望まれる。（山内智）

（山内智）

**カメムシ目 ナガカメムシ科****D**

和名 ハマベナガカメムシ

学名 *Peritrechus femaralis* Kerzhner

環境省：準絶滅危惧

市田（1988）がつがる市から記録した1例が知られるのみ。海浜に生息するカメムシで、近年全国的にもほとんど確認されていない。環境省の新レッドリストでは準絶滅危惧、山形県では情報不足とされている。海浜植物の根際で生活するという。地表性のものが多いナガカメムシ科は、植物が繁茂する夏期以降には発見がやや困難となるが、県内の海浜調査は高頻度であり、単に調査技術的な問題だけで本種の確認が少ないとは考えにくい。（市田忠夫）

（市田忠夫）

**アミメカゲロウ目 センブリ科****D**

和名 ウスバセンブリ

学名 *Sialis jezoensis jezoensis* Okamoto

環境省：該当なし

県内では、1987年のむつ市と1988年の青森市での採集記録がある（市田, 1992；Hayashi & Suda, 1995）。その後、2012年に青森市内の別の地点から発見されたが、既知産地からは直線距離で30km離れている。トウホククロセンブリと良く似ており、識別するには翅脈や交尾器を詳細に観察する必要がある。属名はセンブリ属に統合された（Liu *et al.*, 2015）。（市田忠夫）

（市田忠夫）

**コウチュウ目 オサムシ科****D**

和名 ミツメナガチビゴミムシ

学名 *Trechiana triops* S.Uéno

環境省：該当なし

本種は、体長6mm内外と小さく後翅も退化して無く、広範囲で移動し分布を拡大することが困難な種類で、個体数も少ない。大鰐町十和田山から採集された資料によって新種記載（S.Uéno, 1994）された種類である。隣接する白神山・岩木山からは同属の別種が生息している。本種は地表下で生活するため、生息地の開発などによる環境変化に生息が大きく左右される。生息地の環境が衰退してきており、環境保全と今後県内での更なる生息地の確認が望まれる。（山内智）

（山内智）

**コウチュウ目 オサムシ科 D****和名** シモキタメクラチビゴミムシ**学名** *Oroblemus sparsepilifer* S.Uéno**環境省：該当なし**

本種は体長3.5mm内外で、複眼と後翅は退化し地中を生息場所としている。生態については不明な点が多い。肢も非常に短く、広範囲での移動ができず、特定の地域に生息が限定される。本種は、むつ市北国山の個体で新種記載(S.Uéno, 1975)された。本属の分布範囲は大変狭いと考えられ、本生息地以外に記録がない。林道の拡張工事等で生息地の沢の一部が削られたが、隣接した山林の沢にも生息している可能性が高く、今後の生態及び生息調査が望まれる。

**(山内智)****コウチュウ目 オサムシ科 D****和名** フトクチヒゲヒラタゴミムシ**学名** *Parabrosicus crassipalpis* (Bates)**環境省：該当なし**

本種は、下唇ヒゲ末端節が肥大した特徴的な形態のヒラタゴミムシの仲間である。国内のどこの生息地とも個体数はまれである。国内では北海道・本州・四国・九州などの森林の林床に生息する。青森県内からは大鰐町早瀬野(山内, 1996)などから記録されている。県内の森林地帯から更に確認される可能性があり、継続した調査が望まれる。

**(山内智)****コウチュウ目 オサムシ科 D****和名** オオトックリゴミムシ**学名** *Oodes vicarius* Bates**環境省：準絶滅危惧**

本種は、湿地、池沼、河川敷などの多少開けた水際に生息するが、越冬は成虫で水没する可能性のない土中で行われる(中根, 1986; 須田, 1993; 環境省, 2015)。近年の開発等によって本種に適した水辺環境が少なくなり、生息地が衰退し絶滅が危惧されている(環境省, 2015)。日本固有種で本州・四国・九州などに分布するが、青森県内からはつがる市ベンセ沼(河上・林, 2008)などから記録されている。生息地は青森県で保全対策を行っているが、周辺地域の湿地開墾などの影響もあり、今後も継続した保全活動が必要であり、更に県内の多数の池沼及び湿地帯での本種の生息の調査が望まれる。

**(山内智)****コウチュウ目 ゲンゴロウ科 D****和名** ニセモンキマメゲンゴロウ**学名** *Platambus convexus* Okada**環境省：該当なし**

体長8~9mm。本種はOkada(2011)により記載された新種で、流水性の普通種であるモンキマメゲンゴロウに酷似する。モンキマメゲンゴロウとは、前胸腹板突起や雄交尾器の形状で区別できる。生息地では、両種は同所的に見られることから、過去のモンキマメゲンゴロウの記録は再検討(標本の確認)が必要である。現在のところ、県内では北野(2012)による五所川原市の河川での記録しか報告されていない。

**(櫛田俊明)****コウチュウ目 コガネムシ科 D****和名** アカマダラハナムグリ**学名** *Anthracophora rusticola* Burmeister**環境省：情報不足**

本種は、体色が赤褐色で黒紋のまだら模様があり、里山のナラ類の樹液などに集まる。記録の少ない種類である。最近、その生態が解明され猛禽類(ハチクマ・クマタカなど)などの巢中で幼虫が堆積物を食べて成長することがわかった(楨原ら, 2004)。国内では北海道・本州・四国・九州などに分布し、青森県内では八甲田山(石村・佐藤, 1941)、五所川原市狼野長根(工藤, 1986)、平川市津軽湯の沢、弘前市沢部線林道(今, 1986)、弘前市天王沢(尾崎・永幡, 1997)、板柳町灰沼(工藤, 2002)などから記録されている。別名アカマダラコガネとも言う。

**(山内智)****コウチュウ目 コメツキムシ科 D****和名** ハヤチネベニコメツキ**学名** *Denticollis yasumii* Ôhira**環境省：該当なし**

本種は、岩手県早地峯山と弘前市岩木町の資料で新種記載(Ohira, 1993)されたコメツキムシ類で、この他に宮城県七ヶ宿町でも記録されている(Kishi, 1999)。分布は局地的で希少種であり、上記各県ではレッドデータブック種に指定されている。本種の生息地域の岩木山地域は一部が津軽国定公園に指定されているが、近年、登山者が増加し、官民一体となって登山道以外の立入やゴミ・糞尿処理などに取り組んでいるが、環境の悪化で生息が危惧される。

**(山内智)**

**コウチュウ目 コメツキムシ科 D**

和名 ババアカコメツキ  
 学名 *Ampedus babai* Kishii

環境省：該当なし

本種は、青森県と岩手県などに分布し (Kishii, 1999)、局地的で採集例の大変少ない希少種である。本種は十和田市猿倉温泉で採集された資料によって新種記載 (Kishii, 1966) された。本種の生息地域は、十和田・八幡平国立公園内の温泉地で南八甲田山の登山口にあたり、登山者、車両の出入りも多く、今後も継続した保全活動が必要である。今後の詳しい本種の分布や生態の調査が望まれる。(山内智)

**コウチュウ目 コメツキムシ科 D**

和名 トワダアカコメツキ  
 学名 *Ampedus towadensis* Kishii

環境省：該当なし

本種は、青森県・山形県・新潟県 (Kishii, 1999)、秋田県 (尾崎ら, 2006) など記録がある。その分布も局地的で採集例の少ない希少種である。本種は、十和田市谷地温泉で採集された資料によって新種記載 (Kishii, 1987) された。青森県内からは他にむつ市屏風山 (大平・山内, 1991) などの記録がある。本種のタイプ産地は、十和田・八幡平国立公園内の温泉地で北八甲田の登山口にあたり、登山者・車両の出入りも多く、今後も継続した保全活動が必要であり、本種の分布や生態など不明な点が多く、今後の詳しい本種の分布や生態の調査が望まれる。(山内智)

**コウチュウ目 コメツキムシ科 D**

和名 ツガルアカコメツキ  
 学名 *Ampedus tugaru* Kishii

環境省：該当なし

本種は、青森県、長野県 (岸井, 2006) に分布し、局地的で採集例の少ない希少種である。本種は岩木山山頂で採集された資料によって新種記載 (Kishii, 1992, 1999) された。生息地の岩木山山頂部付近は、津軽国定公園の特別保護地区に指定されており、動植物 (昆虫も含め) の採集は全て禁止されており保護されている。しかし近年、登山者が増加し、官民一体となって登山道以外の立入禁止やゴミや糞尿処理などに取り組んでいるが、環境の悪化で本種の生息が危惧される。(山内智)

**コウチュウ目 オオキノコムシ科 D**

和名 カタアカチビオオキノコ  
 学名 *Tritoma kensakui* Chûjô

環境省：該当なし

本種は、本州などに分布する。青森県が分布北限で、局地的で少ない種類である。本種は平川市葛川・井戸沢・小木平で採集された資料にもとづいて新種記載 (Chûjô, 1955) された。他に青森県内では、平川市温川・大木平・砂子沢 (Chûjô, 1969) などから記録されている。本種は、ハチノスタケを寄食するが (下山, 1960)、その生態はまだ不明である。キノコの分布と関連する種であり、キノコが生育する環境の保全が必要であり、キノコと本種の分布調査が望まれる。(山内智)

**コウチュウ目 テントウムシ科 D**

和名 ババヒメテントウ  
 学名 *Scymnus babai* Sasaji

環境省：該当なし

本種は、国内では本州・四国・九州などに分布 (黒沢ら, 1985) している種類で、ヨシ湿原で見られるが少ないテントウムシである。青森県内では、西目屋村乳穂の滝、つがる市カクレ沼 (山内, 1996) などから記録されている。ヨシが繁茂する湿地帯が開発等で衰退してきており、湿地帯の保全と青森県内全域の湿地帯での本種の調査が望まれる。(山内智)

**コウチュウ目 テントウムシ科 D**

和名 ムナグロチャイロテントウ  
 学名 *Micraspis satoi* Miyatake

環境省：該当なし

本種は、本州に分布する。湿地性テントウムシの代表で、アシの繁茂している湿地に生息する (佐々治, 1982) が個体数は少ない。青森県内では、六ヶ所村尾駮沼 (山内, 1996) の岸辺の湿地帯などから記録されている。各地の湿地帯が開発などで衰退してきており、生息に適した環境が少なくなっている。県内全域での湿地帯の保全と本種の調査が望まれる。(山内智)

**コウチュウ目 ハムシ科****D**

和名 アカガネネクイハムシ

学名 *Donacia hirtihumeralis* Komiya et Kubota

環境省：準絶滅危惧

本種は本州の青森県・岩手県・宮城県・栃木県・茨城県などで確認されている日本固有種で、分布は局地的で限られている（末長ら, 2009；林, 2012；環境省, 2015）。青森県内では、つがる市屏風山の沼（末長, 2009）などから記録されている。フトイなどを食草にしているが（林, 2004）、生息地の湿地帯は開発などで衰退してきており、生息に適した環境が減少している。県内全域での湿地帯の環境保全と本種の調査が望まれる。

(山内智)

**コウチュウ目 ハムシ科****D**

和名 キンイロネクイハムシ

学名 *Donacia japana* Chûjô et Goecke

環境省：準絶滅危惧

本種は北海道・本州・九州などに分布する日本固有種である。湿地のミクル類を後食することが知れているが、全国的に湿地の開発などで衰退しており、本種の絶滅が危惧される（林, 2004, 2012；環境省, 2015）。青森県内では、弘前市笹館、六ヶ所村市柳沼（野尻湖昆虫グループ, 1985）、三沢市仏沼（野尻湖昆虫グループ, 1985；岩田ら, 2019）や鱒ヶ沢町中村川、深浦町十二湖・津梅川、階上町田代、三沢市谷地頭（林, 2006）などから記録されている。各生息地の湿地は乾燥化し衰退・消滅しており、県内全域での湿地帯の環境保全と本種の調査が望まれる。

(山内智)

**ハチ目 ナギナタハバチ科****D**

和名 オオナギナタハバチ

学名 *Megaxyela togashii* Shinohara

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

国内では北海道・本州・四国などに分布し、幼虫はクルミ類を食べるが、全国的に採集例の少ない極めてまれな種類で、森林開発などにより生息適地の自然林が無くなってきており、全国的に絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。青森県内では、十和田市蔦温泉付近で1999年に生息が確認され（山田, 2000）、その後、白神山地の西目屋村鬼川辺沢（山田, 2011）などで確認された。記録の少ない種である。本種は山地性で沢沿いに残されたサワグルミ等が生息地であるが、開発等で良好な生息環境が衰退している。

(山内智)

**ハチ目 シリアゲコバチ科****D**

和名 オキナワシリアゲコバチ

学名 *Leucospis sinensis* Walker

環境省：該当なし

国内では本州・四国・九州などに分布している。青森県内では、八戸市と弘前市の市街地に近い平地で得られている（山田, 2000, 2010, p.284）。成虫は8月頃に見られる。成虫雌は腹部の中ほどに達する産卵管を背面に背負い、平地や住宅地の生け垣などで良く見られる。寄主であるコクロアナバチの巣筒の外側からこの産卵管を突き刺して中の幼虫に卵を産みつける（山田, 2000）。確認された生息地及び個体数は少ない。

(山内智)

**ハチ目 セイボウ科****D**

和名 オオセイボウ

学名 *Stilbum cyanurum* (Förster)

環境省：情報不足

国内では本州・四国・九州などに分布している。トックリバチ類などに寄生することが知られている。開発等により個体数の減少が危惧されている（環境省, 2015）。青森県内では黒石市山形（鳴海, 1937；石村・佐藤, 1941）、鱒ヶ沢町大然（山田, 1997）などから記録されている。本種は暖地系の種で、暖地では少なくない（常木, 1970）。県内では寄主のスズバチは広く分布しているが、本種は極めて限定された地域でしか認められない（山田, 2010, p.285）。

(山内智)

**ハチ目 セイボウカ科****D**

和名 ミヤマツヤセイボウ

学名 *Philoctetes monticola* (Tsuneki)

環境省：情報不足

国内では北海道・本州などに分布している日本固有種で、希少種である。本種は開発などで国内では生息地、個体数ともに少ない。アリマキバチ類などを寄主としている（環境省, 2015）。青森県内からはむつ市釜臥山から採集されParatypeに指定されている（Tsuneki, 1975）。本生息地も林道造成等で生息環境が衰退しており、追加記録は見られない。埼玉県でクワキジラの幼虫への産卵が観察されている（半田, 2017）が、まだ成育過程等の生態は不明な点が多い。

(山内智)

**ハチ目 アリ科****D**

和名 ツノアカヤマアリ

学名 *Formica fukaii* Wheeler

環境省：情報不足

国内では北海道・本州などに分布している。登山道や林道沿いの開けた明るい環境に、枯葉で小さい塚状の巣を作るが、道路の拡張・放棄等で生息に適した環境が衰退し、個体数が減少している（寺山ら, 2014；環境省, 2015）。青森県内では、青森市雲谷（石村・佐藤, 1941）、八甲田山（Yasuno, 1963）などが生息地として記録されている。今後の調査で八甲田山地以外からも確認される可能性がある。（山内智）

**ハチ目 アリ科****D**

和名 テラニシクサアリ

学名 *Lasius orientalis* (Karawajew)

環境省：準絶滅危惧

国内では北海道・本州中部以北などに分布している。開発等にともない生息に適した環境が少なくなっており、生息地での個体数の減少が危惧されている（環境省, 2015）。青森県内でも生息が確認され（Japanese Ant Database Group, 2003）、深浦町吾妻川（山田, 2009）などから記録されている。本種は、草地に見られるキイロケアリの巣に一時的に社会寄生することが知られており（寺山ら, 2014）、本種と併せて生息の確認に注視が必要である。別名をテラニシケアリとも言う。（山内智）

**ハチ目 アリ科****D**

和名 ミヤマアメイロケアリ

学名 *Lasius hikosanus* Yamauchi

環境省：情報不足

国内では、本州・九州などに分布する日本固有種である。生息地は極めて限られ個体数も少なくまれである（環境省, 2015；寺山ら, 2014）。青森県内からは八甲田山（日本産アリ類データベースグループ, 2003）などから記録されている。本種は一時的な社会寄生種で、巣は森林内の立木根元に見られるが、森林の開発等により生息適地の環境が衰退している。今後の生態や分布の解明が急がれる。（山内智）

**ハチ目 クモバチ科****D**

和名 イワタツツクモバチ

学名 *Homonotus iwatai* Yasumatsu

環境省：該当なし

国内では本州などに分布する。青森県内での記録は少なく、青森市浅虫（大野, 1935）で記録されてからしばらく記録は無かったが、山田（2000）が岩木山山麓の弥生から記録した。本種はススキやアシなどの葉を折り曲げてチマキ状の巣を作るカバキコマチグモ（青森県内各地に記録）の成虫に体外寄生するツツクモバチの一種である（寺山・須田, 2016）。近年の草地などの開発から両種の生息に適した環境が衰退している。しかしカバキコマチグモの個体数減少は顕著でなく、今後の分布解明が急がれる。（山内智）

**ハチ目 クモバチ科****D**

和名 フタモンクモバチ

学名 *Parabatozonus jankowskii* (Radoszkowski)

環境省：準絶滅危惧

国内では本州・四国・九州などに分布する。青森県内では青森市横内、黒石市山形（石村・佐藤, 1941）、八戸市根城（山田, 2000）、つがる市森田（黒石市教育委員会, 2001）などで記録されている。山田（2010, p.285）によると、本種は森林よりも平地の草地付近に生息し、成虫は年1回夏場に活動する。本種はオニグモの成熟メスを狩り、地中に穴を掘って運び入れ、産卵してから埋め戻しておくことが知られている。住宅地の造成や道路の拡張などで、営巣の適地が減り絶滅が危惧される。（山内智）

**ハチ目 スズメバチ科****D**

和名 オオハムシドロバチ

学名 *Symmorphus captivus* (Smith)

環境省：情報不足

国内では本州・四国などに分布している。全国的に生息地は少なく限定され、確認個体数も少ない（環境省, 2015）。青森県内からは西目屋村大川原（山田, 1983）、弘前市座頭石（Yamane, 1990）、平川市唐竹（山田, 1997）などの低山地から記録されている。山田（2010, p.285）によると成虫は7～8月頃に発生し、枯れ茎の髓部などを利用した管住性で、ハムシの幼虫を狩って幼虫の餌とする。明細な生活史は不明であり、解明が望まれる。（山内智）

**ハチ目 アナバチ科****D**

和名 ミカドジガバチ

学名 *Hoplammophila aemulans* (Kohl)

環境省：該当なし

国内では本州・四国・九州などに分布している。青森県内では鱒ヶ沢町乱岩ノ森・一ツ森、深浦町追良瀬川(阿部, 1980)、鱒ヶ沢町赤石川・櫛石山、西目屋村大川(下山ら, 1991)、青森市城ヶ倉(青森県, 1993)、深浦町笹内川(福田ら, 1996)、十和田市蔦、西目屋村弘西林道(山田, 1998)、つがる市森田(黒石市教育委員会, 2001)などで記録されている。本種はシャチホコガ科幼虫を狩って幼虫の餌とする(寺山・田埜, 2006; 寺山・須田, 2016)。朽木の坑を利用して営巣するため、本種の生存には太い立枯の樹が経年的に存在する原生林に近い森が必要である(山田, 2010, p.285)。しかし近年少なくなっている。(山内智)

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 ガロアギングチ

学名 *Crossocerus heydeni* Kohl

環境省：情報不足

国内では本州・四国などに分布する。キノコバエを狩る観察例があるが(寺山・須田, 2016)、生息地は限られ、個体数も少ない。開発等による環境の変貌で絶滅が危惧される(環境省, 2015)。青森県内からは平川市十和田山地(常木・下山, 1963)、青森市雲谷(青森市, 1994)、黒石市田代山、平川市滝ノ沢、青森市横内八重菊、中泊町権現崎、西目屋村弘西林道、深浦町十二湖(山田, 1999)などから記録されており、詳しい本種の生態解明と生息地の確認が望まれている。(山内智)

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 アギトギングチ

学名 *Ectemnius martjanowi* (Morawitz)

環境省：情報不足

国内では本州などに分布している。山地性で個体数は少なく全国的に減少してきている(環境省, 2015; 寺山・須田, 2016)。青森県内からは十和田市十和田湖温泉・宇樽部(田埜, 1984)などから記録されている。本種は北方系で本州とシベリア、サハリンなどで確認されているがまだ北海道からは発見されておらず、その分布は特異である(常木, 1956; 山田, 2010, p.286)。なお詳しい生態についてはまだ不明である。

(山内智)

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 ハクトウアワフキバチ

学名 *Gorytes neglectus* Handlirsch

環境省：該当なし

国内では北海道・本州に分布する。本州からは近年青森県から確認され(山田, 2010)、弘前市岳・岩木山・長慶森、黒石市田代山(山田, 1999)などから記録されている。山田(2010, p.287)によると、成虫は6月頃に活動し、土中に短い穴を掘り、ヤマトキタヨコバイなどの成虫を狩って幼虫の餌とすることが知られている。獲物や営巣場所との関連から、その生息場所は非常に限定されており、今後の調査で本種の生息地の確認が望まれる。(山内智)

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 キユビギングチ

学名 *Crossocerus flavitarsus* (Tsuneki)

環境省：情報不足

国内では北海道・本州などに分布している。個体数が少なくまれな種類である(環境省, 2015)。青森県内では、平川市十和田山地(Tsuneki, 1959; 常木・下山, 1963; 田埜・常木, 1969)などから記録がある。南部(1973)によるとスギの枯木に穿孔して営巣し、その穴を塞ぐのにスギの樹脂を使う。獲物はハエ類の成虫を狩る。森林や土地の開発等によって営巣環境が衰退してきている。営巣地の環境保全が望まれる。(山内智)

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 キスケギングチ

学名 *Rhopalum guttatum* Tsuneki

環境省：該当なし

国内では北海道・本州などに分布する。生息記録の少ない種類である。青森県内からは平川市葛川(田埜・常木, 1969)、弘前市岩木山(山田, 2006)などから記録されている。山田(2010, p.286)によると、成虫は7~8月に活動し、萱葺き屋根などに巣を作り、ユスリカの仲間を狩って幼虫の餌とすることが知られている。営巣場所の一つである萱葺きの民家は殆どなくなり、営巣環境が衰退してきている。(山内智)

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 コシジロギングチ

学名 *Rhopalum succineicollare* Tsuneki

環境省：該当なし

国内では北海道・本州・四国・九州などに分布する。青森県内からは平川市温川（田塾・常木, 1969）、黒石市長坂山、青森市梵珠山、弘前市長慶森（山田, 1999）、弘前市岩木山（山田, 2006）などから記録されている。山田（2010, p.286）によると低地・低山地から採集されているが個体数は少ない、また成虫は6～7月に活動し、古木などの甲虫脱出孔などを利用して巣を作り多数のチャタテムシを狩って幼虫の餌として貯えることが知られている。（山内智）

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 ヤマトコトガタバチ

学名 *Lyroda nigra japonica* Iwata

環境省：該当なし

国内では本州・四国・九州などに分布する。青森県内からはつがる市館岡（Tsuneki, 1983）と、下山（1967）がミツメトガリアナバチとして記録したつがる市平滝沼の記録（山田, 2010, p.285）が知られており、いずれも砂丘地帯の屏風山地域から記録されている。個体数は少ない。山田（2010, p.285）によると成虫は7～8月に活動し、砂地に穿孔して巣を造り、ヒシバツタを狩って幼虫の餌とする。開発等により営巣に適した環境が変わり砂地が少なくなっている。（山内智）

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 コウノスジガバチモドキ

学名 *Trypoxylon konosuense* Tsuneki

環境省：該当なし

国内では本州などに分布する。生息地も極めて限られたまれな種類である（寺山・須田, 2016）。青森県内からは、つがる市（旧、木造町）の標本がParatypeに指定されている（Tsuneki, 1968；常木, 1968）。山田（2010, p.286）によると成虫は8月に活動し、ススキの枯れ茎の髓内に営巣して、クモを狩ることが知られている。（山内智）

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 シモヤマジガバチモドキ

学名 *Trypoxylon shimoyamai* Tsuneki

環境省：該当なし

国内では北海道・本州などに分布している。北方系のハチであるが、確認されている生息地は限られ全国的にも個体数の少ない種である（山田, 2010, p.286）。本種は十和田をタイプ産地に記載されたギングチバチの仲間である（Tsuneki, 1956）。他に青森県内からは平川市十和田山地（常木・下山, 1963）、平川市滝ノ沢（阿部, 1980）などから記録されている。山田（2010, p.286）によると、成虫は9月に活動し、竹筒などに巣を作り、オニグモ科やコガネグモ科などのクモを狩ることが知られている。（山内智）

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 エゾアリマキバチ

学名 *Pemphredon morio* Van der Linden

環境省：該当なし

国内では北海道・本州などに分布し、本州では青森県などから確認されている。青森県内からは黒石市福民・境松（山田, 1998）などから記録されている。山田（2010, p.286）によると青森県では数少ない南限種で、低地に生息しており、記録は少ない。詳しい生態は不明であるが、本種が属するアリマキバチ属はアブラムシ類を狩り、朽木中に営巣することが知られている（寺山, 2012）。（山内智）

**ハチ目 ギングチバチ科****D**

和名 マエダテツチスガリ

学名 *Cerceris pedetes* Kohl

環境省：準絶滅危惧

国内では北海道・本州などに分布するが、記録がある県は少ない。河川や海岸などの砂地などに営巣するが、護岸などで個体数が減少している（環境省, 2015）。青森県内からは平川市十和田山地（常木ら, 1964）、平川市温川（飯田, 1964）、大鰐町阿闍羅山（山田, 1996）、黒石市虹の湖、平川市大落前（山田, 1999）、西目屋村川原平（山田, 2010）などから記録されている。山田（2010, p.287）によると県内での分布域は狭く、個体数も非常に少ない。河川周辺の砂地に営巣しゾウムシ類を狩ることが知られている。（山内智）

**ハチ目 ミツバチ科****D****和名** ヤスマツコンボウハナバチ**学名** *Lipotriches yasumatsui* (Hirashima)**環境省：該当なし**

国内では本州・九州などに分布している。青森県内では弘前市岩木山、平川市碓ヶ関、青森市稲山（山田, 1997）などから記録されているが、極めて個体数の少ない種である。山田（2010, p.287）によると成虫の発生時期は8月上旬から9月中旬で、地中に深く穴を掘って営巣する。ススキなどイネ科の花から花粉を集める。また雄はハッカの花からも採取することが知られている。（山内智）

**ハチ目 ミツバチ科****D****和名** シロスジフデアシハナバチ**学名** *Dasypoda japonica* Cockerell**環境省：該当なし**

国内では北海道・本州・九州などに分布している。青森県内からは六ヶ所村尾鮫沼、五所川原市十三湖（山田, 1997）などから記録され、生息地は極めて限られている（山田, 2010, p.287）。本種は砂地に穴を掘って営巣するが、キク科植物に好んで訪れ、花粉を運んで花粉塊を作る。土地開発などで生息に適した環境が減ってきている。（山内智）

**ハチ目 ミツバチ科****D****和名** クズハキリバチ**学名** *Megachile pseudomonticola* Hedicke**環境省：情報不足**

国内では本州・九州などに分布している。生息地も限られ個体数も減ってきている（環境省, 2015）。青森県内からは弘前市百沢、黒石市長崎（山田・棟方, 1996）などから記録されている。古木洞・竹筒やカミキリムシ等の脱出抗に営巣するが、育房の仕切りに切って運んだクズの葉を使う。山田（2010, p.287）によると、黒石市の事例では古いリンゴ樹の空洞部に貯まった虫糞などによる腐熟土中に、クズの葉片を運んで育房を造っていたのが観察された。（山内智）

**ハチ目 ミツバチ科****D****和名** カグヤキマダラハナバチ**学名** *Nomada kaguya* Hirashima**環境省：該当なし**

国内では本州・四国・九州などに分布する。本種は青森県（Mitai & Tadauchi, 2007）にも分布し、弘前市岩木山（山田, 1999）などから記録されている。本種はヤスマツコンボウハナバチ（弘前市岩木山、平川市碓ヶ関、青森市稲山に分布記録）に労働寄生している（多田内・村尾, 2014）。森林よりも開けた草地に生息しているが、開墾などによって生息に適した環境が少なくなっている。（山内智）

**ハチ目 ミツバチ科****D****和名** オカモトキマダラハナバチ**学名** *Nomada okamotonis* Matsumura**環境省：該当なし**

国内では北海道・本州・九州などに分布している。青森県内からは弘前市茂森町・湯段（山田, 1999）、三沢市根井（山田, 2012）などから記録されているが生息地・個体数共に少ない。山田（2010, p.288）によると成虫は7～8月頃活動し、寄主は明るい草地に生息し、粘土質の裸地に穴を掘って巣を作ることが知られている。本種はヒロズキバナヒメハナバチ（県内では岩木山等各地に記録）に労働寄生する。草地や裸地の開発等から適した生息環境が少なくなっている。（山内智）

**ハチ目 ミツバチ科****D****和名** ニセハイイロマルハナバチ**学名** *Bombus pseudobaicalensis* Vogt**環境省：該当なし**

国内では北海道・本州北部などに分布している。北方系の種類で、北海道でも道東、道央などの低地などには多いが函館市は少ないという（松浦, 2004）。青森県内からは、Mt. kinashi（Ito & Munakata, 1979）、五戸町長下（山田, 2000）などから記録されている。日当たりの良い場所を好み、草地などの地中に営巣するが、県内で確認された生息地・個体数はともに少ない。農耕地などが放置され灌木が入り込んで、訪花植物が少なくなることが生息を脅かすことになる。（山内智）

**ハチ目 ミツパチ科****D**

和名 ハイイロヒゲナガハナバチ

学名 *Eucera sociabilis* Smith

環境省：該当なし

国内では北海道・本州などに分布している。青森県内からは深浦町（山田, 1999）などから記録されているが、生息記録は少ない。山田（2010, p.288）によると成虫は6～7月に現れ、グミ・クサフジなどの花を訪れ、地面に穴を掘って巣を作るが、詳しい生態は不明である。

アカクローバーの授粉を媒介する訪花蜂の一種でもある。今後の明細な生態解明が望まれる。

(山内智)

**ハエ目 クロバエ科****D**

和名 カエルキンバエ

学名 *Lucilia chini* Fan

環境省：情報不足

国内では青森から京都などにかけて、本州に分布している。生息地、個体数とも限られ少なくなっている（徳本, 2000；伊東・古田, 2009；環境省, 2015）。本種は水田や河岸で見つがっているが（Kano.R. & S.Shinonaga, 1968）、青森県内からも同様に中泊町岩木川、六ヶ所村高瀬川（小川原湖）などの河岸から記録されている（伊東・古田, 2009）。ヨーロッパではカエルの生体に寄生することが確認されているが、国内ではその明細な観察記録はされていない（徳本, 2000）。水田や河川整備・農薬散布などで生息環境が変わってきており、本種の生息に影響している。（山内智）

**チョウ目 ボクトウガ科****D**

和名 ハイイロボクトウ

学名 *Pharagmataecia castaneae* (Hübner)

環境省：準絶滅危惧

国内での分布は、北海道・本州・四国・九州などで、湿地性の蛾でその分布は局地的である（環境省, 2015）。青森県内では、黒石市（石村・佐藤, 1941）、つがる市富蒔・五所川原市十三湯（下山ら, 1957）、つがる市平滝沼（工藤, 1983；亀田・山内, 2004）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999；阿部ら, 2005）、つがる市ベンセン沼（亀田・山内, 2002, 2004）、三沢市小田内沼（阿部ら, 2004）、鱒ヶ沢町長沼（亀田・山内, 2005）、東通村大利（亀田・山内, 2015）、東通村野牛（亀田・山内, 2016, 2019）などで記録されている。食草は湿地に繁茂するヨシで、湿地開発等で生息環境が悪化しており、今後生息数の減少が危惧される。（山内智）

**チョウ目 ツトガ科****D**

和名 ヒメキテンシロツトガ

学名 *Calamotropha fulvifusalis* (Hampson)

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州（東北・北陸地方など）の湿地で、少ない種類である。青森県内ではつがる市大滝沼（工藤, 1983）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2004）、東通村大利（佐藤, 2018）などの湿地から記録されている。この他に青森県内には多数の湿地帯が点在しており、今後更に生息地が確認される可能性が高く、今後の湿地保全と調査が待たれる。（山内智）

**チョウ目 ツトガ科****D**

和名 モリオカツトガ

学名 *Chrysoteuchia moriokensis* (Okano)

環境省：準絶滅危惧

国内では北海道南部・本州などの湿地に局地的に分布するが、生息地は少ない（環境省, 2015）。青森県内では東通村大利（佐々木, 1993）などから記録されている。湿地開発等で生息環境が悪化してきている。青森県内には多数の湿地帯が点在しており、今後更に生息地が確認される可能性が高く、今後の湿地保全と調査が望まれる。（山内智）

**チョウ目 カギバガ科****D**

和名 マンレイカギバ

学名 *Microblepsis manleyi* (Leech)

環境省：該当なし

国内では、本州・四国・九州などに分布しているが、個体数は少ない。青森県内からは古くから知られていて八甲田山湯ノ澤（渡邊, 1935）、青森市駒込（石村・佐藤, 1941）から記録されていた。その他に深浦町十二湖（葛西・佐藤, 1981）と生息確認地は少ない。本種は県内に広く分布しているコマツカを食草（井上ら, 1982；中島, 2011）としていることから、今後の調査で更に生息地が確認される可能性が高い。

(山内智)

**チョウ目 カギバガ科****D**

和名 ナガトガリバ

学名 *Euparyphasma maxima* (Leech)

環境省：該当なし

国内では、本州・四国・九州などに分布するが、東北地方では個体数が少ない（中島, 2011）。青森県内では南部町名久井岳、深浦町十二湖（佐藤・葛西, 1975）、田子町花木（山内, 2011）などから記録されている。本種は県内に広く分布しているヤマボウシやミズキを食草（井上ら, 1982；中島, 2011）にしており、今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。（山内智）

**チョウ目 シャクガ科****D**

和名 ヨツモンマエジロアオシャク

学名 *Comibaena procumbaria* (Pryer)

環境省：該当なし

国内では、本州・四国・九州などに分布するが、東北地方では生息地は少ない（井上ら, 1982；中島, 2011）。青森県内からは深浦町十二湖（葛西・佐藤, 1977）、野辺地町烏帽子岳（葛西, 1989c）、むつ市薬研（亀田・山内, 2017）などから記録されている。多くの食草が知られているが、県内での食草は確認されていない。今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。

（山内智）

**チョウ目 シャクガ科****D**

和名 ギフウスキナミシャク

学名 *Idiotephria debilitata* (Leech)

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州・四国・九州などで、生息地は限定される（井上ら, 1982；中島ら, 2011）。青森県内では、青森市朝日山（佐藤, 1970）、青森市高田・新城（葛西, 1989a）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2005）、青森市月見野（亀田・山内, 2006）、つがる市平滝沼（亀田・山内, 2007）などから記録されている。本種の食草はカシワ、コナラで、青森県内の生息地もカシワやコナラの林である。開発等では環境保全の配慮が必要である。（山内智）

**チョウ目 シャクガ科****D**

和名 ヒメウラベニエダシャク

学名 *Heterolocha laminaria sutschanska* Wehrli

環境省：該当なし

国内では、北海道・本州などに分布し、本州では青森県、岩手県などで確認されている（土井, 2005；佐藤, 2011）。青森県内では、青森市茂木野・矢田（葛西・佐藤, 1980）、青森市高田・滝沢、東通村大利（葛西, 1988a）、青森市雲谷（亀田・山内, 2006）、むつ市薬研（亀田・山内, 2017）、東通村野牛（亀田・山内, 2018）などから記録されている。生態等は未知だが、今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。

（山内智）

**チョウ目 シャクガ科****D**

和名 シラナミナミシャク

学名 *Glaucorhoe unduliferaria* (Motschulsky)

環境省：該当なし

国内では、北海道・本州などに分布しているが、少ない種類である。青森県内では田子町白萩平（葛西, 1989a）などから採集されている。本種の詳しい生態等は未知であるが、今後の調査による本種の更なる生息地の確認とその生態の解明が望まれる。

（山内智）

**チョウ目 シャクガ科****D**

和名 キジマソトグロナミシャク

学名 *Eulithis pyropata* (Hübner)

環境省：該当なし

本種の分布は国内では、北海道・本州・四国・九州などで、生息地は局地的で個体数も少ない（井上ら, 1982；中島ら, 2011）。青森県内では、鱒ヶ沢町二ツ森（高橋, 1988）、青森市滝沢、十和田市焼山・子ノ口（葛西, 1989a）などから記録されている。本種の食草はブナやミズナラの老木に着生するヤシャビシャク（中島ら, 2011）で、青森県レッドデータブック掲載種でもある。食草を含めた生息地の環境保全が必要である。（山内智）

**チョウ目 シャクガ科****D**

和名 トビスジトガリナミシャク

学名 *Zola terranea* (Butler)

環境省：該当なし

国内では、本州・四国・九州などに分布するが、採集記録は少ない。青森県内では、つがる市平滝沼(葛西, 1989a)などから記録されている。本種の食草はセンニンソウで、青森県内でも海岸近くの林に多い植物である。沿岸部の開発には環境保全の配慮が必要である。今後新たに生息地が確認される可能性がある。(山内智)

**チョウ目 シャクガ科****D**

和名 ホソスジハイイロナミシャク

学名 *Hydrelia gracilipennis* Inoue

環境省：該当なし

国内では、北海道・本州の亜高山帯に生息する種類で、産地が限定される(中島ら, 2011)。青森県内では、十和田市睡蓮沼(山内・亀田, 1999)、青森市笠松峠(亀田・山内, 2010)などから記録されている。本種の詳しい生態等は未知である。八甲田山系地域からの更なる生息地が確認される可能性があり、今後の調査が待たれる。(山内智)

**チョウ目 シャクガ科****D**

和名 カバシャク

学名 *Archiearis parthenias* (Linnaeus)

環境省：該当なし

褐色の地に白紋の前翅とオレンジ色の後翅を持つ。成虫は4月下旬～5月に姿を見せ、晴天の昼間活発に飛び、ヤナギ類の花などに吸蜜する。

県内では青森市田代高原(佐藤, 未発表)・大鰐町高野新田(横山, 2003)などの記録がある。幼虫はダケカンバなどのカバノキ類につく。本県での詳しい生活史の解明が待たれる。

(佐藤博)

**チョウ目 スズメガ科****D**

和名 コウチスズメ

学名 *Smerinthus tokyonis* Matsumura

環境省：該当なし

後翅に目立つ眼状紋がある小型のスズメガ。成虫は6月～8月に出現する。本州・四国・九州に分布する。

本県の記録は津軽湯の沢(佐藤・葛西, 1981)・蔦ダム(佐藤, 未発表)の記録があるが少ない種である。食樹はツツジ科が知られており、青森市街地の植栽のドウダンツツジで発生した例もある(佐藤, 未発表)。いずれにしても生息環境についての調査が必要である。(佐藤博)

**チョウ目 スズメガ科****D**

和名 スキバホウジャク

学名 *Hemaris radians* (Walker)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

国内での分布は、北海道・本州・四国・九州などで、各地で減少し生息地が局地的である(環境省, 2015)。青森県内では黒石市落合(齋藤, 1935)、青森県(山谷, 1939)、黒石市、三戸郡(石村・佐藤, 1941)、七戸町榎林(佐藤・葛西, 1981)などで記録されている。本種の食草は良く見かけるオトコエシ・アカネなどであるが開発等で生息環境が狭まれている。今後の調査が待たれる。(山内智)

**チョウ目 スズメガ科****D**

和名 イブキスズメ

学名 *Hyles gallii* (Rottemburg)

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州・九州などの高原で、生息地はきわめて局地的で少ない(井上ら, 1982; 松浦, 1992)。青森県内では青森県(齋藤, 1935)、黒石市(石村・佐藤, 1941; 佐藤・葛西, 1981a)、青森市朝日山(佐藤・葛西, 1975)、野辺地町烏帽子岳(佐藤・葛西, 1981)などが知られている。本種の食草はカワラマツバ、ヤナギランなどである(松浦, 1992)。今後の詳しい調査で更に生息地の確認が期待される。(山内智)

**チョウ目 スズメガ科****D**

和名 ヒメスズメ

学名 *Deilephila askoldensis* (Oberthür)

環境省：準絶滅危惧

国内での分布は、北海道・本州・四国・九州などで、草原や河川敷などで見られるが、生息地は局地的である（矢野ら, 2011；環境省, 2015）。青森県内では青森市朝日山（佐藤, 1970）、八戸市八幡・田面木（富岡, 1974）、つがる市高山稲荷・屏風山、南部町名久井岳、平川市軍馬平（佐藤・葛西, 1981）、東通村尻労（福田ら, 2001）、つがる市ベンセ沼・大滝沼（亀田・山内, 2004）などで記録されている。食草はカワラアツバなどであるが、開発等で生息環境が悪化してきている。（山内智）

**チョウ目 シャチホコガ科****D**

和名 ヘリスジシャチホコ

学名 *Neopheosia fasciata* (Moore)

環境省：該当なし

国内での分布は、本州・四国・九州などで、関東以北では少ない種類である（井上ら, 1982）。青森県内では東通村大利（葛西, 1985）などから記録されている。本種の食草はサクラ類・クリ等（小林, 2011）などである。盛岡市では多数確認されており（土井, 2005）、青森県でも今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。（山内智）

**チョウ目 ドクガ科****D**

和名 スゲドクガ

学名 *Laelia coenosa sangaica* Moore

環境省：準絶滅危惧

国内での分布は北海道・本州で、湿地に生息する蛾である。その生息地は局地的である（環境省, 2015）。青森県内では、青森市、八戸市（石村・佐藤, 1941）、つがる市屏風山、東通村大利（佐藤, 1988）、三沢市仏沼（オオセツカの生態環境研究グループ, 1999）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2007）、東通村野牛（亀田・山内, 2016）などから記録されている。本亜種の食草はヨシ・ヒメガマなどの湿地に繁茂する植物である。湿地の開墾や造成などで、生息に適した環境が少なくなっている。（山内智）

**チョウ目 スズメガ科****D**

和名 ミスジピロードスズメ

学名 *Rhagastis trilineata* Matsumura

環境省：該当なし

本種は、本州・四国・九州などに分布しているが、生息地は少ない（井上ら, 1982）。青森県内からは十和田市蔦（佐藤・葛西, 1981a）、鱒ヶ沢町二ツ森（下山ら, 1991）などで記録されている。本種はアジサイ科を食草としているが青森県内での幼虫の記録は無い。今後の調査で県内での食草の特定が望まれる。更に新しい生息地が確認される可能性もある。（山内智）

**チョウ目 シャチホコガ科****D**

和名 アマギシャチホコ

学名 *Eriodonta amagisana* (Marumo)

環境省：該当なし

国内では、本州・四国・九州などに分布するが、少ない種類である。青森県内では十和田市蔦（佐藤・葛西, 1978）、新郷村迷ヶ平（亀田・山内, 2006）などの八甲田山系から記録されている。本種の食草はブナで、早春にブナ林で成虫が見られことが知られている。青森県での生息地もブナ林であるが、白神山地、下北半島のブナ林では記録がなく、今後のブナ林での詳しい調査が望まれる。（山内智）

**チョウ目 コブガ科****D**

和名 キタオオコブガ

学名 "*Meganola*" *gigantula* (Staudinger)

環境省：該当なし

国内では、北海道・本州などに分布するが、本州では青森県などから記録されている（佐々木, 2011）、少ない種類である。青森県内では青森市新城・滝沢・矢田（葛西, 1989b）などから記録されている。本種の詳しい生態などについては不明である。今後の詳しい調査で、本種の分布や生態などについての解明が望まれる。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ウゴウンモンツマキリアツバ

学名 *Pangrapta suaveola* Staudinger

環境省：該当なし

国内では、東北地方などに分布しており、その生息地は局地的である（井上ら, 1982；岸田, 2011）。青森県内では、青森市新城・矢田、東通村大利（葛西, 1988a）、鱒ヶ沢町長沼（亀田・山内, 2005）、弘前市岩木山柴柄沢（亀田・山内, 2008）、弘前市瑞穂（亀田・山内, 2012）、田子町見附森（山内, 2014）などで記録されている。本種の詳しい生態などについては不明である。今後の詳しい調査で、本種の分布や生態などについての解明が望まれる。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 カサイヌマアツバ

学名 *Hypetrocon perfractalis* (Bryk)

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道南部・本州北部などで、沼沢地や草原に分布する蛾である（大和田, 2011）。青森県内では1981・1982年につがる市平滝沼湖畔などで採集されているが（Owada, 1988, 1992）、同沼沢地以外の記録は見られない。本種の詳しい生態などについては不明であるが、青森県内各地には同様の沼沢地があり、更なる調査で生息地が確認される可能性があり、今後の調査が待たれる。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 アルプスギンウワバ

学名 *Syngrapha ottolenguii* (Dyar)

環境省：該当なし

国内では、北海道・本州などの高山地帯のハイマツ地帯に生息する種類で、高山蛾と呼ばれている。青森県内では八甲田山（神保, 1984）、八甲田山仙人岱（工藤, 1989）、八甲田山大岳（神保ら, 1991；葛西, 1986）などの八甲田山の高山帯から記録されている。本種の食草は高山に分布するコケモモ・ガンコウランである。八甲田山系以外では本種は確認されていない。青森県内の高山帯での分布調査が待たれる。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ハスオビアツバ

学名 *Traudinges obliqua* (Staudinger)

環境省：該当なし

国内では北海道・本州（中部地方以北）の湿地帯などに局地的に分布するが、本州での記録は少ない。青森県内ではつがる市平滝沼（葛西, 1983；亀田・山内, 2003）、つがる市屏風山（工藤, 1885）、東通村大利、六ヶ所村鷹架沼（葛西, 1988b）、三沢市仏沼（オオセッカの生息環境研究グループ, 1999；阿部ら, 2001, 2005）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2004）、東通村野牛（亀田・山内, 2016）、むつ市薬研（亀田・山内, 2017）の湿地帯などから確認されている。各地の湿地帯での調査で詳しい分布調査が待たれる。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 フシキキシタバ

学名 *Catocala separans* Leech

環境省：該当なし

国内では本州・四国・対馬で得られているがいずれも産地は局地的。東北地方では岩手県盛岡市・福島県南会津町（旧館岩村）などが産地として知られている。

本県では弘前市（旧岩木町百沢、松野, 未発表）・浪岡町大釈迦（工藤, 2016）の記録がある。食樹は一般にクヌギだが、クヌギが分布していない本県では何を食樹としているのか。いずれにしても個体数が少なく今後の情報収集が必要である。

(佐藤博)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 オオモリケンモン

学名 *Acronicta omorii* (Matsumura)

環境省：該当なし

国内では、北海道・本州に分布するが、少ない種類である（井上ら, 1982）。青森県内では、青森市朝日山（佐藤・葛西, 1975）などからの記録がある。本種の詳しい生態などについては不明であるが、隣接する岩手県では各地で記録されている（土井, 2005）。今後、青森県でも更に生息地が確認される可能性があり、里山などでの分布と生態の詳しい調査が待たれる。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 タテスジケンモン

学名 *Simyra albovenosa* (Goeze)

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州などで、本州では青森県以外あまり知られていない（枝ら, 2011）。少ない種類である。青森県内では、小川原湖、下北半島（工藤, 1985）、東通村小田野沢・大利（葛西, 1985）、六ヶ所村鷹架沼（葛西, 1987）、東通村野牛（佐々木, 1993）、三沢市仏沼（オオセッカの生息環境研究グループ, 1999）、六ヶ所村内沼（阿部ら, 2004）などで記録されている。本種の食草はクサヨシなどが知られている。今後まだ確認されていない津軽半島などでの詳しい調査が待たれる。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ネジロシマケンモン

学名 *Cranionycta oda* (Lattin)

環境省：該当なし

国内での分布は、本州などで、生息地は局地的で大変少ない種類である（枝ら, 2011；岩手県, 2014）。青森県内では十和田市焼山（葛西, 1987）などから記録されている。本種の生態などについては不明であるが、今後の調査による本種の分布とその詳しい生態の解明が待たれる。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ギンモンセダカモクメ

学名 *Cucullia jankowskii* Oberthür

環境省：準絶滅危惧

国内での分布は、北海道・本州・九州などに生息しているが、生息地は局地的で少ない（井上ら, 1982；四方, 2011）。青森県内ではつがる市屏風山、七戸町榎林（佐藤・葛西, 1981b）などで記録されている。本種の食草はヨモギ、オオヨモギで河川敷や草原で生息が確認されている（環境省, 2015）。開発で生息環境が劣悪してきており、開発での適切な環境保全が望まれる。今後の調査で更に生息地が確認される可能性が高い。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ウスハイイロケンモン

学名 *Subleuconycta palshkovi* (Filipjev)

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州・九州などで、本州では青森県以外あまり知られていない、採集例の大変少ない種類である（枝ら, 2011）。青森県内では十和田市焼山（葛西・佐藤, 1980）、十和田市十和田湖（枝ら, 2011）などで記録されている。本種の生態などについては不明であるが、今後の調査による本種の分布と生態などの詳しい解明が待たれる。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ハマセダカモクメ

学名 *Cucullia scopariae* Dorfmeister

環境省：該当なし

国内での記録が少ない希少種である。国内では1977年8月に深浦町岩崎の海岸で採集（井上ら, 1982）されたのが最初の記録である。その後、北海道利尻島で記録されている（四方, 2011）。国内での生態等については不明である。採集記録から、本種は海岸地帯に局地的に生息すると推測される。各地海岸の調査で生息地が確認される可能性があり、今後の詳しい調査が待たれる。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ヘリボシキノコヨトウ

学名 *Stenoloba oculata* Draudt

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道南部・本州・九州などで、生息地は局地的で少ない種類である（井上ら, 1982）。青森県内では十和田市蔦（杉, 1974）、むつ市川内町家の辺（亀田・山内, 2018）、むつ市大畑町小目名（亀田・山内, 2019）などで記録されている。本種の食草は山地から高山で良く見られるシラカンバ、ダケカンバである。開発などで生息環境が悪化してきており、開発での適切な環境保全が望まれる。今後更に生息地が確認される可能性が高い。

(山内智)

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ヌマベウスキヨトウ

学名 *Chilodes pacificus* Sugi

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

本種は、北海道・本州の湿地帯に分布するが、その生息地は局地的である（環境省, 2015）。青森県内では東通村大利・小田野沢（葛西, 1988c）、三沢市仏沼（阿部ら, 2001）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2004）、つがる市大滝沼（亀田・山内, 2007）、東通村野牛（亀田・山内, 2016）などで記録されている。本種の生態などについては不明である。生息地である湿地の開発での適切な環境保全と、今後の調査による生態の詳しい解明が待たれる。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 セプトモクメヨトウ

学名 *Auchmis saga* (Butler)

環境省：該当なし

国内では北海道・本州・四国・九州などに分布しているが、その生息地は少ない（井上ら, 1982）。青森県内ではつがる市高山稲荷（葛西・佐藤, 1979）、野辺地町烏帽子岳（佐藤, 1985）などの記録が知られている。本種の食草としてメギが知られているが、青森県では希産種（細井, 2018）である。食草の分布とともに、県内での生息地や生態などの詳しい調査が待たれる。

（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 シロミミチビヨトウ

学名 *Oligia leuconephra* Hampson

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州（東北地方）などである。東北地方では青森県・岩手県・秋田県・宮城県・福島県などで確認されている（枝ら, 2011）。青森県内では、つがる市屏風山（佐藤, 1985）などから記録されている。国内での生態は不明である。県内での生息地や生態などの詳しい調査が待たれる。（山内智）

（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ヒメシロテンアオヨトウ

学名 *Trachea melanospila* Kollar

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州・九州などで、その生息地は少ない（井上ら, 1982）。青森県内では、八甲田山大岳（神保ら, 1991）、十和田市子ノ口（葛西, 1988c）から記録されている。本種の食草は逸出植物であるソバなどが知られている。隣接する岩手県では多くの産地が確認（土井, 2005）されており、青森県でも八甲田山系を中心に新産地が確認される可能性があり、今後の詳しい調査が待たれる。（山内智）

（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ウスクモヨトウ

学名 *Pabulatrix pabulatricula* (Brahm)

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州（青森県・岩手県・山梨県など）などであるが、北海道では普通見られるが本州での採集記録は少なく、隣接の岩手県でも1例の記録しか無い（土井, 2005；枝ら, 2011；岩手県, 2014）。青森県内では田子町白萩平（葛西・佐藤, 1980）などから記録されている。国内での生態は不明である。県内での生息地や生態などの詳しい調査が待たれる。

（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ヨコスジヨトウ

学名 *Mesoligia furuncula* (Denis et Schiffermüller)

環境省：該当なし

国内での分布は北海道・本州で、北海道では普通にみられるが、本州では東北地方（青森県・秋田県・福島県など）などで見つかっているが少ないようである（井上ら, 1982；枝ら, 2011）。青森県内ではつがる市平滝沼（葛西, 1983）、つがる市屏風山（工藤, 1985）などで記録されている。本種の食草は海岸に見られるハマムギなどが知れており、青森県の生息地でも本種を食草としている可能性が高い。ハマムギの生える海岸での今後の詳しい調査が待たれる。（山内智）

（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ウスキモンヨトウ

学名 *Photedes fluxa* (Hübner)

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州などであるが、本州では青森県以外あまり知られていない（枝ら, 2011）。生息地は湿地帯であるが、個体数は少ない種類である。青森県内では東通村小田野沢の湿地から記録されている（山内, 2000）。本種の詳しい分布や生態は不明であるが、県内には多くの湿地帯があり、県内での生息地や生態などの詳しい調査が待たれる。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 エゾスジヨトウ

学名 *Doerriessa striata* (Staudinger)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

国内では、北海道・本州などの湿地帯に分布しているが、少ない種類である。湿地環境の指標種でもある（枝ら, 2011）。青森県内では東通村大利（葛西, 1985, 1988c；佐々木, 1993）、東通村野牛（亀田・山内, 2016）などで記録されている。本種の詳しい分布や生態は不明であるが、本州中部ではモウセンゴケが繁茂する低湿地でも見つかっている（工藤, 1985）。青森県内での低湿地帯での詳しい調査が待たれる。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 シロオビヨトウ

学名 *Hadena compta* (Denis et Chiffermüller)

環境省：準絶滅危惧

前翅は灰黒色で中央に白色の帯を表す。成虫は8月に出現する。北海道・東北地方・新潟県および本州中部地方山地の高原地帯で採集されている。

本県では屏風山や鷹架沼などで採集されている。幼虫はカワラナデシコの花や種子を食べるが、この様な地域におけるナデシコ類の減少や、鷹架沼周辺の開発は生息環境改変の危険性を有している。（佐藤博）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ホソバウスキヨトウ

学名 *Longalatedes elymi* (Treitschke)

環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州などで、本州では青森県以外あまり知られていない。本種の採集例は少なく生息地は局地的である（枝ら, 2011）。青森県内では東通村尻屋崎（杉山, 1986）などの記録がある。本種の食草は海岸のテンキグサ（ハマニンニク）が知られている。テンキグサは各地海岸に見られ、今後の調査で県内での生息地や生態などの詳しい調査が待たれる。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 ハイイロヨトウ

学名 *Parastichtis suspecta* (Hübner)

環境省：該当なし

国内では、北海道・本州（青森県・岩手県など）などに分布しているが、少ない種類である（枝ら, 2011）。青森県内では青森市萱野茶屋、十和田市焼山、平川市軍馬平（葛西, 1983）、黒石市黒森山（葛西・佐藤, 1979）、青森市魔ノ岳（佐藤, 1985）などで記録されている。本種の国内での詳しい分布や生態は不明である。本県の採集地は山地の高原などであることから、県内での高原などでの分布調査が待たれる。（山内智）

**チョウ目 ヤガ科****D**

和名 オオシラホシヤガ

学名 *Eurois occulta* (Linnaeus)

環境省：該当なし

国内では、北海道・本州中部地方以北などに分布する。特に本州での記録は少なくまれな種類である（井上ら, 1982；小林, 2011）。青森県内ではつがる市亀ヶ岡で記録されている（松野, 1987）。本種の北海道での観察では、イネ科・広葉草本の雑草地から得られた幼虫が、タンポポ・白クローバをよく食べたという（鳥倉, 1985）。このことから青森県内の同様な植生の雑草地での詳しい調査で、更に生息地が確認される可能性がある。（山内智）

## ③引用文献

- 阿部 東 1970. 青森県のオサムシ. Yamase (青森県立五所川原農林高等学校自然科学部), 9 : 23-28.
- 阿部 東 1972. 岩木山. 月刊むし, 16 : 5-7.
- 阿部 東 1974. 青森県産天牛類の覚え書き, 甲虫ニュース, 31/32 : 13-14.
- 阿部 東 1976. 青森県におけるオオヒョウタンゴミムシの採集記録. Elytra, 4(2) : 35.
- 阿部 東 1979. ニトベギングチ. ケルクス, 12 : 16-17.
- 阿部 東 1980. 青森県. 日本の重要な昆虫類 (環境庁). pp.1-56.
- 阿部 東 2008. 青森県におけるゲンゴロウ類3種の採集記録. Cellastrina, 43 : 37.
- 阿部 東 2011. カワラハンミョウの日本海側の採集記録, Cellastrina, 46 : 46.
- 阿部 東 2013. 青森県産ホソガムシ科, ガムシ科の記録. Cellastrina, 48 : 26-27.
- 阿部 東・今 純一・三上春文・山内 智 2001. 小川原湖周辺の無脊椎動物(1). 青森県立郷土館調査研究年報, 25 : 9-14.
- 阿部 東・今 純一・三上春文・山内 智 2002. 小川原湖周辺の無脊椎動物(2). 青森県立郷土館調査研究年報, 26 : 67-70.
- 阿部 東・今 純一・三上春文・築瀬友宏・山内 智 2004. 小川原湖周辺の無脊椎動物(4). 青森県立郷土館調査研究年報, 28 : 39-46.
- 阿部 東・今 純一・三上春文・築瀬友宏・山内 智 2005. 小川原湖周辺の無脊椎動物(5). 青森県立郷土館調査研究年報, 29 : 11-18.
- 阿部 東・小田良孝・工藤貢次 2002. ゲンゴロウ科 (Dytiscidae) 3種の染色体. Jpn. J. Ent. (N.S.), 5(4) : 145-154.
- 阿部 東・藤田 宏 1976. 青森県下の興味深いカミキリ2種. Elytra, 4(2) : 39.
- 阿部 東・松井亀彦 1960. 下北半島動物採集目録. Praeda, 1 : 34-50.
- 阿部 東・山内 智 1987. 昆虫. 白神山地自然環境調査報告書 (赤石川流域). 青森県. pp.104-187.
- 阿部 東・山内 智 1989. 昆虫. 白神山地自然環境調査報告書 (大川・暗門川流域). 青森県. pp.84-144.
- 阿部行伸 1969. 青森県東南部の蝶類. 著者自刊. 214pp.
- 秋山美文 2004. 広島県のエゾコガムシの記録. 甲虫ニュース, 145 : 19-20.
- 安藤一次 2012. 仏沼におけるベニモンマダラとルリハダホソクロバの記録. おおせっからんど年報, 3 : 45-48.
- 安藤一次 2013. 青森県仏沼地域におけるベニモンマダラの記録. 月刊むし, 503 : 18-20.
- 青森県 2006. ウシガエル, オオクチバス, アメリカザリガニ. 青森県外来種対策学術調査報告書—青森県外来種リスト—. p.57, p.58, p.86.
- 青森県 1993. 南八甲田山地総合学術調査報告書. 238pp.
- 青森県 2010. 青森県の希少な野生生物—青森県レッドデータブック (2010年改訂版) —. 335pp.
- 青森県立郷土館 1988. 赤石川流域自然調査概要(2). 青森県立郷土館調査研究紀要, 12 : 3-60.
- 青森県教育委員会 1972. むつ小川原開発地域天然記念物調査報告書. 青森県天然記念物調査報告書 第1集, 61pp.
- 青森県農林水産部畜産課 (編) 2019. 青森県の畜産. 52pp.
- 青森県生物学会八戸支部編集部 1989. 笹原氏が南郷村に寄附した蛾の標本. 青森県生物学会八戸支部会報, 24 : 1-2.
- 青森市 1994. 青森市雲谷周辺の自然. 295pp.
- 荒木 哲 1995. キベリマルヒサゴコメツキを本州北端で採集. 月刊むし, 287 : 37-38.
- 荒木 哲 2001. 六ヶ所村でのアカガネオサムシの記録. Cellastrina, 36 : 92.
- 朝比奈正二郎 1988. 日本産ゴキブリ分類ノートXVII. 衛生動物, 35(1) : 53-62.
- 朝比奈正二郎 1992. 日本産ゴキブリ類. 中山書店, 東京. 253pp.

- Bates, H. W. 1883. Supplement to the geodephagous Coleoptera of Japan, chiefly from the collection of Mr. George Lewis, made during his second visit, from February, 1880 to September, 1881. Trans. Ent. Soc. London, 1883 : pp.205-290.
- 千葉瑞穂・村上直樹・佐藤 守 1966. 戸来の蝶相. 青森昆虫研究会, 42pp.
- Chûjô, M. 1955. Erotylid-Beetle of Aomori Prefecture, collected by Mr. K. Shimoyama (III). Entom. Rev. Japan, 6(6) : 43-44.
- Chûjô, M. 1969. Erotylidae. Fauna Japonica. Academic Press of Japan. 316pp.
- Cobben, R. H. 1985. Additions to the Eurasian saldid fauna, with a description of fourteen new species (Heteroptera, Saldidae). Tijdschrift voor Entomologie 128(4) : 215-270.
- ダム水源地環境整備センター 1997. 陸上昆虫類調査. 平成8年度高瀬川水環境現況総合調査業務報告書Ⅱ, pp.311-321.
- 土井信夫 2005. 岩手県の大蛾類, 付蝶類リスト. 著者自刊. 240pp.
- 枝 恵太郎 2011. ヤガ科ノシメコヤガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. p.303.
- 枝 恵太郎・柳田慶浩 2011. ヤガ科ケンモンヤガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.295-303.
- 枝 恵太郎・四方圭一郎 2011. ヤガ科キリガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.323-367.
- 遠藤俊二・林 正美 1987. ニトベツノゼミの新産地. Rostria, 38 : 570.
- 江崎悌三・一色周知・六浦 晃・井上 寛・岡垣 弘・緒方正美・黒子 浩 1975. 原色日本蛾類図鑑(下)改訂新版3刷. 保育社, 大阪. 304pp., pls 65-136.
- 江崎悌三 1975. ヤママユガ科. 原色日本蛾類図鑑(下)改訂新版3刷. 保育社, 大阪. pp.223-229.
- 藤本博文 2013. 福岡県におけるエチゴトックリゴミムシの記録. Sayabane, 10 : 27.
- 福田 彰 1940. 数種の日本産金花虫に就いて. 日本の甲虫, 3(2) : 90-94.
- 福田 彰 1956. 青森県産ジンガサハムシ亜科について. 進化, 8(3/4) : 9-11.
- 福田 彰 1969a. 三八地方の甲虫(1). 青森県生物学会八戸支部研究資料, 10 : 1-4.
- 福田 彰 1969b. 三八地方の甲虫(2). 青森県生物学会八戸支部研究資料, 12 : 1-4.
- 福田 彰 1970. ルイヨウボタンを食草とするオオニジュウヤホシテントウ群の未記録の一型について. Kontyû, 38(4) : 348-352.
- 福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1992. 白神山地自然調査概要(2)昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 16 : 21-36.
- 福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1993. 白神山地自然調査概要(3)昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 17 : 34-56.
- 福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1994. 白神山地自然調査概要(4)昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 18 : 15-25.
- 福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1995. 白神山地自然調査概要(5)昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 19 : 18-32.
- 福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1996. 昆虫・蜘蛛. 白神山地の自然. 青森県立郷土館. pp.53-103.
- 福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1997. 下北丘陵自然調査概要(2)無脊椎動物. 青森県立郷土館調査研究年報, 21 : 19-27.
- 福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 1998. 下北丘陵自然調査概要(3)無脊椎動物. 青森県立郷土館調査研究年報, 22 : 16-25.
- 福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・今 純一・山内 智 2001. 下北丘陵の無脊椎動物. 下北丘陵の自然. 青森県立郷土館. pp.73-100.
- 福田 彰・奈良典明 1952. 青森県産はんみょう科について - 青森県の昆虫(1) -. 進化, 4(2) : 11-15.

- 福田 彰・山田雅輝 1955. 青森県産スズメバチ科(1)について - 青森県の昆虫(X) - . 進化, 7(3/4) : 8-9.
- 福田 進 1984. 八戸と昆虫. 八戸市教育委員会. 56pp.
- 福田 進 1988. 根城の自然と虫たちの60年. わたしたちの根城 (根城地区連合町内会編). pp.52-54.
- 福田 進 1990. 青森県博物総目録昆虫編について(Ⅲ). *Celastrina*, 24 : 14-16.
- 福島正三 1968. ハエトリリボン, マレイズトラップおよびステッキネット3法によって調査された八甲田山地域における昆虫相. 各種陸上生態系における二次生態構造の比較研究 (昭和42年度研究報告). pp.126-172.
- 古川晴男 1928. 昆虫夜話. 自然研究, 3 : 44-48.
- 古木 誠 2017. 写真で見る青森県におけるルリハダホソクロバの生態. 青森の蝶, 26 : 67-74.
- 五所川原農林高校自然科学部 1966. 十二湖昆虫採集記録. やませ, 6 : 9-66.
- 五所川原農林高校自然科学部 1970. 中山山脈昆虫リスト. Yamase, 9 : 40-55.
- Habu, A. 1958. One new Bembidion-species from North Japan. *Kontyû*, 26 : 64-67.
- Habu, A. 1962. Chalcididae, Leucospididae and Podagrionidae. *Fauna Japonica*. Academic Press of Japan. 244pp., 19pls.
- 半田宏伸 2017. 埼玉県内におけるミヤマツヤセイボウ *Philoctetes monticola* (Tsuneki, 1975) の初記録と産卵に関する知見. 埼玉県立自然の博物館研究報告, 11 : 55-56.
- 羽田義任 1989. 福井県のハナバチ上科について(2). 福井虫報, 4 : 11-19.
- 原子 保 1992. 十和田市に棲息するコシアキトンボについて. *Celastrina*, 27 : 128.
- Hasegawa, T. & K. Odagiri 2018. A new subspecies of *Japonica (Yuhbae) onoi* Murayama, 1953 (Lepidoptera: Lycaenidae) from Fukushima, Japan. *Butterflies*, 77 : 25-33.
- Hayashi, F. & S. Suda 1995. Sialidae (Megaloptera) of Japan. *Aquatic Insects*, 17 : 1-15.
- Hayashi, M 1968. Studies on Cerambycidae from Japan and its Adjacent Regions (Col.), XV. *Ent. Rev. Japan*, 10(1/2) : 20-28.
- 林 文男 1995. センプリの分類を一段落させて. 兵庫陸水生物, 46 : 1-24.
- 林 成多 2004. 総説 日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, 7 : 29-126.
- 林 成多 2006. 日本産ネクイハムシ亜科の分布記録(2), ネクイハムシ属・キロンクイハムシ属. ホシザキグリーン財団研究報告, 9 : 151-192.
- 林 成多 2012. 日本のネクイハムシ. むし社, 東京. 94pp.
- 林 成多・初宿成彦 2003. 大阪市立自然史博物館所蔵のゲンゴロウ類標本, 特に希少種および絶滅危惧種について. 大阪市立自然史博物館研究報告, 57 : 11-20.
- 林 成多・八木 剛 2000. 日本におけるエゾコガムシの分布. 甲虫ニュース, 132 : 7-8.
- 林 正美 2003. ヒメミズギワカメムシの秋田県からの発見および長翅型の記録. *Rostria*, 51 : 21-23.
- 林 正美・遠藤俊二 1984. ニトベツノゼミについての新知見. *Rostria*, 36 : 487-493.
- 林 正美・遠藤俊二・関口 宏・岩間健一・中野雄一・佐竹謙太郎 1983. ニトベツノゼミの生態および脱皮殻. *Rostria*, 35 : 451-459.
- 橋爪秀博 1994. タガメのすべて - 水生動物との共生を願って -. トンボ出版, 大阪. 32pp.
- 樋口 誠 1993. ゲンゴロウモドキ青森県の記録. 月刊むし, 264 : 38.
- 樋口 誠・丸山良博 1995. 猛暑で極端に減少・小型化したマークオサムシ. 月刊むし, 291 : 34.
- 平嶋義宏・森本 桂 2008. 新訂 原色昆虫大図鑑 Ⅲ. 北隆館, 東京. 654pp.
- 平嶋義宏・森本 桂・多田内 修 1989. 昆虫分類学. 川島書店, 東京. 597pp.
- 平山修次郎 1936. オオチャイロハナムグリ. 虫の世界, 1(5/6) : 17.
- 弘前高等学校生物クラブ 1953. 昆虫. 青森県下北郡左京沼調査報告. *Blakiston*, 1(3) : 12-14.
- 弘前高等学校生物クラブ 1957. 昆虫. 青森県岩木川生物調査報告. *Blakiston*, 7 : 18-23.
- 弘前高等学校生物クラブ 1965. 昭和38年度夏坂生物調査旅行報告. *Blakiston*, 11 : 3-10.

- 日浦 勇 1967. 日本産水棲・半水棲半翅類の分布の研究Ⅰ. 大阪市立自然科学博物館研究報告, 20: 65-81.
- 日浦 勇 1968. 日本産水棲・半水棲半翅類の分布の研究Ⅱ. 大阪市立自然科学博物館研究報告, 21: 13-17.
- 堀 繁久 2000. 日本新記録のアナバネコツブゲンゴロウ (新称). 知床博物館研究報告, 21: 33-38
- 堀 繁久・櫻井正俊 2015. 北海道の蝶と蛾. 北海道新聞社, 札幌. 422pp.
- 堀 繁久・栗林一寿 2017. 北海道におけるシラキトビナナフシとヤスマツトビナナフシの分布について. 北海道博物館研究紀要, 2: 39-48.
- 堀江清史 2013. マダラ科マダラガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅲ (広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. p.331.
- 細井幸兵衛 2018. 新青森県植物目録. 弘前大学白神自然環境研究所. XXI + 115 + 40pp.
- 市田忠夫 1986. 津軽半島北部のウスバカマキリ・カヤコオロギ・その他若干の直翅類の記録. *Celastrina*, 17: 25-26.
- 市田忠夫 1988. 青森県のカメムシ(I). *Celastrina*, 20: 113-145.
- 市田忠夫 1989. 青森県のカメムシ(II). *Celastrina*, 22: 29-38.
- 市田忠夫 1991. 青森県のカメムシ(III). *Celastrina*, 26: 44-54.
- 市田忠夫 1992. 青森県の脈翅類. *Celastrina*, 27: 78-121.
- 市田忠夫 1993. 木造町でショウリヨウバッタモドキ採集. *Celastrina*, 28: 72.
- 市田忠夫 1998a. 本州から初めて記録されるタイワンナガマキバサシガメ. *Rostria*, 47: 29-30.
- 市田忠夫 1998b. 北上川下流域の興味深いカメムシ類. *インセクトマップオブ宮城*, 9: 25-27.
- 市田忠夫 1999a. 北日本のマキバサシガメ 湿地性種の棲み分けと翅型変異. *インセクトarium*, 12: 336-342.
- 市田忠夫 1999b. オオマキバサシガメの生息環境と分布. *かめむしニュース*, 16: 6-7.
- 市田忠夫 2000. その後のウスバカマキリ. *Celastrina*, 35: 139.
- 市田忠夫 2002. 青森県と秋田県のトワダオオカ 5新産地. *Celastrina*, 37: 76-78.
- 市田忠夫・市川顕彦 2001. 青森県平滝沼でトゲヒシバッタを採集. *月刊むし*, 364: 49.
- 市川顕彦 2014. 日本産ナナフシ目の新知見. *月刊むし*, 523: 10-17.
- 市川裕二 2008. 八戸市のトワダオオカの追加記録. *Celastrina*, 43: 88.
- 市川裕二・吉川克哉 2012. 津波で出来た池で見られたエリザハンミョウとトンボ類. *Celastrina*, 47: 96-98.
- 一戸清志 1991. オオウラギンヒョウモンを田子町で採集. *Celastrina*, 26: 71.
- 飯田忠嗣 1964. マエダテツチスガリを十和田で採集. *生物研究*, 8(4): 52.
- 池田都志也・高橋 誠 2003. 青森県におけるサロベツナガケシゲンゴロウの記録. *月刊むし*, 394: 2.
- 井村有希・水沢清行 2013. 日本産オサムシ図説. 昆虫文献六本脚. 東京. 368pp.
- Inoue, H. 1958. Descriptions and records of some Japanese Geometridae(II). *Tinea*, 4(2): 241-256.
- 井上 寛・杉 繁郎・黒子 浩・森内 茂・川辺 湛 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京. Vol.1: 1-968, Vol.2: 1-556, pls 1-392.
- Ishimura, K. 1938. A list of Odonata from Aomori Pre.(Northern Honsyu). 青森博物研究会会報, 6: 4-22.
- 石村 清 1952. トワダオオカの幼虫期について. *衛生動物*, 3(1/2): 12-19.
- 石村 清・佐藤哲男 1941. 節足動物 昆虫編, 青森県博物総目録第2巻. 青森県博物研究会会報, 21: 28-108.
- Ito, M. & M. Munakata 1979. The bumblebees in southern Hokkaido and northernmost Honsyu, with notes on Blakiston Zoogeographical line. *Low Tem. Sci. Ser. B*, 37: 81-105.
- 伊東憲正・古田 治 2009. カエルキンバエ調査会報告ならびに既報の整理. *はなあぶ*, 27: 58-61.
- 井藤竜大 2018. 矢田丘陵におけるウマノオバチ *Euurobracon yokahamae* (Dalla Torre, 1898) (ハチ目: コマユバチ科) の記録と羽化脱出時についての知見. *つねきばち*, 32: 49-50.

- 岩井大輔・八木 剛 2003. 日本におけるオオルリハムシの地理的分布. 昆虫 (ニューシリーズ), 6 (2): 105-110.
- 岩田久二雄 1982. 日本蜂類生態図鑑. 講談社, 東京. 162pp.
- 岩田朋文・渡辺黎也・安藤一次 2019. 青森県三沢市仏沼の水生昆虫類目録. 青森自然誌研究, 24: 17-21.
- 岩手県 2001. いわてレッドデータブック. 614pp.
- 岩手県 2014. いわてレッドデータブック, 岩手の希少な野生生物, www.fa0031@pref. iwate. jp (2018年5月6日確認)
- 岩崎 拓 2000. オナガアシプトコバチのオオカマキリとチョウセンカマキリ越冬卵嚢への寄生. 昆虫 (ニューシリーズ), 3(2): 65-70.
- Japanese Ant Database Group 2003. Ants of Japan. Gakken, Tokyo. 224pp.
- 神保一義 1984. 高山蛾-高山を舞う蛾たち. 築地書館, 東京. 191pp.
- 神保一義・柳田慶浩・葛西 充 1991. 岩木山・八甲田山の高山帯の蛾類. 蛾類通信, 62: 204-207.
- 加賀玲子・川島逸郎・刈部治紀 2018. ウマノオバチ*Euurobracon yokahamae* (Dalla Torre,1898) (Insecta: Hymenoptera: Braconidae) の生活史, 特にその寄主について. Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.), 47: 59-66.
- 加賀玲子・刈部治紀 2019. ウマノオバチ*Euurobracon yokahamae* (Dalla Torre,1898) (Insecta: Hymenoptera: Braconidae) の生活史-工業用内視鏡を使った観察-. Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.), 48: 69-74.
- 亀田 満・山内 智 2002. 青森県屏風山周辺の蛾類(I). 青森自然誌研究, 7: 53-58.
- 亀田 満・山内 智 2003. 青森県屏風山周辺の蛾類(II). 青森自然誌研究, 8: 29-34.
- 亀田 満・山内 智 2004. 青森県屏風山周辺の蛾類(III). 青森自然誌研究, 9: 53-60.
- 亀田 満・山内 智 2005. 青森県屏風山周辺の蛾類(IV). 青森自然誌研究, 10: 53-59.
- 亀田 満・山内 智 2006. 青森県八甲田山の蛾類(IV). 青森自然誌研究, 11: 33-34.
- 亀田 満・山内 智 2007. 青森県屏風山周辺の蛾類(V). 青森自然誌研究, 12: 35-44.
- 亀田 満・山内 智 2008. 青森県岩木山の蛾類. 青森自然誌研究, 13: 25-34.
- 亀田 満・山内 智 2010. 青森県八甲田山の蛾類(V). 青森自然誌研究, 15: 1-8.
- 亀田 満・山内 智 2012. 青森県岩木山の蛾類(IV). 青森自然誌研究, 17: 71-78.
- 亀田 満・山内 智 2015. 青森県下北半島の蛾類(I). 青森自然誌研究, 20: 15-26.
- 亀田 満・山内 智 2016. 青森県下北半島の蛾類(II). 青森自然誌研究, 21: 55-64.
- 亀田 満・山内 智 2017. 青森県下北半島の蛾類(III). 青森自然誌研究, 22: 55-66.
- 亀田 満・山内 智 2018. 青森県下北半島の蛾類(IV). 青森自然誌研究, 23: 73-88.
- 亀田 満・山内 智 2019. 青森県下北半島の蛾類(V). 青森自然誌研究, 24: 1-13.
- 神奈川県立博物館 (編) 1995. 阿部光典ゲンゴロウ類コレクション標本目録. 神奈川県立博物館自然部門資料目録, 8: 1-66.
- 環境省 2006. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物, 5. 昆虫編. 自然環境研究センター, 東京. 246pp.
- 環境省 2015. レッドデータブック2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-5. 昆虫類. ぎょうせい, 東京. 509pp.
- 環境庁 1995. 日本産野生生物目録-本邦産野生動植物の種の現状-, 無脊椎動物編II. 自然環境研究センター, 東京. 621pp.
- Kano, R. & S. Shinonaga 1968. Calliphoridae. Fauna Japonica. Academic Press of Japan. 181pp.
- 葛西 充 1983. 青森県蛾想記その2. ハイイロキリガ. 誘蛾燈, 92: 114-116.
- 葛西 充 1983. 青森県蛾想記その3. ヨスジカバイロアツバ. 誘蛾燈, 94: 218-221.
- 葛西 充 1984. 青森県蛾想記その4. ミズジキリガ. 誘蛾燈, 96: 100-103.
- 葛西 充 1985. 青森県蛾想記その6. エゾスジヨトウ. 誘蛾燈, 102: 151-154.
- 葛西 充 1986. 青森県蛾想記その7. ダイセツヤガ. 誘蛾燈, 103: 7-14.
- 葛西 充 1987. 青森県の蛾(Ⅷ). 誘蛾燈, 109: 81-85.

- 葛西 充 1988a. 青森県の蛾(XI). 誘蛾燈, 111 : 17-21.
- 葛西 充 1988b. 青森県の蛾類(XII). 誘蛾燈, 112 : 51-56.
- 葛西 充 1988c. 青森県の蛾(VI)の追加記録. 誘蛾燈, 113 : 99-100.
- 葛西 充 1989a. 青森県の蛾(XIII). 蛾類通信, 151 : 5-12.
- 葛西 充 1989b. 青森県の蛾(XIV). 誘蛾燈, 115 : 35-37.
- 葛西 充 1989c. 青森県の蛾(XV). 誘蛾燈, 116 : 65-68.
- 葛西 充・佐藤 博 1977. 青森県産シヤクガ科の記録. 誘蛾燈, 67 : 4-8.
- 葛西 充・佐藤 博 1979. 青森県の蛾(II). 誘蛾燈, 75 : 4-7.
- 葛西 充・佐藤 博 1980. 青森県から採集された注目すべき蛾. 蛾類通信, 106 : 83-84.
- 葛西 充・佐藤 博 1981. 青森県の蛾(V). 誘蛾燈, 86 : 125-128.
- 柏崎春生 1974. オオクワガタの採集. ビートル, 3 : 22.
- Katakura, H. 1981. Classification and Evolution of the Phytophagous Ladybirds Belonging to *Eenosepilachna vigintioctomaculata* Complex. Jour.Fac.Sci., Hokkaido Univ., Ser., Zool., 22(4) : 301-378.
- 片倉晴雄 1988. オオニジウヤホシテントウ. 文一総合出版, 東京. 160pp.
- 加藤陸奥雄 1939. 昆虫の日週活動と其の環境条件, 八甲田山高原蟻塚の内部温度. 昆虫, 12(6) : 205-207.
- 川井信矢・堀 繁久・河原正和・稲垣政志 2008. 日本産コガネムシ上科図説. 昆虫文献 六本脚. 198pp.
- 河上康子・林 成多 2008. 日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究(3)青森県津軽半島. ホシザキグリーン財団研究報告, 11 : 143-148.
- 蹴揚洋子・米田幸子・小池 忍 1985. 三戸地方のトンボ. Paulownia, 17 : 101-112.
- Kerzhner, I. M. 1979. New Heteroptera from the Far East of the USSR. Trudy zool. Inst., 81 : 14-65. (in Russian)
- Kerzhner, I. M. 1988. Family Nabidae, key to the Insects of Far East USSR. 2. pp.761-768. (in Russian)
- 木俣 繁 1984. 故白畑孝太郎氏所蔵蛾類標本(1). 誘蛾燈, 96 : 87-94.
- Kimoto, S. 1966. The Chrysomelidae of Japan and the Ryukyu Islands. X I. Jour. Fac.Agr., Kyushu Univ., 13(4) : 635-671.
- 木元新作 1989. キアシネクイハムシの記録について. 昆虫と自然, 24(13) : 5-6.
- 木元新作・滝沢春雄 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会, 神奈川. 530pp.
- 木村直哉・大高明史・小笠原崇輝・森下千尋・内藤久美子・三上浩子・阿倍 弘・野原精一・福原晴夫 2018. 青森県下北湖沼群の動物プランクトンと底生動物相. 青森自然誌研究, 23 : 45-60.
- 木村直哉・小林 貞・倉西良一・嶋津 武・大高明史 2016. 弘前だんぶり池の水生無脊椎動物. 青森自然誌研究, 21 : 43-54.
- 木村帝一 1973. 野内川周辺の昆虫. やぶなべ, 19 : 11-22.
- 菊池波輝 2014. 福島県初記録のシモヤマギングチ *Ceratocrabro shimoyamai* (Tsuneki,1958) (ギングチバチ科:ギングチバチ亜科). つねきばち, 25 : 37-38.
- 菊池昭雄 1981. 青森県でクロフカバシヤクを採集. 誘蛾燈, 84 : 88.
- 菊池昭雄 1983. 青森県のベニモンマダラ. Cestrastrina, 12 : 17.
- Kishida, Y., T. Kudo, & S. Kudo 2014. A new species of *Nokona* Matsumura from Japan (Lepidoptera, Sesiidae). Tinea, 23(1) : 4-9.
- 岸田泰則 1995. ミツモンケンモン青森県に産す. 蛾類通信, 185 : 161.
- 岸田泰則 (編) 2011. 日本産蛾類標準図鑑 II. 学研教育出版, 東京. 416pp.
- 岸田泰則 2011. カレハガ科. 日本産蛾類標準図鑑 I (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.317-321.
- 岸田泰則 2011. ヒトリガ科. 日本産蛾類標準図鑑 I (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.148-167.

- 岸田泰則 2011. ヤガ科スジコヤガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.282-288.
- 岸田泰則 2011. ヤガ科ツマキリアツバ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.219-221.
- 岸田泰則・柳田慶浩・清野昭夫・石塚勝巳 2011. ヤガ科シタバガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.244-264.
- 岸井 尚 2006. 細川浩司氏蒐集の邦産コメツキムシ. 地域甲虫自然史(2). 日本甲虫学会. 89pp.
- Kishii, T. 1962. Elateridae of Islands Rishiri-to, Rebun-to and Todo-jima "The Snappers of islands(Ⅲ)". Bull. Heian high school, 7 : 1-31.
- Kishii, T. 1966. Some new forms of Elateridae in Japan(Ⅳ). Bull. Heian high school, 10 : 1-11.
- Kishii, T. 1987. Some new forms of Elateridae in Japan(XⅨ). Bull. Heian high school, 31 : 1-20.
- Kishii, T. 1992. Notes on Elateridae from Japan and its adjacent Area(11). Bull. Heian high school, 36 : 1-30.
- Kishii, T. 1996. Notes on Elateridae from Japan and adjacent Area(14). Bull. Heian high school, 39 : 1-40.
- Kishii, T. 1999. A check-list of the Family Elateridae from Japan (Coleoptera). Bull. Heian. high school, 42 : 1-144.
- Kishii, T. 2004. Three new subspecies of the snbfamily Hyponidinae (Coleoptera: Elateridae) from Japan. Ent. Rev. Japan, 59(2) : 161-165.
- 北畠 宏 1955. 湯ノ股、恐山を歩いて. 進化, 7(3/4) : 25-27.
- 北原 曜・黒田 哲 2017. 交配実験による日本産コヒョウモン属*Brenthis*の再検討. 蝶と蛾, 68(2) : 73-78.
- 北野 忠 2012. 青森県におけるニセモンキマメゲンゴロウの記録. さやばね (ニューシリーズ), 5 : 27-28.
- 小林秀紀 2011. ヤガ科モンヤガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.385-400.
- 小林秀紀 2011. シヤチホコガ科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.115-138.
- 小島圭三・中村真吾 1986. 日本産カミキリ食樹総目録. 比婆科学教育振興会, 広島. 336pp.
- 国際芸術センター青森 2004. 国際芸術センター青森の森環境調査報告書 (青森市). 120pp.
- 駒井古実・吉安 裕・那須義次・齋藤寿久 (編) 2011. 日本の鱗翅類-系統と多様性. 東海大学出版会, 神奈川. 1306pp.
- 小宮義璋・大桃定洋・高桑正敏 1986. ネクイハムシ類1985年の採集, 観察記録. 甲虫ニュース, 71 : 5-6.
- 今 卓也 1986. 青森県におけるアカマダラコガネの記録. *Celastrina*, 18 : 34.
- 工藤広悦 1976. ミカボコブガ青森県に産す. 蛾類通信, 87 : 450.
- 工藤広悦 1983. 青森県屏風山の蛾. 誘蛾燈, 91 : 33-39.
- 工藤広悦 1985. 沼沢地の蛾. 月刊むし, 174 : 8-15.
- 工藤広悦 1989. 穂高から八甲田-高山帯及び亜高山帯の蛾. 誘蛾燈, 115 : 19-21.
- 工藤誠也 2018. 美しい日本の蝶図鑑. ナツメ社, 東京. 336pp.
- 工藤誠也・工藤 忠 2017. 東北地方におけるクロフカバシヤクの再発見. やどりが, 253 : 2-5.
- 工藤周二 2004. 昆虫全般. 「国際芸術センター青森の森」環境調査報告書. 青森市. pp.77-79
- 工藤周二 2013. ウマノオバチの記録. *Celastrina*, 48 : 34.
- 工藤 忠 1986. アカマダラコガネの青森県での記録. *Celastrina*, 17 : 37.
- 工藤 忠 1987. 下北半島でのヒメシジミの幼虫生態. *Celastrina*, 19 : 21-23.
- 工藤 忠 1995. 岩木川下流のアシ原に生息するマークオサムシについて. *Celastrina*, 30 : 18-20.
- 工藤 忠 2002. 春季におけるアカマダラハナムグリの採集例. *Celastrina*, 37 : 104.
- 工藤 忠 2011. 67年ぶりに青森県で得られたウマノオバチ. *Celastrina*, 46 : 40.

- 工藤 忠 2013. 青森県におけるウマノオバチの観察記録. *Celastrina*, 48 : 4-5.
- 工藤 忠 2016. 青森県のフシキキシタバ. *Celastrina*, 51 : 54-57.
- 工藤 忠 2016. 東北地方におけるゴマシジミの衰亡と保護. 日本産チョウ類の衰亡と保護 第7集. 日本鱗翅学会, 東京. pp.33-36.
- 工藤 忠 2019. オオゴキブリ新成虫♂の青森県における記録. *Celastrina*, 53 : 51.
- 工藤 忠・工藤誠也 2017. 青森県におけるミヤマキシタバの記録地と生態的知見について. *Celastrina*, 52 : 35-36.
- 黒石市教育委員会 2001. 山谷文吾氏寄贈昆虫標本目録. 130pp.
- 黒沢良彦 1982. マークオサムシの分布北限. 甲虫ニュース, 56 : 8.
- 黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅲ). 保育社, 大阪. 500pp.
- 櫛引顕弘 1971. 暗門川・赤石川昆虫リスト. やませ, 10 : 56-88.
- 櫛田俊明 1991. 青森県のハンミョウ類(Ⅲ). *Celastrina*, 26 : 55-67.
- 櫛田俊明 1995. 東北地方のゲンゴロウモドキ類. *Celastrina*, 30 : 75-87.
- 櫛田俊明・佐藤隆志 1990. 青森県のゲンゴロウモドキ類. *Celastrina*, 25 : 27-37.
- Lewis, G. 1894. On the Elateridae of Japan. *Annls. Mag. nat. Hist. Ser.6.*, 13 : 26-48, 182-201, 255-266, 311-320.
- Liu, X., F. Hayashi & D. Yang 2015. Phylogeny of family Sialidae (Insecta: Megaroptera) inferred from morphological data, with implications for generic classification and historical biogeography. *Cladistics*, 31 : 18-49.
- 前川直樹 1978. 弘前周辺のアリ. *Celastrina*, 1 : 10-11.
- Maeta, Y., K. Goukon, N. Sugiura & R. Miyanaga 1996. Host records of Cleptoparasitic bees in Japan. *Jpn. J. Ent.*, 64(4) : 830-842.
- 榎原 寛・阿部 學・新里達也・早川浩之・飯島一浩 2004. ワシタカ類の巣で生活するアカマダラハナムグリ. 甲虫ニュース, 148 : 21-23.
- 丸屋良博 1993. ヒラタヒメゲンゴロウ青森県の記録. 月刊むし, 263 : 36.
- 丸屋良博・樋口 誠 1993. ヒラタヒメゲンゴロウの採集について. 昆虫と自然, 28(8) : 30-31.
- Matsumura, S. 1912. Die Cidradinen Japans II. 日本動物学彙報, 8(1) : 15-51.
- Matsumura, S. 1931. A new species and a new genus of Noctuidae from Japan. *Ins. Mats.*, 5(4) : 210-211.
- 松村松年 1912. ニトベギングチバチ. 続日本千虫図解(Ⅳ). 警醒社書店, 東京. pp.173-174.
- 松村松年 1916. 新日本千虫図解2. 警醒社書店, 東京. 474pp.
- 松野武敏 1987. 青森県のオオシラホシヤガ. 蛾類通信, 140 : 227.
- 松野武敏 1987. クロフカバシヤクの採集例. *Celastrina*, 19 : 41.
- 松野武敏・唐牛良明・近藤格・斎藤光夫・須摩靖彦・斎藤和夫 1966. 十二湖のオオゴキブリ. 東北昆虫, 4 : 1-2.
- 松本英明・荒木 哲・森 正人 1989. 北海道のゲンゴロウモドキ類. 月刊むし, 225 : 19-25.
- 松浦寛子 1992. 日本の珍しい蛾8. イブキスズメ. やどりが, 148 : 14.
- 松浦一郎 1981. 珍説進化論(3) 翔んだ翔んだタマゴが翔んだ エゾエンマ *Teleogryllus yezoemma* 分布の謎. ぱったりぎす, 35 : 820-824.
- 松浦 誠 1995. 図説, 社会性カリバチの生態と進化. 北海道大学図書出版会, 札幌. 353pp.
- 松浦 誠 2004. 都市における社会性ハチの生態と防除, VI, マルハナバチの発生状況と都市への適応. ミツバチ科学, 25(3) : 97-106.
- 三上隆司 1986. 青森県におけるコウヤホソハナカミキリの追加記録. 月刊むし, 190 : 30-31.
- 三上隆司 1987. 青森県でオニホソコバネカミキリを採集. 月刊むし, 195 : 38.
- 三上隆司 1988. ヨコヤマヒメカミキリ青森県の記録. 月刊むし, 214 : 28.
- 三上隆司 1989. 青森県津軽地方のカミキリムシ(1)食樹と生態について(上). *Celastrina*, 23 : 5-12.
- 三上隆司 1990. 青森県津軽地方のカミキリムシ(2)食樹と生態について(下). *Celastrina*, 24 : 17-24.

- 三上隆司 1993. 青森県西海岸におけるカミキリ3種の食樹観察. 昆虫と自然, 28(5): 18-24.
- 三上隆司 1997. シロオビドイカミキリを青森県にて採集. 月刊むし, 322: 27.
- 三上隆司・阿部 東 1985. 青森県産カミキリムシ4種の寄生植物について. 月刊むし, 175: 41-42.
- 三上隆司・佐藤 稔 1981. 青森県初記録のカミキリ3種. 月刊むし, 130: 27.
- Mitai, K. & O. Tadauchi 2007. Taxonomic study of the Japanese species of the *Nomada ruficornis* species group (Hymenoptera, Apidae) with remarks on Japanese fauna of the genus *Nomada*. *Esakia*, 47: 25-167.
- 三橋 渡 1979. ベニモンマダラの産地. ケルクス, 12: 14.
- 三浦 博 2002. 蝶々の季節便りーヒカゲチョウ. グラフ青森, 281: 17.
- 三浦 博 2010. ホシチャバネセセリ, クロシジミ. 青森県の希少な野生生物ー青森県レッドデータブック (2010年改訂版) ー. p.241,242.
- Miyamoto, S. 1959. Veliidae of Japan and adjacent territory III. *Kontyû*, 27(1): 81-85.
- 宮本正一 1997. マキバサシガメ科の概要と日本産の属・亜族の検索表ならびに既知種目録. *Rsotria*, 46: 1-6.
- 宮本正一 2008. カタピロアメンボ科, 新訂原色昆虫大図鑑第三巻. 北隆館, 東京. p.172-173.
- 森 正人 2017. 兵庫県のトックリゴミムシ科. きべりはむし, 34(1): 9-11.
- 森 正人 2017. 兵庫県のヨツボシゴミムシ亜科. きべりはむし, 40(1): 61-33.
- 森 正人 2018. 兵庫県のスナハラゴミムシ亜科. きべりはむし, 40(2): 20-22.
- 森 正人・北山 昭 1993. 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版, 東京. 217pp.
- 森田誠司 1984. 恐山のミズギワゴミムシ. 甲虫ニュース, 66: 7.
- 森田誠司・山内 智 1986. 恐山のゴミムシ類. むつ市文化財調査報告書, 12: 76-86.
- Morita, S. 2010. Notes on the Bembidiinae (Coleoptera, Carabidae) of Japan X X III. *Bembidion (Ocydromus) negrei* Habu and its new relatives, found on the habitats of hot springs. *Jpn. J. syst. Ent.* 16(1): 13-21.
- Mroczkowski, M. 1959. *Lyrosoma chujoi* sp.n. from Japan. *Entom. Rev. Japan*, 10(2): 49-50.
- 棟方 堯・伊賀武夫・千葉瑞穂・菊池幸夫・小館昭示・三浦 博・村上俊昭・長尾勝幸・中井保夫・佐藤 博・佐藤 光政・白山一訓 1986. 青森県におけるヒメギフチョウの分布. 青森の蝶, 9(4): 18-56.
- 村上義千代 1993. ヨコヤマヒゲナガカミキリを採集. *Celastrina*, 28: 74.
- 村上直樹・佐藤 守 1968. 三戸郡及び八戸市を主とした青森県東南部の蝶採集報告(1). 寄生木, 7: 5-34.
- 室谷洋司 1962. 青森市の蝶相(4)朝日山・豆坂カシワ林のゼフィルス. 青森の蝶, 4(1): 2-6.
- 室谷洋司 1989. 青森県におけるオオルリシジミの衰亡. 日本産蝶類の衰亡と保護 I. 日本鱗翅学会・日本自然保護協会. pp. 90-97.
- 室谷洋司 1993. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト (1992年), 東北地区2 青森県. 日本産蝶類の衰亡と保護II. 日本鱗翅学会・日本自然保護協会. pp.24-26.
- 室谷洋司 1995. 青森県東南部のオオウラギンヒョウモン. やどりが, 164: 3.
- 室谷洋司 2007. 東北地方のオオルリシジミー発見から分布解明, そして絶滅までの経過. *Butterflies*, 44: 2-19.
- 室谷洋司 2018. 青森県階上町のホシミスジの記録. 青森の蝶, 28: 39.
- 室谷洋司・阿部 東 1962. 青森県の蝶類. 青森蝶同好会, 296pp.
- 室谷洋司・古木 誠・富岡康浩・安富和男 2016. 写真で見る八甲田山におけるイカリアオカメノコハムシの生態. 青森の蝶, 25: 46-59.
- 室谷洋司・古木 誠・富岡康浩・安富和男 2017. クロスジカメノコハムシの生態と生息地の変遷. 青森の蝶, 26: 1-12.
- むつ市教育委員会 2002. 芦崎の自然. 100pp.
- 永幡壽之 2016. マルコガタノゲンゴロウをとりまく諸問題. 昆虫と自然, 51(7): 9-14.
- 長尾 康 1984. ヨコヤマヒゲナガカミキリの青森県における記録. 月刊むし, 166: 3.

- 中根猛彦 1955. 原色日本昆虫図鑑(上). 保育社, 大阪. 274pp.
- 中根猛彦 1986. 日本の甲虫(73). 昆虫と自然, 21(4): 18-24.
- 中根猛彦 1986. 北日本のゲンゴロウ類同定についての覚え書. 東北の自然, 22: 16-19.
- 中根猛彦 1987. 日本の雑甲虫覚え書1. 北九州の昆虫, 34(3): 173.
- 中根猛彦 1993. 日本の雑甲虫覚え書10. 北九州の昆虫, 40(1): 1-8, pl.1.
- 中村裕之 1985. 岩手県のツガルホソシテムシの記録. 月刊むし, 174: 41.
- 中島秀雄 2011. カギバガ科. 日本産蛾類標準図鑑 I (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.112-126.
- 中島秀雄 2011. シャクガ科アオシヤク亜科. 日本産蛾類標準図鑑 I (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.205-224.
- 中島秀雄・矢崎克己 2011. シャクガ科ナミシヤク亜科. 日本産蛾類標準図鑑 I (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.248-316.
- 南部敏明 1973. 樹脂を使用するキュビギングチバチの習性. 生物研究, 17(3/4): 55-60.
- 奈良岡弘治 1977. 青森県のトンボ' 77. 著者自刊. 120pp. (孔版)
- 奈良岡弘治 1998. 深浦町のヒメサナエ. *Celastrina*, 33: 57.
- 奈良岡弘治 2004. 青森県におけるムツアカネの再発見. 青森自然誌研究, 9: 31.
- 奈良岡弘治 2007. コバネアオイトトンボ *Lestes japonicus* Selys の生殖行動と他の *Lestes* 属との比較. *Tombo*, 50(1/4): 59-64.
- 奈良岡弘治・高橋克成・松尾芳樹 2018. 青森県津軽地方, 上北郡, 下北郡, および十和田市で2015~2017年に確認したトンボ類. 青森自然誌研究, 23: 95-109.
- 奈良岡弘治 2009. つがる市車力町のウスバカマキリ. *Celastrina*, 44: 48.
- 成田俊明 1980. 青森県におけるオオチャイロハナムグリの記録. *Celastrina*, 4: 16-18.
- 成田俊明 1988. 青森県のハンミョウ類. *Celastrina*, 20: 61-112.
- 成田俊明 1989a. 黒石市におけるタガメの古い記録. *Celastrina*, 22: 44.
- 成田俊明 1989b. 青森県のハンミョウ類(II). *Celastrina*, 23: 31-44.
- 鳴海良平 1935. 1935年度決算膜翅目の部. テレアコ, 1(2): 11-13.
- 鳴海良平 1937. 青蜂. テレアコ, 3(2/3): 9-13.
- 鳴海良平 1938. 黒石市と山形村の粘管目. テレアコ, 4(1): 7-9.
- 鳴海良平 1951. 津軽産粘管目目録. 進化, 3(3): 8-10.
- 日本直翅類学会 2016. ウスバカマキリ. 日本産直翅類標準図鑑. 学研教育出版, 東京. pp.47-48. (図版), 201 (本文).
- 日本昆虫学会 2013. 日本昆虫目録第7巻第1号, 鱗翅目, セセリチョウ上科-アゲハチョウ上科. 權歌書房, 福岡. 94pp.
- 日本昆虫学会 2014. 日本昆虫目録第8巻第1部, 双翅目, 長角亜目-短角亜目無額囊節. 權歌書房, 福岡. 539pp.
- 日本昆虫学会 2014. 日本昆虫目録第8巻第2部, 双翅目, 短角亜目無額囊節. 權歌書房, 福岡. 1101pp.
- 日本昆虫学会 2016. 日本昆虫目録第4巻, 準新翅類. 權歌書房, 福岡. 629pp.
- 日本昆虫学会 2017. 日本昆虫目録第2巻, 旧翅類. 權歌書房, 福岡. 94pp.
- 日本産アリ類データベースグループ 2003. 日本産アリ類全種図鑑. 学研教育出版, 東京. 196pp.
- 日本チョウ類保全協会編 2019. フィールドガイド増補改訂版, 日本のチョウ. 誠文堂新光社, 東京. 343pp.
- 日本鞘翅目学会 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 東京. 565pp.
- 日本野生生物研究センター 1980. 第2回自然環境保全基礎調査, 動物分布調査報告書(昆虫類). 267pp.
- Nilsson A. N. & T. Nakane 1993. A revision of the *Hydroporus* species (Coleoptera: Dytiscidae) of Japan, the Kuril Islands and Sakhalin. *Ent. Scand.*, 23: 419-428.
- 西田鉄郎 1959. 岩木川生物調査報告, 昆虫班. *Blakiston*, 6(1): 11-16.

- 西沢登志樹 1987. トウホクトラカミキリの採集2例. *Celastrina*, 19: 44.
- 野尻湖昆虫グループ 1985. アトラス 日本のネクイハムシ—化石同定への手引き—. 182pp.
- 野村拓志・早坂大亮 2013. 青森県大須賀海岸におけるオオマキバサシガメの採集記録. *Rostria*, 55: 33-36.
- Oguma, K. 1922. The Japanese Dragonflies Fauna of the family Libellulidae. *Deutsch. Entomol. Feitschr.*, 1922: 12-19.
- 小倉住夫 1971. 名久井岳に於いてムモンベニカミキリを採集. *月刊むし*, 5: 36.
- 大平仁夫 1963. キベリマルコメツキについて. *Kontyû*, 31: 79-83.
- Ôhira, H. 1993. New or Little-known Elateridae (Coleoptera) from Japan, X X VIII. *Elytra*, 21(2): 249-254.
- 大平仁夫 1994. エゾクロツヤミズギワコメツキの形態について. *Elytra*, 22(1): 153-157.
- 大平仁夫・下山健作 1984. 青森県のコメツキムシ若干種について. 青森県立郷土館調査研究年報, 9: 53-61.
- 大平仁夫・山内 智 1991. 下北半島のコメツキムシ類について. 青森県立郷土館調査研究年報, 15: 11-25.
- 大平仁夫・山内 智 1994. 岩木山のコメツキムシ類について(1). 青森県立郷土館調査研究年報, 18: 77-90.
- 大平仁夫・山内 智 1997. 八甲田山のコメツキムシ類について(1). 青森県立郷土館調査研究年報, 21: 73-81.
- 大平仁夫・山内 智 1998. 八甲田山のコメツキムシ類について(2). 青森県立郷土館調査研究年報, 22: 51-59.
- 小笠原嵩輝・鳥居高明 2007. 青森県における水生半翅類ヒメマルミズムシ (マルミズムシ科) とミゾナシミズムシ (ミズムシ科) の初記録. *Celastrina*, 42: 45-48.
- 岡田一二三 1952. 弘前市のヤブヤンマ. *進化*, 4(1): 15.
- 岡田一二三 1958. 青森県産の蜻蛉数種について. *進化*, 10(3/4): 7-8.
- 岡田一二三 1966. 三八地方を中心としたトンボ数種について. 青森県生物学会八戸市部例会発表会要旨. 3pp.
- 岡田一二三・成田伝蔵 1953. 青森県の蜻蛉目について (2. 不均翅亜目, その1). *進化*, 5(1): 11-15.
- Okada, R. 2011. A new species of the genus *Platambus* (Coleoptera, Dytiscidae) from Hokkaido, Japan, *Elytra*, Tokyo, New Series, 1(1): 31-38.
- 岡島秀治・荒谷邦雄 2012. 日本産コガネムシ上科標準図鑑. 学研教育出版, 東京. 444pp.
- 奥村定一 1942. 千島の蜻蛉類(II). *昆虫*, 16(1): 12-19.
- 大場信義 (編) 2004. ホタルの点滅の不思議. 横須賀市自然・人文博物館. 200pp.
- 大林延夫・佐藤正孝・小島圭三 1992. 日本産カミキリムシ検索図説. 東海大学出版会, 神奈川. 696pp.
- 大野善右衛門 1935. *Homonotus iwatai* Yasumatsu の生態に就いて. 関西昆虫学会会報, 4: 60-72.
- 大野正男 1980. 日本産主要動物の種別文献目録(6)へにもんまだら. 東洋大学紀要教養課程篇 (自然科学), 23: 51-55.
- 大野正男 1987. 日本産主要動物の種別文献目録(19)オオチャイロハナムグリ(1). 東洋大学紀要教養課程篇 (自然科学), 31: 145-179.
- 大野正男 1989. トワダオオカの分布総説. *日本の生物*, 3(12): 48-51.
- 大野正男 1993. オオゴキブリの分布. *月刊むし*, 263: 29.
- 大野正男 2000. 日本産主要動物の種別文献目録(57)カワラハンミョウ(1). 東洋大学紀要教養課程篇 (自然科学), 44: 163-201.
- 大野正男 2002. 日本産主要動物の種別知見総覧(56)オオゴキブリ(1). 東洋大学紀要自然科学篇, 46: 85-141.
- 大西伸一 1992. 津軽半島北西部のカミキリ(I). *Celastrina*, 27: 65-75.

- 大西伸一 1993. 津軽半島北西部のカミキリ(II). *Celastrina*, 28 : 17-26.
- 大西伸一 1994. 津軽半島北西部のカミキリ(III). *Celastrina*, 29 : 35-44.
- オオセッカの生息環境研究グループ 1999. 昆虫調査. 北国の草原湿地帯のシンボルであるオオセッカの好む環境に関する研究—三沢市仏沼—. pp.49-65.
- 尾園 暁・川島逸郎・二橋 亮 2012. ネイチャーガイド・日本のトンボ. 文一総合出版, 東京. 531pp.
- 太田祐司・井辻一雅・白根敬児 1970. 下北半島薬研・奥薬研の採集記録. エゾシロ, 42 : 8-9.
- 大高一浩 1976. 下北半島の蛾類(2). よし, 8(4) : 13-14.
- 大高明史・小笠原嵩輝・木村直哉・小林 貞・谷田一三・上西 実・安倍 弘 2008a. 青森県・屏風山湖沼群の底生無脊椎動物相. 急務となっている砂丘湖の生物多様性保全に関する研究. pp.239-274.
- 大高明史・小笠原嵩輝・木村直哉・森下千尋・関久美子・福士浩子・安倍 弘・野原精一・戸田任重・福原晴夫 2008b. 青森県・下北湖沼群の陸水生物学的予備調査. 急務となっている砂丘湖の生物多様性保全に関する研究. pp.277-303.
- 大高明史・小笠原崇輝・木村直哉・小林 貞・谷田一三・上西 実・阿倍 弘・富川 光・櫛田俊明 2008. 青森県・屏風山湖沼群の底生無脊椎動物相. *Celastrina*, 43 : 49-78.
- 尾崎俊寛 1985. トウホクトラカミキリ雑記. *Celastrina*, 15 : 2-7.
- 尾崎俊寛 1986. 青森県未記録のカミキリムシ2種について. *Celastrina*, 15 : 2-7.
- 尾崎俊寛 1988. 市田忠夫氏採集の青森県産カミキリムシ(1). *Celastrina*, 21 : 25-34.
- 尾崎俊寛 1993. コウチュウ目. 南八甲田山地総合学術調査報告書, 青森県. pp.105-185.
- 尾崎俊寛・一戸清志 1992. 東北地方未記録のヒメビロウドカミキリについて. *Celastrina*, 27 : 63-64.
- 尾崎俊寛・永幡嘉之 1997. 青森県, 秋田県及び山形県の食葉性コガネムシ若干種について. *Celastrina*, 32 : 25-36.
- 尾崎俊寛・佐藤福男・沼田仁・加納彦一 2006. 秋田県のコメツキ. 秋田自然史研究会. 75pp.
- 尾崎俊寛・鈴樹亨純 1989. 青森県におけるオオハナカミキリの追加記録. *Celastrina*, 22 : 45-46.
- Owada, M. 1988. On the herminiine moth *Zanclognatha perfractalis* (Noctuidae) discovered in Aomori Prefecture, northern Honshu, Japan. *Mem. natn. Sci. Mus., Tokyo*, 21 : 137-143.
- Owada, M. 1992. Synonymic notes on the herminiine moths (Noctuidae) of Japan, with descriptions of three new species. *TINEA*, 13(18) : 183-203.
- 大和田 守 2011. ヤガ科クルマアツバ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.221-235.
- 大八木昭 2007. ヒメハンミョウ. 北のフィールドノート (2007年7月24日). <http://snowmelt.exblog.jp/6156011/> (2007年7月24日確認)
- 三枝豊平 2008. オドリバエ科. 訂新原色昆虫大図鑑第Ⅲ巻. 北隆館, 東京. pp.405-434.
- 三枝豊平 2014. セダカバエ科. 日本昆虫目録第3巻第1部. 日本昆虫学会. pp.433-438.
- 斎藤和夫 1956. 全国採集地案内, 青森. 新昆虫, 9(6) : 12-13.
- 斎藤和夫・北畠 宏 1966. 青森県のノシメコヤガ. 蛾類通信, 42 : 387-388.
- 齊藤仁志 1987. 下北半島の食糞性コゲネムシ類(1). *Celastrina*, 19 : 25-26.
- 齊藤仁志 1989. 下北半島でのカミキリムシ3種の記録. *Celastrina*, 23 : 48.
- 齊藤仁志 1993. 青森県の食糞性コゲネムシ類. *Celastrina*, 28 : 47-60.
- 佐々木明夫・葛西 充 1994. 日本産ソトシロスジズメイガについて. 蛾類通信, 181 : 87-89.
- 佐々木明夫 1993. 青森県下北で得た蛾数種. 誘蛾燈, 134 : 89-91.
- 佐々木明夫 2011. コブガ科コブガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.170-181.
- 佐々木明夫 1993. 青森県下北で得た蛾数種. 誘蛾燈, 134 : 89-91.
- 佐藤 博 1970. 青森市街の*Orthosia*の採集記録. 蛾類通信, 63 : 44-45.
- 佐藤 博 1985. 青森県の蛾(VI). 誘蛾燈, 101 : 117-124.

- 佐藤 博 1988. 青森県の蛾(X). 青森の蝶, 10(1): 151-154.
- 佐藤 博 2018. 青森県蛾類採集目録 I 小蛾類. 青森の蝶, 27: 1-95.
- 佐藤 博・葛西 充 1975. 青森県の蛾類. 蛾類通信, 84: 402-403.
- 佐藤 博・葛西 充 1978. 青森県でノシメコヤガ再発見. 蛾類通信, 98: 634.
- 佐藤 博・葛西 充 1978. 青森県の蛾(I). 誘蛾燈, 72: 33-39.
- 佐藤 博・葛西 充 1981a. 青森県の蛾(IV). 誘蛾燈, 84: 55-60.
- 佐藤 博・葛西 充 1981b. 青森県の蛾(I)及び(II)の追加記録. 誘蛾燈, 84: 60.
- 佐藤 臨 2016. およそ100年ぶりに確認された青森県のニトベツノゼミ. *Celastrina*, 51: 50-52.
- 佐藤正孝 1977. 日本産ミズスマシ科概説(2). 甲虫ニュース, 39: 1-4.
- 佐藤正孝 1978. 日本産ホソガムシ科概説. 甲虫ニュース, 40: 1-3.
- 佐藤正孝 2006. 準絶滅危惧コウチュウ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 5. 昆虫類 (環境省編). p.183.
- 佐藤正孝・吉富博之 2005. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書IV. 甲虫ニュース, 151: 1-6.
- 佐藤光雄・白岩康夫・手代木渉・奈良典明・室谷洋司 1967. 青森県動物誌. 東奥日報社, 青森. 361pp.
- 佐藤光昭・袴田裕国・渡部悟司・諏訪内 敬・藤田弘昭 1987. 名川町の昆虫1986. *Paulownia*, 19: 41-49.
- 佐藤力夫 1986. 日本産Brabira属の1新種とホソバナミシヤク奄美大島亜種の記載. 蛾類通信, 134: 129-313.
- 佐藤力夫 2011. シヤクガ科エダシヤク亜科. 日本産蛾類標準図鑑 I (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.132-200.
- 佐藤隆志 1984. 久渡寺・座頭石のカミキリ(5). *Celastrina*, 13: 18-50.
- 佐藤隆志・尾崎俊寛 2000. 青森県におけるクマガイクロアオゴミムシの採集例. *Celastrina*, 35: 23-24.
- Shibata, T. 1969. Some reports on the burying beetles from Japan I. *Ent. Rev. Japan*, 21: 47-54.
- 志賀 隆・寺田 玲・松浦宜弘・松崎妙子 2009. 青森で自然観察を楽しんできました! ~「西津軽合宿」報告~. *Nature Study*, 55(10): 7-8.
- 四方圭一郎 2011. ヤガ科セダカモクメ亜科. 日本産蛾類標準図鑑 II (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京. pp.303-304.
- 下山健作 1960. ササキリギングチバチについて. *生物研究*, 4(1): 11-12.
- 下山健作 1960. 十和田湖周辺のおオキノコムシ類. *昆虫学評論*, 11(2): 49-58.
- 下山健作 1964a. 青森県, 特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(1). *昆虫学評論*, 16(2): 67-76.
- 下山健作 1964b. 青森県, 特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(2). *昆虫学評論*, 17(1): 28-38.
- 下山健作 1964c. 青森県, 特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(3). *昆虫学評論*, 17(2): 77-84.
- 下山健作 1967. 青森県西津軽郡平滝沼採集記. *生物研究*, 11(3/4): 52-55.
- 下山健作 1978. 青森県の歩行虫類 I. *昆虫学評論*, 32(1/2): 135-150.
- 下山健作 1978. 青森県のシテムシ科目録. さやばね, 4: 7-10.
- 下山健作 1978. ササキリギングチバチ. 平賀町資料館だより, 1: 4.
- 下山健作 1979. 青森県の歩行虫科, 2. *昆虫学評論*, 33(1/2): 121-137.
- 下山健作 1980. 採集記, 15. シモヤマギングチバチ. 陸奥新報, 11916号.
- 下山健作 1985. 昆虫. 平賀町誌. 平賀町. pp.115-150.
- 下山健作 1987. 青森県のニトベギングチバチ採集・巣の観察. 蜂友通信, 27: 46-57.
- 下山健作 1987. 蜂採りになった話(1). 青森県生物学会誌, 24: 5-7.
- 下山健作 1988. 青森県のクワガタムシ科. 青森県生物学会誌, 25: 6-9.
- 下山健作 1989. 青森県のコガネムシ類数種. *Saikaku*, 7: 31-32.
- 下山健作・福田 彰・阿部 東・菊池幸夫 1982. 昆虫. 津軽半島の自然. 青森県立郷土館. pp.107-453.

- 下山健作・福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・山内 智 1986. 昆虫・蜘蛛. 下北半島の自然. 青森県立郷土館. pp.84-142.
- 下山健作・福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・山内 智 1990. 昆虫類. 赤石川流域自然調査概要(4). 青森県立郷土館調査研究年報, 14: 12-59.
- 下山健作・福田 彰・阿部 東・菊池幸夫・山内 智 1991. 昆虫・蜘蛛. 赤石川の自然. 青森県立郷土館. pp.71-176.
- 下山揚功・佐々木勝男 1957. 昆虫. 青森県岩木川生物調査. Blakiston, 5(1): 18-23.
- Shiraki, T. 1911. Phasmiden und Mantiden japans. Annot. zool. Jap., 7: 291-331.
- 初宿成彦 2011. ゲンゴロウ上科. 初宿成彦編, 大阪市立自然史博物館所蔵 甲虫類目録(1), 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録, 43: 3-28.
- 外崎 誠 1952. 下北地方昆虫覚え書. Blakiston, 1(1): 28-30.
- 須田 亨 1993. トックリゴミムシ類の越冬習性について. 昆虫と自然, 28(8): 35.
- 末長春輝・山下大輔 2009. 青森県におけるアカガネネクイハムシの記録. 月刊むし, 457: 44.
- 杉 繁郎 1974. ヘリボシキノコトウを青森県で採集. 蛾類通信, 80: 331.
- 杉山澈朗 1986. ホソバスキョトウを青森県尻屋崎で採集. 誘蛾燈, 106: 141.
- 須摩靖彦・山内 智 1988. 釜臥山周辺のトビムシ相. むつ市文化財調査報告, 14: 163-178.
- 須摩靖彦・山内 智 2006. 岩木山のトビムシ類, 特にトビムシ類の垂直分布について. 青森自然誌研究, 11: 49-58.
- 須摩靖彦・山内 智 2013. 下北半島(大間町・佐井村)のトビムシ類, 特に漂着海草から広葉樹林までのトビムシ類の変化. 青森自然誌研究, 18: 51-60.
- 須摩靖彦・山内 智 2015. 下北半島のトビムシ類(Ⅳ), 特に陸奥湾沿岸部の海浜性トビムシ. 青森自然誌研究, 20: 39-47.
- 須摩靖彦・山内 智 2016. 津軽半島沿岸部のトビムシ類(I), 浅虫沿岸部から津軽半島竜飛岬までの海浜性トビムシ. 青森自然誌研究, 21: 65-71.
- 須摩靖彦・山内 智・野田坂佳伸 2003. 青森県恐山山地のトビムシ類, 特にカバイロユキノミの多型について. 青森自然誌研究, 8: 19-24.
- 杉木 隆 1986. 青森県のクロフカバシヤク. 青森の蝶, 9(2/3): 31.
- 鈴樹亨純 1986. 弘前市でヤマトキモンハナカミキリを採集. Cestrastrina, 18: 32.
- 鈴樹亨純 1988. 久渡寺・座頭石のカミキリムシ(6). Cestrastrina, 21: 2-10.
- 鈴樹亨純 1991. 岩木山で採集したヤツボシカミキリとジュウニキボシカミキリ. Cestrastrina, 26: 72.
- 鈴木正雄・木村忠良・奈良典明・虻川輝男・武田浩一・高橋英二・山内博尚・棟方 研・松野武敏・工藤昭三 1951. 青森県下北郡恐山地方生物調査記(2). 進化, 3(2): 1-7.
- 鈴樹亨純・奈良岡弘治 1989. 青森県のヒメサナエ. Cestrastrina, 23: 13-14.
- 鈴樹亨純・奈良岡弘治 2006. 再発見されたホンサナエ. Cestrastrina, 41: 1-3.
- Suzuki, H., Y. Sato & N. Ohba 2002. Gene diversity and geographic differentiation in mitochondrial DNA of the Genji firefly, *Luciola cruciata* (Coleoptera; Lampyridae). Mol. Phylogenet. Evol., 22: 193-205.
- 多田内 修・村尾竜起 2014. 日本産ハナバチ図鑑. 文一総合出版, 東京. 477pp.
- 高橋克成・村上義千代 2005. 碓ヶ関村津刈川で発見されたオナガサナエとヒメサナエ. Cestrastrina, 40: 3-4.
- 高橋雅彌 1988. 春秋林道周辺の蛾類. 秋田自然史研究, 23: 7-14.
- 高橋 滋 1999. 日本でもミツモンケンモンの生活史. 蛾類通信, 203: 43-46.
- 田村隆宏 2003. 青森県車力村で採集したゲンゴロウ類. 月刊むし, 386: 45-46.
- 田中一裕 1984. カマキリの卵の寄生蜂 オナガアシブトコバチについて. Cestrastrina, 13: 21-23.
- 田中真悟 2013. アオイボトビムシ属の採集記録と分布. 比婆科学, 247: 13-25.
- 田中政行 2016. ソトシロスジミズメイガ秋田県2例目の記録. 秋田自然史研究, 70: 6.
- 田埜 正・常木勝次 1969. 日本産ギングチバチ族の分布. 生物研究, 13(1/2): 29-35.

- 田埜 正 1984. 青森県の蜂. 蜂友通信, 18 : 15.
- 田埜 正・常木勝次 1969. 日本産ギングチバチ族の分布. 生物研究, 13(1/2) : 29-35.
- 田沢治美 2000. シマゲンゴロウの記録. 黒蜩, 2 : 2.
- 寺山 守 2012. 日本産有剣膜翅類検索表 12. アリマキバチ亜科 (Pemphredoninae) アリマキバチ族 (Pemphredonini) の種の検索, つねきばち, 22 : 1-31.
- 寺山 守 2016. 日本産有剣膜翅類目録 (2016年版). <https://terayama.jimdo.com/> 日本産有剣膜翅類目録/ (2018.12.1確認)
- 寺山 守・木原 章 1994. 日本産アリ類の県別分布図. 日本蟻類研究会. 63pp.
- 寺山 守・久保田敏・江口克之 2014. 日本産アリ類図鑑. 朝倉書店, 東京. 276pp.
- 寺山 守・須田博久 2016. 日本産有剣ハチ類図鑑. 東海大学出版部, 神奈川. 735pp.
- 寺山 守・田埜 正 2006. 日本産有剣膜翅類検索表 5. セナガアナバチ科 (Ampulicidae), アナバチ科 (Sphecidae) の検索, つねきばち, 7 : 1-17.
- 手塚尚利 1982. ヒゲブトハナカミキリを青森県で採集. 月刊むし, 136 : 34.
- 鳥羽明彦 2011. 日本のゲンゴロウモドキ採集の思い出. 西多摩昆虫同好会採集記シリーズ 9, 16pp.
- 徳本 洋 2000. カエルキンバエを探そう - 研究史と種の特長解説 -. はなあぶ, 10 : 35-41.
- 富永 修 1986. 東北地方のネクイハムシ, アトラス以後. 東北の自然, 7 : 4-7.
- 富岡康浩 1974. 八戸近傍で採集されたスズメガ. ビートル, 3 : 26-29.
- 富岡康浩 1974. 八戸市で採集されたベニモンマダラ, ケルクス, 4 : 7-8.
- 富岡康浩 1982. ほこりまみれの気になる記録. おとしぶみ, 7 : 4-5.
- 富岡康浩 1983. ルイヨウマダラテントウとオオニジュウヤホシテントウの産卵時期ならびに卵塊卵粒数について. Cestra, 11 : 6-12.
- 富岡康浩 1986. 「東京西郊型エピラクナ」の起源およびルイヨウマダラテントウの食性の地理的変異について II. 昆虫と自然, 21(11) : 18-21.
- 富岡康浩 1989. 三八地方のカメムシ. Ladybird, 3 : 9-45.
- 富岡康浩 2000. 青森県のハムシ類. Cestra, 35 : 25-60.
- 鳥倉英徳 1985. 雑草地で越冬するヤガ科幼虫 3 種. 誘蛾燈, 99 : 16-18.
- 土屋正雄 1931. 青森県の直翅目. 自刊, 弘前市, 49pp.
- 常木勝次・下山健作 1963. 十和田山アナバチ科・セイボウ科. 生物研究, 7(3/4) : 46-50.
- Tsuneki, K. 1956. Die Trypoxylon der nordostlichen Gebiete Asiens (Hymenoptera, Sphecidae Trypoxyloninae). Mem. Fac. Lib. Arts, Fukui Univ., Ser II Nat. Sci., 6 : 1-42.
- Tsuneki, K. 1958. On the discovery of *Nesocrabro* in Japan, with the description of a new species. Kontyû, 26(4) : 197-199.
- Tsuneki, K. 1959. Une nouvelle espece du Crabronien du Japan. Akitu, 8 : 83-84.
- Tsuneki, K. 1968. Descriptions and records of some Fossorial wasps in Japan (Hymenoptera Sphecidae) 2. *Trypoxylon konosuense* sp. nov. Etizenia, 27 : 3-5.
- Tsuneki, K. 1975. New cuckoo wasp (Hymenoptera Chrysididae) found in Japan. Kontyû, 43(1) : 29-35.
- Tsuneki, K. 1983. Discovery of the male of *Ceratocrabro shimoyamai* (Tsuneki). SPJHA, 27 : 29-32.
- Tsuneki, K. 1983. Revision of the holotype of *Odontolarra* (= *Lyroda*) *nigra* Cameron, with remarks on its subspecies and the description of a closely related new species from Japan. SPJHA, 25 : 57-62.
- Tsuneki, K. 1990. A new generic status of *Crabro nitobei* Matsumura, 1912, with the review of its biology genus *Spadicocrabro* gen. nov. SPJHA, 36 : 100-101.
- 常木勝次 1956. アギトギングチバチの種名, 分布及び雄の多形等について. 昆虫, 24(3) : 128-132.
- 常木勝次 1968. 蜂類研究手引|24数種アナバチ科の紹介. 生物研究, 12(3/4) : 65-68.
- 常木勝次 1970. 蜂類研究手引|25セイボウ科 II. 生物研究, 14(3/4) : 66-70.
- 常木勝次・下山健作 1963. 十和田山アナバチ科・セイボウ科. 生物研究, 7(3/4) : 46-50.

- 常木勝次・平井博政・飯田忠嗣・佐飛邦雄 1964. 十和田山の穴蜂科・青蜂科追加. 生物研究, 87 (4) : 60.
- 内田 一 1938. 日本産跳虫二新種クロマルトビムシとキボシアオイボトビムシ. 動物学雑誌, 50 (3) : 132-134.
- 内田 一 1952. 無翅昆虫雑記(I). 進化, 10 : 31-34.
- 内田 一 1953. トビムシモドキ科(昆虫, 粘管目)の3属 *Tetrodontophora*, *Lophognathella*, *Homaloproctus* 間の関係について. 動物学雑誌, 62(2) : 25-28.
- Uchida, H. 1952. A new genus of Sminthuridae from Japan (Collembola). Mushi, 24(1) : 1-4.
- Uchida, H. 1953. On three new species and a new form of Japanese Sminthuridae, with special reference to the dentalsetae. Annot. Zoo. Jap., 26(1) : 1-13.
- Uchida, H. 1969. Studies on the arboreal Collembola I. Results of faunal survey of Mt. Hakkoda area, IBM main area. Sci. Rep. Hirosaki Univ., 16(1/2) : 19-29.
- 上原一恭 2007. オオチャイロハナムグリを七戸町大坪川で採集. *Celastrina*, 42 : 54.
- 上原一恭 2008. 青森県におけるカミキリムシの記録. *Celastrina*, 43 : 25-36.
- 上原一恭 2009. 青森県におけるカミキリムシの記録(2). *Celastrina*, 44 : 40-44.
- 上原一恭 2011. 青森県におけるカミキリムシの記録(4). *Celastrina*, 46 : 13-16.
- 上原一恭 2012. 青森県におけるカミキリムシの記録(5). *Celastrina*, 47 : 77-83.
- 上原一恭 2013. 青森県におけるカミキリムシの記録(6). *Celastrina*, 48 : 51-56.
- 上原一恭 2013. 青森市におけるウマノオバチの記録. *Celastrina*, 48 : 50.
- 上原一恭 2015. 青森県におけるミヤマキシタバの記録. *Celastrina*, 50 : 25.
- 上原一恭 2016. 青森市でのウマノオバチの記録. *Celastrina*, 51 : 10.
- 上原一恭 2017. 青森市におけるクロフカバシヤクの記録. *Celastrina*, 52 : 31.
- 上原一恭・上原康己 2017. 八甲田山におけるヒゲジロホソコバネカミキリの記録. *Celastrina*, 52 : 29-30.
- Uéno, S. 1975. Occurrence of a new endogean trechine beetle in the Shimokita peninsula, northern Japan. Bull. Natn. Sci. Mus. Ser. A. (Zool.), 1(2) : 115-118.
- Uéno, S. 1993. Two new Endogean Trechines (Coleoptera, Trechinae) from the Shirakami Mountains, Northeast Japan. *Elytra*, 21(1) : 179-186.
- Uéno, S. 1994. New Oculate *Trechiana* (Coleoptera, Trechinae) Mainly from Non-volcanic Mountains of Northern Honshu, Northeast Japan. *Elytra*, 22(1) : 23-44.
- Uéno, S. & A. Yoshida 1966. A presumptive prototype of the *Trechoblemus* Complex. Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 9(2) : 76-83.
- 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 1985. 原色日本甲虫図鑑(II). 保育社, 大阪. 514pp.
- 漆館智恵子・久保 瞳・中島晶子・戸花 豊・水梨勝広 1978. 昆虫班活動報. *Paulownia*, 11 : 44-66.
- 碓井 徹 1998. *Gerris (Gerris) lacustris* キタヒメアメンボ(新称)の本州北部からの発見. *Rostria*, 47 : 43-44.
- 碓井 徹・疋田直之 2001. キタヒメアメンボの本州における新産地. *Rostria*, 50 : 37-39.
- Usui, T., S. Miyamoto & M. Hayashi 1997. Occurrence of *Gerris (Gerris) lacustris* (Heteroptera, Gerridae) in Hokkaido, Japan. *Jpn. J. Ent.*, 65 : 217-218.
- 和田干蔵 1933. 我が郷土のブラキストン線. 青森師範学校郷土号, 1 : 161-178.
- Watanabe, C. 1937. A contribution to the knowledge of the braconid fauna of the Empire of Japan. *Jour. Facul. Agric. Hokkaido Imp. Univ.*, 42 : 1-188.
- 渡邊福壽 1934. 青森県特産の昆虫類(1). 青森博物研究会時報, 1(2) : 1-7.
- 渡邊福壽 1935. 十和田八甲田の動物. 青森営林局. 114pp.
- 渡邊福壽 1937. 其一鞘翅目金亀子科. 青森営林局. 森林動物相調査報告第一輯, 101pp.
- 渡辺黎也・大庭伸也 2019. 青森県大鰐町におけるシマゲンゴロウの記録. 月刊むし, 586 : 48.

- 矢後勝也・平井規央・神保宇嗣（編） 2016. 日本産チョウ類の衰亡と保護 第7集. 日本鱗翅学会, 東京, 352pp.
- 山田雅輝 1983. 青森県のスズメバチ上科. 青森県生物学会誌, 21:1-5.
- 山田雅輝 1992. 青森県のケアシハナバチ科. 東北昆虫, 30:1-3.
- 山田雅輝 1996. 故福士襄博士採集による北奥羽の有剣膜翅類. *Celastrina*, 31:31-40.
- 山田雅輝 1997. 青森県の有剣蜂相, 2. セイボウ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 2:31-34.
- 山田雅輝 1997. 青森県の有剣蜂相, 3. ドロバチ科・スズメバチ科の分布補遺. *Celastrina*, 32:37-46.
- 山田雅輝 1997. 青森県産ヤスマツフシダカコンボウハナバチ. *Celastrina*, 32:46.
- 山田雅輝 1997. シロスジフデアシハナバチの初記録. 青森自然誌研究, 2:35.
- 山田雅輝 1998. 青森県の有剣蜂相, 4. ヒメハナバチ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 3:41-49.
- 山田雅輝 1998. 青森県の有剣蜂相, 5. アナバチ科の種類と分布(1). *Celastrina*, 33:37-51.
- 山田雅輝 1998. ハエを狩るシモヤマギングチ. 東北昆虫, 36:14.
- 山田雅輝 1999. 青森県産ガロアムシの成虫について. 青森自然誌研究, 4:48.
- 山田雅輝 1999. 青森県の有剣蜂相, 6. コシブトハナバチ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 4:39-47.
- 山田雅輝 1999. 青森県の有剣蜂相, 7. アナバチ科の種類と分布(2). *Celastrina*, 34:27-44.
- 山田雅輝 2000. 青森県の有剣蜂相, 8. ミツバチ科及びヤドリコハナバチ類の種類と分布. 青森自然誌研究, 5:55-59.
- 山田雅輝 2000. 青森県の有剣蜂相, 9. ベッコウバチ科の種類と分布. *Celastrina*, 34:93-102.
- 山田雅輝 2000. 青森県から初めて記録するハバチ亜目の10種. 青森自然誌研究, 5:53-54.
- 山田雅輝 2000. 昆虫類（ハチ類）. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－. pp.182-276.
- 山田雅輝 2001. 青森県のガロアムシとナナフシに関する知見. 青森昆虫談話会講演資料. 2pp.
- 山田雅輝 2002. 青森県のナナフシ科に関する知見. *Celastrina*, 37:79-80.
- 山田雅輝 2004. 弘前市久渡寺山のアリ相. 青森自然誌研究, 9:49-51.
- 山田雅輝 2006. 筒トラップによる岩木山麓並びに久渡寺・座頭石山地における借坑性ハチ類の調査. 青森自然誌研究, 11:11-17.
- 山田雅輝 2008. 白神山地の有剣ハチ類, 2. 一般採集による種類と分布. 青森自然誌研究, 13:11-16.
- 山田雅輝 2008. 小泊でコイケアワフキバチを発見. 青森自然誌研究, 13:18.
- 山田雅輝 2009. 白神山地の有剣ハチ類, 3. アリ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 14:11-13.
- 山田雅輝 2010. 昆虫類（ハチ類）. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. pp.234-304.
- 山田雅輝 2010. 白神山地の有剣ハチ類, 4. 一般採集による種類と分布調査. 青森自然誌研究, 15:11-17.
- 山田雅輝 2010. トビナナフシ2種の新しい産地. 青森自然誌研究, 15:18.
- 山田雅輝 2010. ヤスマツトビナナフシ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. p.255.
- 山田雅輝 2011. 白神山地でオオナギナタハバチを確認. 青森自然誌研究, 16:36.
- 山田雅輝 2012. 青森県産ハナバチ類5種の新産地. 青森自然誌研究, 17:67-68.
- 山田雅輝 2013. スズメバチが好むケヤマウコギの花. 青森自然誌研究, 18:35.
- 山田雅輝・棟方明陽 1996. 青森県の有剣蜂相, 1. ハキリバチ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 1:3-7.
- 山田雅輝・山田奈緒子 2016. 西津軽海沿い地域の有剣蜂類調査, 3. 南部及び北部における筒トラップによる調査. 青森自然誌研究, 21:130-132.
- 山美幸子・船場善幸・袴田裕国・米内祐逸・佐藤光昭 1986. 三戸町西部方面の昆虫1985. *Paulownia*, 18:34-45.

- 山本大二郎 1959. 青色のハチ, ルリジガバチの生活. 日本昆虫記 I. 講談社, 東京. p.7-77.
- 山本直樹 1996. 1995年ゲンゴロウ類採集記. 越虫, 26: 13-25.
- Yamane, S. 1990. A revision of the Japanese Eumenidae (Hymenoptera, Vespoidea). *Insecta Matsumurana*, 43: 1-189.
- 山内博尚・外崎 誠 1957. 青森県産蝶目録. *Larva*, 9: 1-16.
- 山内 智 1981. ダイコクコガネの記録. よし, 44: 17.
- 山内 智 1983. ダイコクコガネの採集記録. よし, 47: 7.
- 山内 智 1989. むつ市の昆虫類. むつ市史自然編. pp.284-328.
- 山内 智 1990. 昆虫・蜘蛛. 白神山地自然環境調査報告書 (追良瀬川流域). 青森県. pp.80-141.
- 山内 智 1994. 昆虫類. 白神山地の自然. 青森県. pp.91-105.
- 山内 智 1994. 青森県西津軽郡におけるルイヨウマダラテントウの食性とジャガイモ畑への侵入. 日本応用動物昆虫学会誌, 38(3): 191-193.
- 山内 智 1996. 青森県のテントウムシ科. 青森自然誌研究, 1: 17-23.
- 山内 智 1996. フトクチヒゲヒラタゴミムシの産地について. 青森自然誌研究, 1: 24.
- 山内 智 1996. 昆虫調査. 県民の森梵珠山自然環境調査報告書. 青森県. pp.69-118.
- 山内 智 1996. 世界遺産白神山地考察(26)白神山地の固有種. れちおん青森, 210: 53.
- 山内 智 1999. イグチケブカゴミムシの記録. 青森自然誌研究, 4: 50.
- 山内 智 1999. オオチャイロハナムグリの記録. 青森自然誌研究, 4: 58.
- 山内 智 2000. 昆虫類 (蛾類), 青森県の希少な野生生物-青森県レッドデータブック-. pp.182-276.
- 山内 智 2000. 中里町のゲンジボタルの記録. 青森自然誌研究, 5: 8.
- 山内 智 2004. 青森市のヤスマツトビナナフシの記録. 青森自然誌研究, 9: 38.
- 山内 智 2007. ゲンジボタルの生態と保全. 希少野生生物保護・保全対策報告書. 青森県. pp.29-30.
- 山内 智 2011. 青森県南部の蛾(II). 青森県立郷土館研究紀要, 35: 23-30.
- 山内 智 2014. 青森県南部の蛾(V). 青森県立郷土館研究紀要, 38: 9-14.
- 山内 智 2014. オオゴキブリ. ふるさとの宝物67. 東奥日報. 44274号.
- 山内 智 2018. 青森県南部の蛾類(IX)-福田進コレクション-. 青森県立郷土館研究紀要, 42: 1-12.
- 山内 智・阿部 東 1989. 昆虫類. 白神山地自然環境調査報告 (大川・暗門川流域). 青森県. pp.84-144.
- 山内 智・亀田 満 1999. 青森県八甲田山の蛾類. 青森自然誌研究, 4: 35-38.
- 山内 智・三上春文 1998. 下北郡のゲンジボタルの新生息地について. 青森自然誌研究, 3: 59.
- 山内 智・宮 彰男 2008. 青森県三沢市仏沼のマークオサムシの記録. 青森自然誌研究, 13: 66.
- 山谷文仁 1936. 十和田昆虫採集旅行記. 昆虫界, 4: 811-817.
- 山谷文仁 1938. 青森県産昆虫目録 (承前). 昆虫世界, 42(5): 17-20.
- 山谷文仁 1938. 青森県産鍬形虫科に就いて. 虫の世界, 2(7/8): 19-21.
- 山谷文仁 1939. 青森県産昆虫目録 (承前). 昆虫世界, 43(8): 13-16.
- 山谷文仁 1939. 泥炭より採集せるオサムシに就いて. 関西昆虫雑誌, 5(3): 8-11.
- 山谷文仁 1939. 青森県産ハンミョウ科目録. 虫の世界, 3(3/4): 11-14.
- 山谷文仁 1943. 青森県の昆虫採集案内. 昆虫世界, 47: 141-142.
- 山谷文仁 1977. オオチャイロハナムグリとオニホソコバネカミキリの話. *Coreana*, 17: 18-20.
- 山谷文仁 1989. マークオサムシ. 東日本のオサムシ. 東日本オサムシ研究会. pp.61-71.
- 山谷文仁・草刈広一 1982. 東日本のオサムシ分布地点表(1)青森県. 東日本オサムシ研究会連絡誌, 2: 18-23.
- 山崎一夫・八木 剛 1992. 青森<津軽/下北>のゲンゴロウ類, ガムシ類~夏合宿, 追跡調査の成果~. うんころがし, (61): 3-7.

- 矢野高広・岸田泰則 2011. スズメガ科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京, pp.327-339.
- 安永智秀・高井幹夫・川澤哲夫・中谷至伸 2001. 日本原色カメムシ図鑑第2巻. 全国農村教育協会出版社, 東京, 351pp.
- Yasuno, M. 1963. The study of ant population in the grassland at Mt. Hakkoda. 1. The distribution and nest abundance of ants in the grassland. *Ecological review*, 16(1) : 83-91.
- 安富和男 1973. オオニジュウヤホシテントウ群をめぐる最近の諸問題. *昆虫と自然*, 8(6) : 2-8.
- 安富和男 1974. オオニジュウヤホシテントウ群の問題点. *動物分類学会会報*, 47 : 1-4.
- 安富和男 1976. 東京西郊Epilachnaの分布地域と食性について. *Kontyû*, 44(1) : 111-114.
- 安富和男 1977. オオニジュウヤホシテントウ群に関する問題点をめぐって. *昆虫と自然*, 2(11) : 14-19.
- 安富和男 1991. カメノコハムシ類に関する思い出と諸問題. *青森の蝶*, 10(2) : 114-123.
- 安富和男・富岡康浩 1988. スジキイロカメノコハムシ記録と食草. *昆虫と自然*, 23(13) : 8.
- 安富和男・富岡康浩 1990. 青森県で発見された未記録のカメノコハムシ*Cassida stigmatica*について. *昆虫と自然*, 25(6) : 23-24.
- 安富和男・富岡康浩・後藤純子 2011. 希少種イカリアオカメノコハムシの分布, 形態と食性. *岩手虫乃會會報*, 38 : 1-2.
- 安富和男・富岡康浩・蒔田増美 1997. キイロカメノコハムシに関する知見. *昆虫と自然*, 32(6) : 31-34.
- 安富和男・富岡康浩・蒔田増美 1999. キイロカメノコハムシに関する知見 (第2報). *昆虫と自然*, 34(10) : 32-34.
- 横山裕正 2002. 岩木山弥生でのホソハンミョウ・マガタマハンミョウの採集記録. *Celastrina*, 37 : 102.
- 横山裕正 2003. 青森県におけるカバシヤクの採集記録. *Celastrina*, 38 : 10.
- 横山裕正 2008. ワタラセハンミョウモドキのテネラル個体採集例. *Celastrina*, 43 : 86.
- 吉田正隆 2014. 利尻島北部の海岸からツガルホソシデムシ. *利尻研究*, 33 : 65-66.
- 吉松慎一 2011. ヤガ科ヨトウガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京, pp.368-384.
- 吉武 啓・栗原 隆・吉松慎一・中谷至伸・安田耕司 2011. 農業環境技術研究所所蔵の土生昶申コレクション (昆虫綱: コウチュウ目: オサムシ科) 標本目録. *農業環境技術研究所報告*, 28 : 1-327.
- 吉富博之・松井英司・堀 繁久・秋田勝巳・山川雄大 2001. レッドデータ水生昆虫類の分布記録Ⅰ. エゾコガムシの分布記録のまとめ. *甲虫ニュース*, 135 : 7-9.
- Yoshiyasu, Y., 1985. A systematic Study of the Nymphulinae and the Musotiminae of Japan. *Scient. Rep. Kyoto prefect. Univ. (Agric.)*, 37 : 1-162.
- 吉安 裕 2013. ツトガ科ミズノメイガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅳ (那須義次・広渡俊哉・岸田泰則 編著). 学研教育出版, 東京, pp.400-408.